都々逸翻刻

菊池真一

新吉原流行頓痴度止逸（弘化二年序）

新吉原流行
頓痴度止逸」（表紙）
通家合作
〔流行〕頓痴度止逸
満光堂寿梓」（見返し）
頓痴度止逸序
度止逸の小唄は。何時の比。何此の土乙が。謡ひ初めけん。度は怒激度量の度でもなく。どゑらひといふ上方言にして。逸は放逸の逸に似て。いつ来なんすの廓訛としられたり。されば其唱歌たる遊冶の事のみ多く。思ひを述たる殺し文句には。はやりをの勇をもころりとさせ。眼に見へぬ胸の中をも人にしらせて。仇し心の余情を含み。どうぞ察しておくん南枝の梅が香も。薫り床しき移香の。袂」（一オ）に残る風情あり。此稗史は一日妓女封間等が席上に戯れし。意気なすさみの新文句なり。さくといふも花の縁。うたふといふも吟詠の。彼鄭声の楽と雖。方に今の世に伝へたらば争ひとり遠避る事あらむや
往時浪華に客たりし双枕亭の主人其席上に在て漫に筆を採
乙巳夏日　　好色外史」（一ウ）
どうぞあいきやうこぼさぬやうとつげばうちばのめはちぶん（つる）
うらずかわずのあいさつしたがどうで女はついまける（よそ）
こゝろいきをば小うた？つくりとりまはしにもきかせたひ（荻江露助）」（二オ）
きれてしまつてさつぱりしたと口と心はうらおもて（ふく）
いへばいふほどくどくはきけどしんにほれゝばぐちになる（林屋鯉昇）
すてたふみでもひろつておけばやくにたゝせるときしもあらう（でん）」（二ウ）
やめたさけでもののめならのまふかみのばちをもいとやせぬ（荻江幸二）
くらうくげんはいとわぬけれどぬしのこゝろがたのまれぬ（たみ）
百になつてもおやぢはこわいばちがあたつていまのざま（かつ）」（三オ）
孝にうられた浮河竹も恋のふちせに身はしづむ（音羽屋小三次）
今が今にもかへせじやないが人にふぎりはしたくない（都六二）
とてもうきながたつたるうへはぬれぬさきこそつゆをもいとへ（よし）」（三ウ）
ぐちとしりつゝ甚介いへばいひわけするもやはりぐち（とり）
夕日まばゆき土手八丁もなんのくもなきひとまたぎ（宇治新口）
すだのかわかぜはださむければつがひはなれぬうきねどり（よね）」（四オ）
ちよきのけんさき北へとむいててつもこがねもすひよせる（？や）
今宵あわふと三まひがたはたましいちうをとびゆくこゝろ（西川林蔵）
君に大門にたび〳〵くゞれにんげんわづかに五十けん（岸沢松蔵）」（四ウ）
あれよあんまりうわきがすぎてすへのところがおもわるゝ（ろく）
のらりくらりと月日をおくりうなぎのぼりが身のつまり（富本仲太夫）
わたしやこれほどくらうをしてもおまへ平気でたかいびき（すわ）」（五オ）
すゞはつけねどついなるからに又くびたまへかぢりつく（みせ）
ひとりだるまとさとつて見てもきるにきられぬくされゑん（のせ）
ねこによふにてきはいゝけれどついめのようにきがかわる（田子七平）」（五ウ）
こぬか三合たとへのとおりもふむこいりはこりはてた（都民中）
あきのそらとてあてにはならぬ日はてりながらあめがふる（こと）
いつそやぼならくらうはせまいすいが身をくふよのたとへ（桜川三考）」（六オ）
ぬしはいつまでやもめでゐてもどうせひとりでおくものか（ほの）
せけんしづまりまくらにつけどあのつめひきがみゝにつく（清元巴満太夫）
茶だち酒だちひのものだちもかなへてたまへ心のねがひ（ゑひ）」（六ウ）

こんなやさしい男の手でもしやくをおすのはおまへにかぎる（くに）
故郷はなれて他人の中もおまへひとりがちからぐさ（松山宮子）
末は女夫（めうと）と口ではいへどうわきやまねばあてにはならぬ（いろ）」（七オ）
わかしゆがほでもかげまにやならぬしりのつまりが気にもなる（むめ）
すいをとうしてねたふりしてもたぬきねいりはゆだんがならぬ（みわ）
かごのとりとてきうくつなれどたかとびをするときもある（丸山紫暁）」（七ウ）
かたい人でもいろのみちはべつよ恋はしあんのかきのそと（竹藤次）
むかしぜんせいつくした身でもそとわ小町のすへをみよ（かね）
しごとおぼへてたちぬいせうと女房きどりのしたごゝろ（むら）」（八オ）
かたのはるのであんまをよべば目のある人で気まゝにならぬ（とし）
うきかわ竹のながれの身でもまことなければこゝろがたゝぬ（冨本清次）
ひとりつくゞ〳〵しあんをすれば？をだましたばちでもあらふ（いわ）」（八ウ）
いくらほれてもぬしあるおまへどうぞさらせてわしがつま（りき）
いかにとしはがゆかないとてもあとさきみへぬ恋のやみ（ます）
かぼちややらうとかげではいへどおつにうまみのあるおとこ（荻江千代作）」（九オ）
ぬしにまかせた五尺のからだわつて見せたいむねのうち（たね）
はいをならしてむだがきするもぬしの名がしらさきへかく（うら）
二度はしなぬとかくごはしても海川はいやうき名をながす（冨本与三太夫）」（九ウ）
ぬしとそひねのたまくらさめてそのあと見んとかいまきかぶる（さわ）
むかふ見ずとてからてゞあがりはてはしまつやの手にかゝる（さき）
思ふお方は山の手うまれこひし（小石）かわ（川）い、名もあれば（清元政次）」（十オ）

よしこの万題集　弐編（嘉永四年。柏原屋義兵衛等版）

よしこの万題集　弐編
長谷川貞信」（表紙）
楊柳園粂児選」（見返し）
自序
当唱歌の濫觴は慶長の昔其山翁の作を初として貞享元禄の比三都にもてはやし星霜数百年の今にいたり此道に」（一オ）心垢琢輩（うきみをやつすもの）すくなからざれば四時の名吟悟道をす、め則体（さくれい）大きなる？（とき）は虚空より広くちいさき？（とき）は芥子の中にも所有て風雅に導き」（一ウ）恋慕の思ひを頌（のぶる）といへども色好の為ならず心を禁め身を脩る一徳を得ものなり
嘉永四辛亥孟春」（二オ）
（絵）」（二ウ）
（絵）」（三オ）

袖かゞみ　三下り
秋はあはれとたがをしへけんなさけもあまるおもひごとむすぶゑにしの身にしみ〳〵とこがれよるべの露にぬれ色をますほの花すゝき宵にはうつすそでかゞみ
松島検校　調
楊柳園　作」（三ウ）
冨士もなすびもさめては夢よおもふうつゝは外にある（京巻丸）
かほのもみぢはもふ恋風にやがて落葉の下ごゝろ（桃人）
更る程なほ恋しさ増りまたぬ夜とては無けれど（平政）」（四オ）
首尾を待身かアノ蔦かづら軒をつたふてとがめられ（児一）
かよふ足元矢をゐるごとし心はり弓ぬしをまと（河内喜来）
ちらばひとつと紅葉にまとひともに色もつ蔦かづら（京里馨）」（四ウ）
風の手くだにツイのせられて梅も柳に香をとめる（鯉昇）
しのび歩行をする梅が香も風の手引にさそはれて（六雀）
フツト見染た迷ひのたねが人の口まで花が咲（枝蝶）」（五オ）
なんのもつれに糸巻なげてとけぬ辛気に気がもつれ（アヤ夢丸）
露もかひなく雫ときえてやどりかねたるかれ柳（一思）
風がもつれのつばきを付て今は柳のすぢもたつ（十成）」（五ウ）
葛城の神じやなけねどかへらにやならぬ愚知も岩はし夜が明る（京流守）
よい首尾をしめしまいらせ気は急ぎつゝ送る文さへはしり書（なのは）
首尾をいそいで書玉章に筆もつまづくこゝろぜき（桃人）」（六オ）
つゝむ色香のいつしかもれてゑがほ見らるゝその、梅（林馬）
人にとはれてする言わけもくらき恋路のさぐり足（金槌）
千草結びにうき名が立て人にことわるときほどき（なのは）」（六ウ）
花を雪じやと思ふてなりとかへしとむない春の雁（江辺）
色気咲りを見のがす花よゆびもさゝれぬいばら垣（逸外）
花もすげなく生れたならば垣もへだてもいるものか（玉之）」（七オ）
ふかい浅いの流もそれとせぶみしらずに登る鮎（一思）
心ぼそさの一筋竹といふてそなたは釣にかけ（児丸）

なげだしていつか思ひを岩はな桜色に出たるこゝろばへ（都来）」（七ウ）
ひとめ見るより飛立おもひ籠の鳥かやまゝならぬ（青一）
いつ迄もちらぬ心と盛の花も濡が重なりやかはる色（淀紫好）
風にすねたる尾花が袖も露の涙がおきあまる（笹人）」（八オ）
梅に鶯とまるは常よそれにも迷ひの枝が有（京巻丸）
おそわれましたもくやしい事で夢に見てさへまゝならぬ（十成）
花の間は来て囀りてちればちよつともきなこ鳥（イクセ小蝶）」（八ウ）
身と鞘としかと錆付この恋口は力づくではなれまい（安楽）
風のたよりにのぼりし鯉もだしにしられてふくれづら（定丸）
水のさしてが有つぢうらかはぜてくろふになる行燈（一思）」（九オ）
あはぬ夜とあきらめいたのによき辻占を聞て思はず罪つくる（喜寿）
はれぬ心も浅間が嶽か恨みいはふの気がもゆる（莨花）
あつゐなさけが身にそひぶしの伽もうれしき竹婦人（亀寿）」（九ウ）
思ひおもはれ気は業平のぞく井筒もふかいなか（山猫）
うしろ姿をへだたる霧よ朝じめりする我たもと（五橋）
寒い世帯の身に秋が来て膝になみだの落し水（白燕）」（十オ）
忍ぶ切戸にこだはる梅よすいといはるゝ身ではない（花人）
恋に引れて鳴子も今はそれとひそかに忍ぶ音（青一）
世間しらずと言葉のはしに見さげられたる谷の花（都来）」（十ウ）
つゝむひ汗の互ひにもれて人がうき名を夕すゞみ（松寿）
濡合た深いきのふも浅瀬のけふと変る流のうわき水（露月）
五月雨のくもりがちなる思ひもはれて今は涼しき夏の月（不粋）」（十一オ）
手いれする身ははやませたつる色香ふくみしおぼこ菊（なのは）
庭の籬に身をよりそへてうちの様子を菊ばたけ（トコヤ花流）
今宵あはずはいつ逢坂と思や関こむ胸の癪（下手丸）」（十一ウ）
弾に引れぬ手事となりて胸の調子も定まらぬ（かなめ）
なんのへちまといはんすけれど水になろかと身がやせる（逸外）
親骨のいけんこたへて誠の地紙要なぞして末広う（松寿）」（十二オ）
なまぜ聞ずば迷もせまい宵に一声ほと、ぎす（不粋）
なまぜ思案のともし火けして虫といひたい時もある（京人丸）
どんな苦労もいとひはせぬと胸を合したかざり鯛（児丸）」（十二ウ）
指につば付毛をなで上ていらやようなる筆仕事（桃人）
いやなあられはつれなくはねて雪とそひ寐の園の竹（江辺）
とけぬ思ひの雪には庭の松もすがたがやつれだす（松明）」（十三オ）
筆は箒になる迄文をやれど枕はちりの山（母雀）
はらふ桜につもりし塵もかゝる此身にます苦労（ヨド紫好）
秋の花かと黄菊がまはり主を見るめの猿まなこ（古木）」（十三ウ）
へんな雲から気はかゝり舟もしや早てがあろふかと（逸外）
つらや流のうきねもよそへかよふ千鳥にますおもひ（白燕）
君に思ひをかけはしなれどわたりかねたる丸木橋（我丈）」（十四オ）
露も草葉に思ひをかけたかひも嵐が吹ちらす（柳糸）
松はつれなきアノ心ねとすねた柳のおよびごし（鯉昇）
まとひ付たる朝がほさへも無気に引分られもせず（恐悦）」（十四ウ）
抱て引よせほどよく組はほんに子どもの背なの紐（児門）
まねく薄をそれとはしらず雲にかくれて越る月（青一）
遂た逢瀬の寐耳に聞ばほんに水鶏も鳥の声（昭尚）」（十五オ）
ヲヤ散た桐の一葉に月影さしてかほもはづかしひざまくら（ヘラ八）
立聞の下が三尺へるともよしなたとへならくへ落るとも（児門）
おぼこ菊さへはやませ垣にいつか赤らむ花の顔（逸外）」（十五ウ）
しぬのいきるの碁詰になるもこいし〳〵のつもりがら（ナゴヤ花流）
やぼなお客と小陰で笑ひ虎をあざむく古きつね（重一）
心尽して打込からは苦労するのもたがひせん（児一）」（十六オ）
かぎり有身のかぎりをしらでまてばあだしの鐘の声（笑長）
主のつれない心は忘れ明行空がうらめしい（芦友）
ねむる海棠に情をしらぬやぼな胡蝶がゆりおこす（児一）」（十六ウ）
逢て別る、事こそつらやあはぬつらさの事忘れ（？一）
今朝の別れに気は残り蚊の昼も小隅で忍びなき（京鼠口）
花はちれども実はなるものといへどあきらめわしやつかぬ（林馬）」（十七オ）
秋が来てさへかはらぬ色を君にみせたい常盤草（逸外）
千代もかはらぬ色みすかしてとかくそふかや松と月（鯉昇）
しのぶ恋路の関とはしらずにくや啼やむ虫の声（林馬）」（十七ウ）
おもひ有明しら菊さへもめには露もつ花の色（桃人）
どこへとりつく思案もなしにぬけて出て咲ふぢの花（京梅月）
名残をしげに此きぬぎぬを横に寐てゐる暁の雲（一思）」（十八オ）

追加

天のうきはし世わたる為と恋にか？ぎの道がつく（楊柳園）」（十八ウ）

嘉永四孟春

書肆　大阪　播磨屋喜助

伊予屋善兵衛

心斎橋唐物町

柏原屋義兵衛」（裏見返し）

撰ど、一ツ　三べん（文久二年。広岡屋幸助版）

撰ど、一ツ　三べん

清元ぶし一中ぶし

義太夫長うた

常盤津大津へぶし

富本ぶししん内ぶし

上方うた本てうし

その八ぶしあふむ石」（表紙）

葉うた惣まくり

ほど吉著

続て四編出板

無るい」（見返し）

しん作　いもせ山　大津へ

妹背山ごてんばに糸道付ルゑぼしおり求女（もとめ）を恋したふ酒やの色娘お三輪に行あふとうふ買そゝくさおしやるおく御てん見渡ス向ふへ大ぜいが夫トみるよりなぶりかけよはみへ附込むりしよぞう（お三輪コトバ）「サア馬士のうたならうたいましよト「なく〳〵泪立上り竹に雀と一トすじの心をきたへし金輪五郎」（一オ）

てい女立たり気がねをしたり〔（しん内白藤源太）いとしとおもふ心から三とせ此方こなさんおぼへがござんせういけんがましい事とてはついに一度もいはぬのはひよつと心にさはりなばあいそがつきそらどうせうと〕人にやこけだといわれたり（八丁ホリ　瓢多長）」（一ウ）

三味せんの駒のきん所でむまれたわたし〔（清元二人奴）そもや二人が中々は心でこがれまちあかしあふて嬉しき戻りかごたがいに胸をうちあけて気も合ほれのすいたどしかはるまいぞと云しての神々さんへちかいにかけ〕ばちでもあたらにやきれやせぬ（八丁ホリ　千好）」（二オ）

月にむら雲花にはあらし〔（あふむ石女清玄）ア身は雲水の定めなき仏につかへ奉来せをねごふも何ゆへぞい、なづけせしおんかたのこの世になきとき、しゆへのぞみなき身とあまほうしたゞなさけなきは清水にてお目」（二ウ）にか、りし頼国さますぎゆきたもふとさたありし松若様の姿ゑににたこそことはりげんざいのア、わすれたい〳〵わすれんものとねがふても心のまよいかあさましやたゞわすられぬやぶうぐいすはほけ経とと経よむ鳥の花をこふまだあのやうになきつれて花を見すて、かへる厂ア、心々の世の中じやなア〕思ふおかたにやぬしがある（千蝶）」（三オ）

（本てうし）君は今ごろこまがたあたりないてあかせし山ほと、ぎす月の顔見りやおもひだす

（本てうし）かたいやくそくわがつまばしよよい首尾の松またのごげんをまつち山マアかねがふち」（三ウ）

はらた、せぐちをいうのもみなじつぎから〔（しら糸もんどやんれぶし）これさわがつまもんどさんわしが女房でやくのじやないが十九二十の身じやあるまいし人にいけんをいう年頃でけふもあすもと女郎かいばかり〕とふざの花なら言はせぬ（八丁ホリ　千蝶）」（四オ）

人はちよいと見てちよいとほれするが〔（常盤津将門）さがやおむろの花ざかり浮気な蝶も色かせぐくるはのものにつれられて外めづらしき嵐山ソレおぼへてか君さまのはかまも春のおぼろぞめおぼろげならぬ殿ぶりを見初て染て恥かしの森の下露思ひは胸に〕わたしやよく見てよくほれる（古キ店　千賀）」（四ウ）

染色づくし　大津へぶし

おまへを見染たその日より紺ひらさんへむりいふてしゆびのたよりを松葉いろわたしが黒（くろふ）をするをかは色とすこしはさつして下さんせおまへはしら絹の顔をして度々送る玉づさをみんなほご染にしやしやんすをいろ〳〵気をもみやう〳〵なれ染て色になり（八丁ホリ　上千）」（五オ）

ほれちやいれどもい、出しにくい〔（常盤津小ひな）秋のほたるの身をこがすはかないこいじやないかいな〕さきの手出しを待ばかり」（五ウ）

（はうた　おまへといつしよにくらすなりのか得歌）

（本てうし）おまへの事を苦にやんで身は三味せんの糸柳かぜのたよりをまつばかりゆびおりかぞへ袖しぼる色のならいかやるせなや」（六オ）

（本調し　葉うた）たつた川べに船とめてまだうらわかきむすめ気のどふいうてよかろやらしんき枕のそらねいり（中橋住　喜三）」（六ウ）

あきらめましたよどふあきらめた〔（常盤津高尾）うつり香のこるとこの内たれにかみせん化はひ坂風がもてくるしのびねの姿そゞろのうき名たつ〕あきらめられぬとあきらめた」（七オ）

（本てうし　はうた）夕ぐれにながめみやこの隅田川つきにふぜいをまつち山ほがけたふねがみゆるぞへあれ鳥がなく〳〵みやこに名所があるわいな（テツホウツ　キチ）」（七ウ）

（本てうし　はうた）けさの雨にしつぽりとまたいつゞけにながしいをみしこふくらす床の内紙を引さきまゆげをかくしもしへこちの人へわたしのかへ名はなんとしよふあれねなんすなおきなんし明ぼのならぬくれのかね（ニノンマ　於栄）」（八オ）

（ながき夜のか得歌）蔵まへの御縁日みちの中ばに立どまり御しんぞふさまや旦那様御ごうせうや御なさけにあなたがた目くらたすけて下さんせお手元はごめんどふさまながらなにもごせうでムり升（八ウ）

くぜついふてもねがほれたどし〔（常盤津しのぶ売）二世のかためとだき〆てつい手枕のそ、けがみ〕とけて嬉しきねやのうち（八丁　千蝶）」（九オ）

（三下り　葉歌）秋の花には桔梗かるかやおみなめしそしてあやめ菖蒲や杜若ほつそりと藤ばかまあれ朝顔のしおらしやおぎの花（一ノ橋　二ノツ女）」（九ウ）

じつとだき〆かほうちながめ〔（常盤津源太）枕の下へやる手さへつとめはなれてばからしい〕こふもかはゆくなるものか（古キ庵）」（十オ）

なくもじれるもふさぐもおまへ〔（長唄辰巳八景）さだめかねたる秋の空だまされたさのしんじつに〕きげんなをすも又おまへ（古キ庵　千蝶）」（十ウ）

二階せかれてあはれぬこの身〔（清元おさん茂兵衛）なむとかくごはしながらもまたもやぐちをくるじゆすの玉もおさんが気にかゝる〕またのごげんも神だのみ（八丁ホリ　松楽）」（十一オ）

春かぜにうかれあるいてうか〳〵土手へ〔（一中ふし吉原八景）日本一の大門口瀬田の夕せふいまこゝにゆふ暮てらす仲の丁〕のぼりつめたる浮気なおまへ」（十一ウ）

なまきよさくよなこんどのしまつ〔（義太夫兜軍記）さらばといふまもないほどにせはしないわかれゆへ〕これがなかづにいらりやふか（千賀）」（十二オ）

わたしばかりにくろふをさせて〔（清元梅川）それそのよふにいわんすけれど此梅川が身のつらさ〕おまへの心がしれかねる」（十二ウ）

（春さめ　かへ歌）春雨にしつぽりぬるゝごてん山羽風ににおふ桜木のぬしにたはむれおもしろさかた木でさへも一トすじにはうたおどりやきつねけんわたしやなめくでぬしはへび山で身まゝ気まゝにのむ酒はサアおゝなまゑいじやないかいなサウサのんでもよいわいな」（十三オ）

（しん作大つゑ）風の夜にはんしやうちかくねぼけてはねおきたかじもよふくろけむりかけ付八百人龍こしはしごをたてならべらしやしやう〳〵ひのかぢさん人足は水くみ仕事する町役人はうでをくんでしあんがほ中にもひげのながい番太郎唐人は火事をながめてはやびやうし木をたゝいてきん火とけん」（十三ウ）くわにきんもふつぶして風上さしてせおいし弁とをのぼりでいそぎ行

ほれたふりよすりやアノ馬鹿やろふ〔（清元おち人）思ひ直して親里へ〕つれていかれてなるものか」（十四オ）

（ほん調子　葉うた）おもひこんだる我恋はさきじやじやけんできれ口上たとへきれても切やせぬおもひにおもふた人じやものなぞわたしやみれんがあるわいな」（十四ウ）

おもい切とは死との事よ〔（清元おそめ）ひとりみらいへいつて見や男心はそふしたものか〕はものもたない人ごろし（松二）」（十五オ）

（ひとこへの　かへうた）一時はまつまもつらき雁のこへ咄しの？？に書文の？だへんりよある候かしくさきのこゝろはほんじやないこれほどみれんな筆留てかへすゞ〳〵もまつているわいな（八丁ホリ　松寿）

壬戌新目録（省略）

地本草紙問屋　板元　広岡屋幸助」（裏見返し）

風流粋の一筋（幕末刊か。藤屋九兵衛版）

（一オの序文には「頓作俳優度々一」とある。百文舎外笑序。菊池蔵別本『頓作俳優度々一』によれば弘化三年序。一オの序文と二ウの三首のみ、菊池蔵別本『頓作俳優度々一』と同じ。ただし、別本にある作者名は削除している。）

外題　貞芳画」（表紙）

風流粋の一筋

江都の部

諸名家合作」（見返し）

頓作俳優度々一序

はやりうたてふものは流行の極早き事駟も及ばざるに此度々一ばかりは馬士唄甚九にも対すべく長（とこしなへ）にはやりもて行大江戸は更なり何処の津々浦々までも一円に広がりて遊楽の酒席には必ず興を添て皆頓作せざる事なしされば此一冊も彼俳優輩が遊戯の余りに成れる物とて予に序せよと乞はる一校する暇もなければ速に筆を採て其せめをふさぐといふ

（別本には「丙午の秋日」とあり）　百文舎外笑」（一オ）

（絵）」（一ウ）
（絵）」（二オ）
はなにも、たびくるきやくよりもゆきのしよくわいがたのもしひ
ぐちなわたしにさばけたおまへ柳につたじやと人がいふ
ぎりをせけんのそりやいひのがれじつはいやだとことはりか」（二ウ）
せけばやむかとお部屋の叱言（こゞと）おちやをひくにはましであろ
親の気入（きにいり）私も惚る好風（いき）で律義な人はなひ
泣ば誠とお客のこけがいろの仕送り仕舞札」（三オ）
たよりなひ身で尽したまことぬしは浮気できれ言葉
二の足をふんで居るのに異見をされりやまたもみれんできれられぬ
待ば海路の日和もあろが得手に帆どよく乗せて見な」（三ウ）
月に村雲私にやお前邪魔と知りつゝ切られぬ
花にあらしは浮世のたとへ〔せかれて逢れぬ様になりあはれあふせの首尾あらば〕つらゐ辛
苦をしのがんせ」（四オ）
実も不実となる身のつらさ送る茶にも義理がある
私はかはい、心もなひにぬしは口舌の言がゝり
すなをに咄すをお前はじれて横に車の無理ばかり」（四ウ）
医者さまが小首かたげて二の匕を投てやつれ姿を見るつらさ
契情（けいせい）も元は素人秘蔵の娘うそも誠も人に依
いへばどふやら催促らしく言ねば返さぬかりたもの」（五オ）
変るまひとの互のまこと〔（上るり）欲な事ぢやが極楽の蓮とやらの新世帯〕うまれかはろ
がそひとげる
待ば甘露とそりやあま口な待れる程なら気はもめぬ
鶯にまけぬ音色がたまさかあれば谷の中へも花の兄」（五ウ）
送る茶屋でもむね気な仕方あの妓（こ）に呼れてなるものか
たつを引とめマア聞しやんせ市に餅つき松の内」（六オ）
春の霞もみすじをひくは花にうかれる心いき
しんの夜中にふと目を覚しとなり座しきの貴ひなき
名ごりおしげに見送る顔へ露か涙か朝ざくら」（六ウ）
酒が云するお前の癖か〔（上るり）まはらぬ舌で燭台や丼火箸でなむさんばうそふに忽泣上
戸「この丼の割たのを見るに付ても娘が事今年十二で麻疹も軽くはやり風さへ引もせずつゐ
十三で此よふにとしやくり上たる溜涙〕笑ひ上戸にならしやんせ」（七オ）
内に待気もおまへの顔を〔（上るり）三保のあたりであらふかと聴て後から御ひゐき請てお
かげ参りは皆さまへお礼にちよつと旅がけの連になるみの染浴衣〕きて見りや今更帰られ
ぬ」（七ウ）
百度参りを小舟ですればさしてあはれぬ事ばかり
油でかためた聖天さまをあらゐがみとは誰がいふた
あだも是限（これぎり）モウ惚仕舞他人の恍惚（のろけ）を聞も否（いや）」（八オ）
逢は別れのはじめといへど〔（上るり）昨日の渕は今日の瀬とかはりやすさよ人心〕くやし
ひながらもきれられぬ
花の笑顔で操の松の色もかはらずぬしの側
横しまながらも此所聞わけていたらぬ私も立様（たつやう）に」（八ウ）
他人に異見も仕かねぬぬしが人に云れる此始末
泣て待夜にふけ行鐘は明の鶏より猶つらさ
わが惚りや他人も斯かと邪推をまはし愚痴な様だがはらがたつ
遠ざかるのは末咲花よ日々に咲のはちりやすひ」（九オ）
酔ばつもりし恨もいへどさめて嬉しひ梅の雪
愚痴もいふまひりんきもせまひ他人の好人持果報
わけを云のにマア聞しやんせ否でわかれる気ではなひ
お前ゆへには憂身をやつし〔（上るり）アノ川端の祖師さんへ日に千遍のおだひもくとなへ
てむりなおねがひを〕かけて結んだ縁の糸」（九ウ）
深ひ契りをかはらぬ願ひ他人は浮名をたつみ風
吹ばとぶよな玉やの身でもあはぬつらさのもの思ひ
軽ひ世帯もお前と二人気がねせぬのを楽しみに」（十オ）
聴解がなひとお前は云んすけれど離別（きれる）覚悟で惚はせぬ
他人に心配（きがね）もいらざる艶言（せじ）も〔（上るり）流れわたりの芸者の身ゆふべ
過ごした拳酒の〕ほれて勤たわけぢやなひ」（十ウ）
貴（たか）ひお方にほれまひものよ〔（上るり）かわるまひぞやかはらじとおふせうれしく
返答（いらへ）さへ〕ごめんあそばせひぢまくら
無理な願ひもやう〳〵叶ひ〔（上るり）しのぶまがきがはし渡し〕あふて嬉しひ花の顔」（十
一オ）
蔦かづらうらみつく程思ふて居れどぬしの心にはぢもみぢ
気づよふ帰した背後（あと）見送りて〔（上るり）かわる心のつれなさをさぞやうらみてふ
がひなひ女子心と思はんしよが〕みんなおまへのためじやぞへ」（十一ウ）

しんの夜中にふと目をさまし聞ばとなりの小鍋立
あきらめられうかこりしよなわたし〔（上るり）あふは別れのはじめとはきくもうるさゐ世のたとへ〕命かけてもそひとげる
お店者でも出番の衆でもやぼと由断がなるものか」（十二オ）
恋の逢瀬を辛苦にするな今に中よくすみだ川
つらゐ峠やかなしひ浮瀬越てけふ日の新世帯
お店者だか店さらしだかすれて紋日もしらぬ顔」（十二ウ）
かはらなひとは田舎の住居埜でも山でもいとやせぬ
今戸焼の様な姿で自惚らしひかはらなひとはよく云た
衿に顔入何にも云ず泣て男の胸に釘」（十三オ）
行が帰りか帰りが行か蟹と廓の仲の丁
何卒（どうぞ）と思ふたはじめをわすれ恪気するのも恋のよく
引汐に声もかすかなアノ浜千鳥遠くなるみの海になく」（十三ウ）
あふが誠かあはぬが実か末を遂よと遠ざかる
遠ざかるのはこらへもせうが他人のしやくりが気にかゝる
気にもかゝろが互の実は絶ずたよりの文のつて」（十四オ）
案じ顔さへ花にもまさる婀娜が苦労をさせる種
かゞみに向へばやつれたすがたあひそがつきよと案じ顔
文も遣るまひ返事もせまひあはれぬつらさをますかゞみ」（十四ウ）
きげん直してマア寐やしやんせ〔（上るり）小夜ふウけヱて○蕎麦イ引にうめんそばイそばイ引（上るり）八アツウかフボヲン○按摩アワン〳〵〳〵〳〵そばやさん何時だね（上るり）七アツウウ○鳥の羽音きめ？？？バタ〳〵〳〵〳〵○こつけつかう（上るり）あけむらツウの〕かねがかたきの世のならひ」（十五オ）
花も若葉も月日がたてばやがてわたしに秋の風
庭の雪間のあの梅さへも寒苦をしのひで花が咲
花も紅葉もモウあきらめたぬしの便りを松ばかり」（十五ウ）
好風（いき）な人でも不実があればすへは愛相の尽るもと
あげて心配（きかね）ばお客が？か揚代（つとめ）もいとめを付てゐる
切た当座はが？んもいへど日数たつほど思ひ出す」（十六オ）
なひてたもるな途方に暮る月は雲間の時鳥
春の初日の豊に？呑はめでたひとその酒」（十六ウ）
〔和漢〕御書物売買所
書林　大坂心さい橋より南へ三丁目
藤屋九兵衛」（裏見返し）

よしこの四季のながめ　初篇
（幕末刊か。一荷堂半水序。柱「袖かゞみ」）

〔よしこの〕四季のながめ　初篇
貞信筆」（表紙）
（絵）
貞信」（見返し）
（絵）
梅が香やうがひ茶碗のみつるまで
一荷堂」（序オ）
婬声諷（うかれうた）の流れ絶ずして。しかも元の唱歌にあらずと。実（げに）此作の流行すること。ゆく川のながれも不及。宵の口絶に花を咲し。朝の鐘に情を散らす。森羅万象恋の山道。まよふて悟るがよし此と。我田へ水を引ことしかり
一荷堂のあるじ　半水述」（序ウ）
風にうつりが聞した計りすがたさへ見ぬやみの梅
またぐらを明て目出とふ姫始すりやふくの神いる床の内
又も朝日がそふゆへうめにかすみもたした暁の月
積る雪さへとけたとみへてやまもにつこり笑ひだす
風の浮気にはや角見せて芦もなきだす下ご、ろ
ほんにあざみは針もつゆへに蝶もうかつにや通やせぬ」（一オ）
咲ぬ間が花じやといふてしんぼさせたる梅の雪
向ふはさしがね手斧間（ちよんのま）なくておもふ錐なく木がもめる
誠あかしたアノ若水もうれしご、ろが新（あ）ら玉る
雪にそわして互ひの色ととけてにつこり笑ふ梅
なんと正月はやすへ膳のそれに気づよくにらみ鯛
色気咲りとツイ濡過てあめに乱れて見へる花」（一ウ）
散ればともにと色もつ花にそつと置たる露の玉
梅に鶯竹にはすゞめ松にわたした鶴のくび
そつと二人が気を置ごたつたれもあたりにこぬ様に

色気づくまも早待兼てちぎりかけたる初茄子
つらやおとらぬ色けは持ど見さげられたる谷の花
包む色香を早悟られて仇におらるゝ冬の梅」（二オ）
露とうれしく添寐を仕たが今朝は色ます糸薄
秋と聞てはモフこらへかね昼も啼だすほとゝぎす
蔦もやたらにべたつき出せばちよつと見てさへいやらしい
もらすまいぞとアノ梅が香をそつとつゝんだ朝がすみ
いつもまともは面白ないとうしろからさす梅の月
かげでしつぽり濡松茸も見付られたで引ぬいた」（二ウ）
深ふほれたは私がいんぐわあさいお前に浮しづみ
とかく程よき風からふつところび逢ふたる露の玉
うはの空にて鳴ては居れど人眼つゝんだほとゝぎす
心ありそふな柳にあたり花にやつれなき春の風
鬼と名がつきや瓦でさへもにくや切らした凧（いか）の糸
すへのたよりと心の竹に添ふて色もつ菊の花」（三オ）
流れまかせに身は浮草のどこで花さくことじやゝら
待ぬ夜はない更行月にしんきらしさのほとゝぎす
かたゐ松でもアレ見やさんせ蔦にまかれて色づゐた
わなにかゝると早鳴だしてだましかけたる古狐
帰り咲する花にもふつとおもひかけたる蜘の糸
風にさそはれ思ずしらず寐屋へころんでくるあられ」（三ウ）
見ればしほらしさはればこわし見すてかねたる枝の栗
ぬれるほどなを苦労の元と雨に紅葉も痩かける
わかれかねては又立もどり蝶もみれんにもとの花
具（とも）にかこわれ居る菊でさへぬしの心にすききらひ
宵にや月にも添わせた草も今朝は本意なく捨られた
恋のやみ路に思わず雁（かり）もひよんな苦労にかゝる網」（四オ）
うまく露には添さぬ草とにくや鹿めがふみつける
待どしんきな夜を秋の蚊がつらや出て来ていやがらす
おまへゆへからこうやつれたと風にすねたる鳥おどし
いやな風じやと早尻向てさきへ寐かけた鳥おどし
つとめすりやこそ鳴子の縁も引手次第で儘になる
早ふ見たいと恋しき花にどふも気ならぬ風がふく」（四ウ）
濡が重りやアノ雨でさへひよんな所へもれかゝる
たまに逢ふ夜のうれしい中をにくやつきだす明の鐘
とけた思ひにけふ居続の雨にしづかな朝やなぎ
帰ると思へばどふやらけさは花にこゝろのかゝり雲
月はすめども恋路のみとなつてあかりが立にくひ
おしむかゐなきアレ桜花にくや浮気でちるはいな」（五オ）
主にいく千代幾春かけて契りかはせしたまつばき
誠づくめの当にはならぬうそもまことになるはいナ
深くながれに添とげながらなにをもつるゝ河柳
すぎし別れの約束事もいやな義理からけふの仇
にくひやつめと笑くぼを突ばつけばにくゐが愛になる
いつの間にやら身上り仕かけ登るつばめも程がある」（五ウ）
露霜にうたれ暫しは苦労も仕たが床で花咲福寿草
添ふて居りやこそ隔る中もとけてうれしい月の梅
ひよんな所からつぎ木をしられ思ひがけないはながさく
残る雪間にまだはづかしくそつとかほだす嫁な草
人眼嬉しい寐乱れがみといふてほしさのわが思ひ
ひとり思ひを枕にかたり明しかねたる胸のうち」（六オ）
もはやこうなりや人目も義りも儘よ合たい心がら
さそふ嵐に散る梅が香をとめてうれしゐ袖の内
わたしや主ゆへ心がくもり月の手まへもはづかしい
つもる誠もみな淡雪とにくや消された身がくやし
ぬしの心はうら山ぶきよ八重に咲とはどふよくな
こふかどふかとこゝ汲分て見れど済ぬがにごり水」（六ウ）
なんと馬鹿らしわしや葉桜にしられ世間がうつとしい
積るおもひは岩根の清水それにおまへは汲かねる
浮つ沈つ此身のつらさたへず苦労をする鵜舟
切てからんだ柴垣さへもへだてする気がにくらしい
落とおもへば手の裏かへしあちらむくろじにくらしい
秋の野風のつれなく吹て遂て寐た夜の戸に当る」（七オ）
わたしや誠に火のない火鉢たれも手だしの仕てがない

忍び逢ふ瀬の首尾星兜つらや浮名の竜がしら
枕に積る塵の世のがれ恋の山家に暮らしたゐ
つぼみ〳〵と思ふて居たに恋のはつ花さきそめる
衣〻〳〵に泣て暫しと引とめられて袖の縫目が笑ひ出す
冨士の煙りもすこしは愛よなるが深ひは腹がたつ」（七ウ）
高ふ咲せて散る花よりもこぼれ松葉が恨めしい
色も香のないまだ青梅をむりに横からかち落す
風にせぶられ又其うへににくやちらした雨の萩
草も嵐にゆり起されて露にせつない別れする
濡りや互ひにかくせぬ中と今はうづらも走り出す
月に添ふのが定る縁と色にや狂わぬ糸すゝき」（八オ）
ひよんな草葉に身は隔られ迷ひかけたる片鶉
すへを頼のみし露さへ落て草にせつないむしの声
雁の枕も仇ではないと聞てわれから寐たる芦
秋と定りや碪もほんにうつてかはつた拍子まん
張で持たせた心もいつかもろくこけたる鳥おどし
内へ這入ば身のきうくつもしばしこらゆる籠の虫」（八ウ）
秋と定りや唯おとなしくきれて仕もふた鳴子縄
すいた因果にや添れぬ身さへ捨て行燈に止るむし
見捨られたりや団扇でさへもあちらこちらで邪魔になる
ひよんな訳からツイすれだして今は砧も合ひにくひ
好た同士の相槌ならばとんと打こむ小夜ぎぬた
ひよつと喰れちやならぬと思ひりん気かたてにひく鳴子」（九オ）
合ふか合ぬか合して見たやあへば嬉しい歌がるた
聞て下んせ鳴たがむりか誠明せし朝がらす
癪に事よせ口舌の夜半はぐつとさし込まどの月
長き夜すがらしつぽり濡て露にやつるゝ女郎花
人にふまれし枯柴さへも露に一夜の宿をかす
夜るの衣にかへしがきかば主に見せたひわがおもひ」（九ウ）
すきな力で簾も癪もおりて嬉しい家形ぶね
流れ渡りの此身じやけれどいつかまことの立およぎ
時節おくれて世に出る花を帰り咲とはどふよくな
遂たおもひに又心も晴ていつか嬉しひ月の顔
空は晴ても曇るは胸よ片われ月とは気にかゝる
秋にあかれてせうことなしにつまを重ねてうつ碪」（十オ）
泥水に気儘咲する花さへ主に真のおもひを杜若
鶴の脛ほど待せて置てつらや逢ふ夜は鴨の脛（はし）
までどしんきなアノ時鳥おとし文とは気にかゝる
憎い蚊じやといふては可愛ぬしのうつかり顔たゝく
わしの心を塩尻にして苦労するがの甲斐がない
君にゆかりのアノ花菖蒲（あやめ）にくや邪魔する五月雨（さつきあめ）」（十ウ）
とかくアノ子はこけ安ひとて竹を添わした菊の花
どうかおもわく付たとみへてしぶひ柿でも色になる
添ふて居たれど早秋風にうらをふかれてちる柳
雨はつれなきアノ心根と菊もしおれてもつなみだ
月に添わして又今さらに色をもちだす梅紅葉
余所の色じやと紅葉に当て折にや気づよく降時雨」（十一オ）
露や時雨の悪性がなくば萩もみだるゝ気ではない
つぼむ内から身は囲われて今はうれしくひらく花
松にまく蔦アタひつこいとおもひそめたが色になる
しぶひ柿でも色からふつと心しらずの手におちる
ゆだんならぬと小菊も今は根じめみせたる床の内
もたれかけては露もつ菊にわかれかねたる秋の色」（十一ウ）
余る情が今あだとなり小首かたげた露の菊
年のかげんでふけてはゐれど水気はなれぬ囲ひ梨
松も朝日にそふたる時は花に増りし色をもつ
添ふかそわぬか合した上で思案きめたる釜の蓋
花のゑがほの気に誘れてわすれかねたる春の霜
かたひ椿もころりと落てほんにはさみもあてちがい」（十二オ）
御渡といへば一番割拝殿のさきへたつたる猿田彦
梅や桜の色づくまでは雪に添ふたる冬の山
今宵限りと抱しめ縄もはづさりやうかとよねん講
うつくしいのでツイ迷はされ寐ては苦になる雪の竹
残る口舌は又あすの日といふてわかるゝ米相場

内の始末が付迄そとにおいてかばふた宿かへ荷」（十二ウ）
ぬしのいふうそ私のうそと心づくしでとりかへる
積る間もなく又見捨られほんにつれない傘の雪
ほかへつもりがあるともしらずふかくふみこむ雪の踏（くつ）
こんなふとゐと嬉しく握りそつとぬいたる大根引
ふれば気ならず積ばつらし寐そゝくれたる雪の竹
仇な色から見捨もならずちよつとつまんだ五形花（げんげばな）」（十三オ）
まめな証古にや折〳〵這ふて磯辺せゝりにあるくかに
あじもしらずにいやらし物といふてきらいのある酢蠣
あつい情があるゆへぬれて肌身ゆるした風呂上り
別にすがたはやつしはせねどうぶで惚さす山ざくら
ゆかしいといふも浦島この玉章と明てくやしき無心状
ヲヤモ寒いとツイ引よせてはなし兼たる抱火鉢」（十三ウ）
御命講に好な亥の子を十夜〳〵入りや泣てもちつと御霜月
積るほどなをくろうの元と横に寐かけたゆきの竹
つもり違ふてくるかと思やふつてかゝつた簑の雪
山も余りに焼ゆへおりにや横に出かけた鍵わらび
ふかひ色じやと余所から見られかすみながらに咲た花
浮名立てはまだはづかしとかげで色もつ雪の梅」（十四オ）
けふか翌（あす）かと逢ひたき花にどふも気ならぬ風がふく
うめも霞のへだてがでけてよる辺さまよふ鳥がある
しらずしられず思ひの清水むすびそめたが深い中
可愛がられた鉢梅さへもちれば日かげの侘住居
たれに契りをわたしや百迄といふてすゞめも藪の中
花もすげなくうき身を捨りややがてわかるゝ春の色」（十四ウ）
ちらと見染し思ひが晴て御げん松が枝宿る月
ほんに鶯かたことまぜるといふて笑ふた梅の花
けふの返事もまた飛鳥川うつりかわるが気にかゝる
花の盛りに嵐の口ぜつ落てかさなる中直り
空におもひの月とはにくや忍ぶ闇夜もあるものを
名残おしげて柳を見捨泣て飛だす朝つばめ」（十五オ）
やさしことばの種をば蒔れふかく根ざしの恋の草
水の出花はツイ濡どふし今はすゞりの海も干す
おもひま、くし捻りし塵がいつかつもりて恋のやま
浅い朝がほ夜の間の露であじな気になる筆の縁
気をばとり梶追手がよふておきに入ふねくろうせぬ
合す中さへ蛤貝の見放されたるうきくろう」（十五ウ）

よしこの（幕末刊か。文久二年か）

よしこの」（表紙）
（絵）」（見返し）
（絵）」（序オ）
春の山の笑顔なるも。いつしか茂る言の葉に。泣て迷す時鳥。おもひこがる、蛍火より。つゐ秋風の身に立て。積るしん苦を雪の朝。実恋草の尽せぬを。爰に集めて梓となし。浮れ歌とうかれる者は
此道の好成述
戊のはるの日」（序ウ）
うそとばかりでつとめがならばやせる苦労はないわゐな（破琴）
身をば大事にもつよな気ならむりとしりつゝ惚はせぬ（狂転）
悪性狂ひや浮きのもとはかなはぬ恋ぢのはらいせに（蓋場）
わすれまいぞや忘れもせまい忘れぬおまへで物わすれ（辺句）」（一オ）
誠づくからけふこのごろもさけものめなひ此しだら（近水）
あわぬ其夜はたゞなつかしくまたもわたしをうろつかせ（兼也）
うつる月日を又とやかふとあんじますぞへ主のこと（字笑）
ふける夜風がにくらしい程きつくあたるよわしが身に（籬嶋）」（一ウ）
およばない身と心であれて心でいけんをするつらさ（梅月）
お前を病に仕たのもむりか日頃おもふた恋のいじ（竹抜）
たまの首尾さへツイ手枕とおもやあふても気がとけぬ（一輪）
ふけてひつそり此夜のうちにいろをかさねたけさの雪（辺様）」（二オ）
ながい日じやとてゆだんが不覚首尾がしあんのほかとなる（歌楽）
迷ひ心の雲さへはれて見るもうれしき月のかほ（蛇水）
とけたやうでもまだ角がある思ひちがひのところてん（千鳥）
すいたわけゆへ火をとる虫もか、るくろうに身を捨る（風乱）」（二ウ）

おもひからみしアノ蜘の巣も義理できれたか秋のかぜ（二蝶）
あふ夜のうれしさ限りがなふてちわもくぜつもいへぬ仕義（梅月）
ヱレキテルかよお前はとかくねじけたことばでぴりつかす（梅堂）
するたすだれもはや秋風でつらさしやう子に見かへられ（枝雪）」（三オ）
やがてその気が落ばとしれて色にくるゐの風がふく（気楽）
のちにやあわりよと気はすませども心まよゐな月の雲（鈍穴）
今さら不実がなにいとはりやうそんな口絶は初手の事（梅月）
月に見せたしまたつき見たし十五ふりそで顔にあて（二蝶）」（三ウ）
わざとすげないそ振はすれどあんじ心がいろにでる
すへのゑにしと年まで書て結であるぞへ腕まむり（有々）
すんだ顔した月かげさへもうごかせるのは水しだゐ（赤燕）
切る気ならばサアきらしやんせどふで生てはいぬからだ（白浪）」（四オ）
ほれていもせずほれられもせずこれがいづもの帳はづれ（二蝶）
いやよ別れのアノいな妻とともにやつれしむしの声（竹枝）
儘にならぬはわしや室の梅ぬしもつらかろ籠の鳥（二蝶）
指きる所かわしやおまへゆへほんに首ぎりはまり込み（鈍穴）」（四ウ）
つるでからんだ夕がほさへものちにやつらるゝゑんとなる（六介）
おもふおまへと添さへすればなんのいのちがおしかろう（半開）
ほんにわたしの心もしらずあくしやうさんすもほどがある（左瓶）
にくやあんどをアノ火取むしかいたふみまで共にけす（佳居）」（五オ）
口の誠を筆にていわせはらの誠をせなでする（二蝶）
くろうする身も秋風ふけば破れかぶれとなるばせを（梅月）
もしといふさへまだはづかしくことばあまりを包む袖（歌楽）
とけて寐る夜をかわらぬ様と結びあふたるたびの紐（仝）」（五ウ）
人目あるとてなをさらつんとしらぬかほするにくらしさ（梅月）
おもひからみしアノくものすをにくやきらしたむら雀（二蝶）
宵にや腹たて夜中にやわらひ明のからすに泣わかれ（千鳥）
かたいかほして居る竹の子も雪とそひ寐の時がくる（遊々）」（六オ）
朝な夕なに気をもみぢばのほんにつれない村しぐれ（有思）
むすぶゆめさへ思ふにならずいつかしらけた明の月（気楽）
外で狐にまゆ毛をよまれ内で狸に目をむかれ（二蝶）
口絶なかばにともし火けして嬉し首びさす小夜あらし（一輪）」（六ウ）
今宵しゆびしてあふたとおもや又も夢見て増なみだ（二蝶）
のろけましたといふ身にかへてのろけさせたといわれたい（梅堂）
鰯のあたまも信心からよ実で遂ないことはなひ（梅月）
うはべ計りはうつくし見せてすれるきのある花と花（佳水）」（七オ）
すへはかはらぬたがいのゑんときゐてにつことわらひがほ（千鳥）
うれし口絶も今ではゆめとくやしながらのうれしがほ（真幸）
うそを月夜にツイうかれだしうわのそら飛うわき鳥（二蝶）
ながれにすむきのなひ金魚かと思やいろけが増わいな（梅月）」（七ウ）
おもふおそばへ身を飛梅は自ゆうじざゐの神のかげ（二蝶）
主とそひ寐のうれしい中をにくやわかれをさせる鳥
そへるしらせの此初ゆめとおもふほどなを恋しなる（梅月）
そへる縁さへあるしら雪がおしいよながれへおちてゆく（歌楽）」（八オ）
ことばぎれいなへだてをやめて今はうれしゐきたな口（梅堂）
どろつくのとんでさはいでさん用すればひつてん〳〵のいかのぼり（二蝶）
みがく心のさゝらも今はつらや先から切れかゝる（梅月）
あへばたがいにかほふりむけて千話のうらみも恋のぐち（紫鯛）」（八ウ）
あちらこちらで月見をかさねいつかふくれただんごばら（花園）
くるか〳〵と主まつむしの声もよわりて身はほそる（仝）
主がきたかと耳そば立てきけばにくらし小夜礁（仝）
雨がふるほど思がましてゆくにゆかれぬ丸木ばし（好志丸）」（九オ）
恋のぐちかや片手に櫛をもつてぬしへの角かくし（花園）
遠い処へみれんがのこり目を目当にわたる雁（仝）
ゑがほしほらしあのうめの花鶯ならずもむりでない（好志丸）
秋雨も晴てかげさす障子を明て見れば野中のとりおどし（仝）」（九ウ）
風に其身をまかしていると見せて柳は根にしまり（一輪）
折た其手にはやうつり気な香をばちらした梅のはな（辺柳）
はれたやうには見せてもとかく心ゆるせんなつのそら（竹枝）
出るが早いかみなわれいちといろにつけ込む西瓜みせ（梅月）」（十オ）
あけてたがいにそれとはいへず忍ぶつま戸のうちと外（蛇水）
水は心をにごすじやないが添たどじよがさせるわざ（歌楽）
なるかならぬかアノ夕がほものちの首尾をばまつわいな（千鳥）
にくさこらへてコレきかさんせこんなしんくもおまへゆへ（会笑）」（十ウ）

（地）ぬかに釘とふにかすがひ水掛ろんを行司かわすにサシヤよかろ（美合）
（地）咲て居ながらうわきな風にとかく香の散ル初桜（錦糸）
（地）ふかいしあんと先にはしらす水のそこいになりかわす（我抱）
（地）染てしんくの我かた糸を結ぶ願ひの朝詣（英賀）」（十一オ）
（人）余所へのり込みする二の替りまねきおしても沙汰が無イ（光ル）
（人）みどりくれない浮世の色を捨て越路へ帰る雁（英賀）
（人）蝉とかわずのよりそうだんでうられくるはで身は蛍（鼻丸）
（人）もふか〳〵と待よのつらさともにあわれを啼蛙（芦雀）」（十一ウ）
うしろすがたを包しきりの心にくゐとうらむ朝（二月）
おもひまち針つもりがちがひ合ぬ身はゞになるつらさ（花待）
丸いものゆへついつかわれて恋の手引となる茶だい（紅雲）
もつれあふたる縁とはいへどいろにやうれしいつた紅葉（佳水）」（十二オ）
色気もつゆへあの若竹に露はうれしく濡かける（柴舟）
ぬけてきましたそのいつわりをいふも人めのせきばらひ（気楽）
どふであどないわたしが心主の気儘にしやさんせ（縁下）
わすれたいほどまたおもいだし憎いほどなをかわゆなる（作名）」（十二ウ）
千本の中で壱本咲く初桜中もよしの、人めから（市玉）
ぬしは田毎のおぼろの月よ何所へま事を照スやら（美合）
しれた月日じやかわずでさへもいつかやなぎに手が届く（芦雀）
垣にかきして愛するむめの軒ばしとふて匂鳥（扇丸）」（十三オ）
ならくまでもとせりふもうそかぬしのがくやは二の替り（光ル）
風に散るよなうわきな花と其儘見捨て帰る雁（芦雁）
ぬしはあるならかわずをまいてお手を枕に寝て見たい（茶取天）
義理もせけんもいとふて居たらおもふお方ト添われやせぬ（恵以）」（十三ウ）
（天）風もかよわぬ山ふところにせけんしらずの初桜（英賀）
（天）へんじなやめる鉢うへかいど咲てうつむく春の雨（仝）
（天）おとに聞へしアノ古池へうかととびこむ春蛙（芦雀）
（天）人めしのんで逢ふ夜は空もすいをきかしたおぼろ月（泉亭）」（十四オ）
（天）花の別れをおしむかそらも降はなみだの春の雨（英賀）
（天）けそふ文明ケて笑顔のアノ匂ひ鳥花に逢ふせを辻占か（両国）
（地）そよとたよりのその春風につれてとびこむ匂ひ鳥（英賀）
（地）恋にみちびくれんりに枝に神に願ひの朝詣（我抱）」（十四ウ）
きせうせいしはたがひのむねに義理もせけんもあるゆへに（仝）
花の笑ふたソノあいけうにおもわずこぼした春の雨（両国）
南無妙ナゑんでおまへに法蓮華経方便品アア朝もふで（八九）
余所へかよふとおもへばほんに啼もにくらし匂ひ鳥（錦糸）」（十五オ）
立たにしき木?となりてほんに嬉しい朝詣（扇丸）
長い道ゆき聞クのもいやで切のついたる二の替り（光ル）
心つくしてとりつく枝に降られて啼出す雨蛙（清笠）
初桜そこへ開くや開かぬ先に人が?尺付たがる（ゲ等）」（十五ウ）
（人）もゆるおもひの若竹なれば濡てうれしい春の雨（光ル）
（人）玉も?る命もいまは帰る雁まで一もんじ（市玉）
さへりや人めをせく手拭に愛をつなぎしおぼろ月
飛鳥川からながれて出たが魚と水とのお楽み（八九）」（十六オ）
たつしや親父のかうきんかんは妾へみやげのお楽み（扇丸）
梅の笑顔にまたしつぽりと濡てほどよい春の雨（きんし）
咲て間のないアノ初さくら義理のあらしに散らさる、（芦雀）
今迄はかごにいましたはしや匂ひ鳥餌こしらへはどうじややら（仝）」（十六ウ）

流行撰ど、逸（幕末刊か。和泉屋市兵衛版）

〔流行〕撰ど、逸」（表紙）
りうかうえらみと、いつ」（見返し）
目出度〳〵の若松と謡しは煤払（す、はく）どきの唱歌とのみ思ひしが今謡節（ふし）直し
てうたふを聞けば又一入あたらしく其うたいかにもめで度祝言なれば余の小うたの長たらし
む淫曲の老松にもさも似たれば都々逸ぶしとて嘲たまふ事なかれと少しかたをもつ者は
三味仙人述」（一オ）
小雨ふる夜はせけんもしんとぬれて色ますとこのうち
うそと誠の涙の雨がふるは逢ふ夜の客による」（一ウ）
かじの取様でくらうもせまい棹のいれてがなけりやよい
岩にせかる、身はうきふねの友づなたのむぬしのむね」（二オ）
はづかしい事やらうれしい事のなかをとりもつおきごたつ
四角四面なこたつでさへも恋のとりもちするわいな」（二ウ）
今日は七草目出度いわひ二人で楽む床の酒

わたしや勝手でた、かれやうとぬしの事ならいとはない」（三オ）
ねづみなき雪の輪かざりアレみやさんせつもり〳〵て丸くなる
門の輪かざりさらりといへばもしや来たかとむなさわぎ」（三ウ）
こがれて死ぬ身はいとはぬけれど神や仏もどうよくじや
おもはぬおまへに心をかけてこれがかなはにやしぬかくご」（四オ）
くろう苦げんもモウすへひろし世間はれたるむねの雲
あはせ物かよあふぎの地紙なわをかなめのほとで持」（四ウ）
ぬしに屋根舟のりかへられてわたしやすてふねうきしづみ
うき舟の身わたしじやとても碇おろせばうごきやせぬ」（五オ）
しのび近江の松かひありてしつぽりぬる、よるの雨
雨のふる夜はあい〳〵がさでうちへかへつてぬれつばめ」（五ウ）
七草の音に目がさめふけゆくかねとあけのからすが気にかゝる
小づまとりつ、つむな、くさやあまるたもとのしどけなく」（六オ）
さきじやにげてもい、だすからはおもひきられぬ日高川
おもへども口じやいはれずわしやゝまざるで文をひつかく手はもたず」（六ウ）
そろひもそろふた白酒ぢやうごはなやつぼみのうちまじり
しろざけのおなじ名にたつアノやまかはにうきながせしいもせ山」（七オ）
やまかはそだちのわたしじやとてもとそにおされてつらい月
かどの礼者もそこ〳〵しまいあしもおもしろさ、きげん」（七ウ）
ながき夜をふたりしつぽり結びしゆめをみなめさまして邪魔をする
たから船敷てふたりがうれしいゆめをとけてむすびしいわた帯」（八オ）
な、くさの音で目がさめもうとりがなくとふどのとちへかへるぬし
はるの七草つみかられても土におもひの根をのこす」（八ウ）
すだの河風はださむけれどしんにふたりがおきごたつ
ぬしとこたつであのはづかしいゆめはいのこのかみさだめ」（九オ）
なにもしらない下手万歳はもつたあふぎとにらめくら
ながい月日をやもめでいればぬしにあふ気のうれしや」（九ウ）
あふぎのかなめにこ、ろをさだめほねになりてもはなりやせぬ
なぞをかけてもあたまでけなし扇歌ら坊主じやあるまいし」（十オ）
たから船所じやないしよのしゆびおもあんじなみにのるよなむねの内
ぬしに別れしゆめ見てふさぎじれて喰さくたから船」（十ウ）
おふたその夜がたがひのむねもはれてこぎだすたからぶね
ぬしは鶴亀わしや松竹よ夢のうきはしたからぶね」（十一オ）
よい夢見たさにまくらの下へ入れよはおまへと宝舟
のり合の中にひとりの弁天さんもたれにこがせるたから舟」（十一ウ）
しろ酒のあまき手くだについだまされてさくやこの花むろのはな
白酒出されてはづかしそうに気を持娘のかほのいろ」（十二オ）
しろざけのくちあたりよきおまへに乗てわたしやよふたるこ、ろ持
白酒を出してたのしむアノふじの山中をするがの甲斐もある」（十二ウ）
ぬしのこ、ろはやよひのさけよちよとひとくちほどのよさ
しろ酒じやわしやなけれどあまいとのまれこ、ろにしやくられほだてられ」（十三オ）
今こんとまつきもほそくありあけのぢれつたいではないかいな
たもとうつしてまだふみもみずしのぶこいじのものおもひ」（十三ウ）
おもふおかたにあふよはうれしこひぞつもりてぐちになる
つらいつとめもぬしゆへなれば身をばおもはずますねんき」（十四オ）
岩にせかれてわかる、水もすへにやいつしよにふかいなか
なく鹿のこゑを聞てもおまへが心あきがくるかとあんじられ」（十四ウ）
ぬしの事ではこ、ろもかみもみだれそめにしわがこ、ろ
ちはやふる神にねがひかけおまへの日ごろおこす小しやくのむしふうじ」（十五オ）
苦界の勤が春道列樹はやしめうと、気は紅葉
いきなくろかみみだれてけさはよひのくぜつがはづかしい」（十五ウ）
おく山にけふもかはらぬわしや貝細工ひとめ〳〵で日をおくる
もろともにたとへ野、すへあのやまざくら外に気のちる花はない」（十六オ）
こ、ろにもあらでうき世のあの義理づめにあいそつかすも恋の道
ひとにしられて今さらなんの身のいたづらといわしやせぬ」（十六ウ）
かくれ忍ぶははじめのうちよ今ぢや人めもいとわれず
こ、ろに？？？おもひをかきやる筆に鹿とたのしみ恋の情」（十七オ）
こ、ろのおく山文わけかくも気をももみじで鹿の筆
ともしびのほそる計にあかつきかけてわが身ひとつにものあんじ」（十七ウ）
あり明の月で見そめたついその日からこの長月を恋のやみ
あきの田がかりほのいろかよわしやともによるわが心ではついにぬれ」（十八オ）
いはにせかれてわかる、滝もすへにおふとはこのもしい
いにしへのならの都もけふ此さとも鹿も苦界かやまでなく」（十八ウ）
地本錦絵問屋　芝神明前　和泉屋市兵衛」（裏見返し）

ど、一　弐編（さく丸撰。幕末刊ならん。明治十三年求版。荒川吉五郎版）

ど、一　弐編」（表紙）
ふじのはながしみぢかしぜひないけれどいまさらちるとはうらめしい
さいてみだれたあのふじさへもすへにちるのをくろうする」（一ウ）
にはの井づゝのかよひのながれさいたあやめのみづかゞみ
やつのすがたはあのはなあやめはやくていけでながめたい」（二オ）
ぬしにこがれてわしやさみだれのたへまなきみをさつさんせ
さみだれでくもるむねからうたぐるもの、むりはないぞへ入梅ほども」（二ウ）
もつれたばかりかさみだれじぶん思ひやしみ〳〵きがくさる
あふてわかれのみはぬれつばめこゝろのこしてゆくつらさ」（三オ）
さみだれのはれまなきみをすひれうさんせしめりがちなるわしがむね
ぬしのこゝろとあのはなせうぶはなはよけれどかゞうすい」（三ウ）
ぬしと二人りはさみだれぐものはれてみたひがつきのかほ
よふ〳〵とたおりあふせたせうぶのわかばそでやたもとにかゞのこる」（四オ）
はざくらとなつておちつくこゝろといへどはなのさかりにやおよびない
はなのさかりにやたれしもまよふじみなはざくらたのもしい」（四ウ）
よふ〳〵としのびあふせてやれうれしやとおもやまもなくあけのかね
さみだれのはれまなき〳〵たもとをしぼりやはなれがたなきこのかほり」（五オ）
ひとめかねたるあのせきこへてしのぶこゝろのしほらしや
ふみのへんじにしのぶをそへてばんにしのぶとこひのなぞ」（五ウ）
ぬしはしらたまうはきなこゝろみづにあはづにいるつらさ
すだれのうちにてひくさみせんはわしがおぼへのあのねじめ」（六オ）
まよふこゝろかこのうちはのゑぬしのすがたにいきうつし
にくらしいぞへあのあさがほはいつかとなりへしのびざき」（六ウ）
かはいがられてあのあさがほもいまじやおへやではちずまひ
せみのなくのとわたしのなくはそらでなきやせぬはらでなく」（七オ）
あまりひながにつゐとろ〳〵とねてもわすれぬぬしのゆめ
たゝくくいなにわしやおこされてさめて思ひがますわいな」（七ウ）
みじかよにしばしまどろみやくひながおこすさめてくひさくまくらがみ
わかたけとやぶでそだつたぶいきなわたしぬしはすゞめでさゝきげん」（八オ）
ひるねしたかほつく〳〵ながめつみないすがほがなをかはいゝ
ひながにふさげばつゐとろ〳〵とさめてうらめしぬしのゆめ」（八ウ）
わかたけにねぐらさだめしことりでさへもともをよばりてなきくらす
にくらしいぞへそもしつぽりとぬれたわかばのいとやなぎ」（九オ）
ぬしはべにばなうはきないろよすへにやわたしをしぼりかす
思ふところへふねのりつけてすゞみながらのむつごとを」（九ウ）
なでしこのじくのふし〳〵しげきがひとめねさへきまればさくこゝろ
つきにかこつけすゞみにでればやぼなくもめがじやまをする」（十オ）
さく丸ゑらむ
よしもりゑがく」（十ウ）
明治十三年五月十七日出版
編輯兼出版人　本所区？町四丁目五十一番地
荒川吉五郎　版」（裏見返し）

芸しや都々いつ（刊年不明）

芸しや都々いつ」（表紙）
腕に我が名をそめさせをひてまたもうたがふ恋の欲
かわい〳〵と啼せみよりもなかぬほたるが身をこがす」（五十オ）
茶碗酒止ちやいやだよ呑せ（ママ）お呉酔て聞たいことがある
たとへにしきの風吹ばとてなびくまいぞい糸柳」（五十ウ）
庭の雪間のあの梅さへも寒苦をしのひで花がさく
愚痴もいふまいりんきもせまい人のすくもの持くわほう」（五十一オ）
今は朽木に隠てゐても頓て花咲春はある
縁きり榎木を根こぎにもつてほれるやつらを打ぱらい」（五十一ウ）
七ツ道具のかづ〳〵よりも恋の重荷がせにあまる
親のいけんと霜夜のさけは五臓六腑へしみわたる」（五十二オ）
五月だれに袖もかわかぬ口ぜつのなかへ空で音をなくほと、ぎす
今朝にわかれし遠藤むしやも墨の衣でよをしのぶ」（五十二ウ）
けんくわじかけは兼ての承知わたしや柳でとり合ず
じみな咄しについよが更けて泪の雨がほと、ぎす」（五十三オ）

思ひこがれし身は宇治橋の中をへだて、飛ほたる
末衛（すへ）のくらうも元より承知どうぞ添ねがして見たい」（五十三ウ）
松の位と云れる身でも元はかむろの緑から
程やきりやうにや迷わぬけれど実を尽せば闇も月」（五十四オ）
逢ばさほどにはなしもないが顔見にや苦労で寐付かれぬ
廻し屏風のおしどり詠めひとりねるなら内にねる」（五十四ウ）
都から主の遣（つかい）の内証のふばこ明て言れぬことがある
行も帰るもすみだの夜舟しん底浮きじやないわいな」（五十五オ）
じれったそうについなげだせば風に散ばる文のから
招ぐ尾ばなにふとだまされて露の情の草枕」（五十五ウ）
君を松むし夜はしん〳〵と情知ずのかねたゝき
いかに秋風立田といふにかほに紅葉はにくらしい」（五十六オ）
きり〴〵す千草離てわしやかごのうち客にかわれてよをあかす
他の草木がしほれて後に松のみさほはよくしれる」（五十六ウ）

げいしや都々逸　四（刊年不明）

げいしや都々逸　四」（表紙）
勤めする身でまことをあかし添はざ止まい此くらう
やくやもしほもたのみにやならぬからすに雑子ねをおこされる」（三十一オ）
月を友とてなくむしの音は萩のしたつゆぬれたどし
あかぬわかれのなきがほのぞき化粧せよとはむごひ親」（三十一ウ）
ふさぎやどこ迄ほうづがないと思案する程りに落
おまへのいふことわしやまに受て末のくゝりを胸の中」（三十二オ）
となりざしきはちん〳〵かもでこちの女郎はなぜこない
つもる恋路に水もらさじといだきしめたるつがひおし」（三十二ウ）
どこへいつてもおまへのことを人がほめれば気がもめる
春雨に手と手手と手がかさなりまして恋ぞつもりて渕となる」（三十三オ）
思ひきりましよあきらめましよが実にぼんのうにや引される
岩戸開いて戸ざゝぬ御代に戸ざす初日のまつの色」（三十三ウ）
しゆびがないとのふみ三保のうら松に羽衣きにかゝる
春雨にぬれてしつぽりあの鶯はひゞにほの字のねがさへる」（三十四オ）
清き心に似合ぬはちすつゆを何ゆへたまとをく
梅に手がありや来るうぐひすもあだな初音をだすわいな」（三十四ウ）
思案なかばに空とぶ鳥はにげてそふとのつじうらか
ぐちな女だはてやかましい永く勤はさせはせぬ」（三十五オ）
ふじのすそので西行ほふしうさのひる寐が田子の浦
先で丸くでりやなにわしじやとて角にでやせぬ十五夜の月」（三十五ウ）
奥のざしきでふとしたことばあせになるみの染ゆかた
傘のほねになるまでかよはにやならぬどうでやぶれたこのからだ」（三十六オ）
むちやのやうでもまさかのときは主の顔をばつぶしやせん
人目多けりやはなしがならぬぢれてきをもむ茶わんざけ」（三十六ウ）
わたしや奥山一重のさくら八重にさくきはないわいな
ほれていれどもまだぬしさんの心しれぬがきにかゝる」（三十七オ）
広い世界にせまいはおんな浮気されても情立る
逢ふはたまさかかよふは夜であはずにかへるは幾度か」（三十七ウ）
ちらと見たのでふたゝび見ずはさほどこがれはせぬわいな
早くおまへを親にもあわせわしが旦那と名号（なづけ）たや」（三十八オ）
花ぞめのうつろひやすきはうき世の習ひもしやそふかともの思ひ
元日やきのふ口舌の赤鬼さへもこゝろ直して礼に来る」（三十八ウ）
千のきせうで烏をころし主と朝ねてしてゐたい
麻糸のよれつもつれつもつれつよれつ末はほどけぬなかとなる」（三十九オ）
張つめて見ればいこぢで身はあつ氷とけてしまへばたゞの水
雀めどのお宿も聞ぬまうその先に笹の相手がゑんとなる」（三十九ウ）
下枝の花は折ずに扨ものずきなとゞかぬ梢で苦労する
行暮れし人に宿かす主の花も朝の別れは袖の露」（四十オ）
雁がねの心みだれてたよりのふみもひだりまへなる八文字
鶯の心とめてはあまたのとりのねぐら〳〵もうはの空」（四十ウ）
雲にたのんで暫しの間月のひかりを隠したい
ふつと濃茶の口きりそめて胸のふく紗がさばかれぬ」（四十一オ）
思ひ次たすこたつの火さへ痩て来る程待つらさ
くるはのさくらも見あきてはやくみたいおまへのりやうの菊」（四十一ウ）
はたからおまへの噂をきけば逢ふたはじめをおもひだす
秋の来たのかおまへのそぶりうわの空なる月の色」（四十二オ）

秋の夜寒を身に打よせて逢ぬきぬたのむら拍子
水の流れとわたしが恋は海の月かへ果がない」（四十二ウ）
あわれぬことかとまた呑さけに来ない知らせか積る雪
あへば別とさてしりながら帰しともなやゆきの朝」（四十三オ）
娘心のたゞひとすじに星へたむけの恋の糸
月は晴てもおまへの心闇の礫であてはない」（四十三ウ）
旅びの情に契りし恋はほしの一ト夜の根なし草
きくも噺すも人目をかねて背中合せの涼台」（四十四オ）
幮に吹く浪み枕の舟に乗るもすゞしき床のうみ
しのび足して閨の戸あけてそつと立ぎく虫の声」（四十四ウ）

新令都度逸　初編（明治三年。伊勢屋庄之助版）

新令都度逸　初編」（表紙）
悟一真
新令都度逸　初編
墨塘酒人著
東京　松延書堂蔵」（見返し）
新令都度逸初編
酌は若婦（たぼ）肴は作身（さしみ）酒は燗ちん猫老婆（ばゝあ）と詠（いひ）たりし児童（こども）の昔（おり）から酒宴（しゆ）の友なる松延堂は三筋の糸弾（ひけ）ども酒の跡をば引かず好こそものの浄瑠璃端唄流行節の梓元（はんもと）にていつも魁有利（かうめう）せんと自（おのれ）にまたも名差の盃おさへもならず承侘（うけ）し時お掌（て）が鳴ります？用（しよう）の繁きに兄梅兄へ著作（おあい）をゆだねつ一寸お銚子と立ものは隅田（すだ）が門辺の戯者（たはけもの）なれ
菊？露香誌」（一オ）
（絵）
松延はん
悟一真
新令都度逸
梅兄著」（一ウ）
（絵）
景年画」（二オ）
馬車や蒸気じやたよりがおそい鉄炮玉ではかただより
（はやし）そのことでんしんてりがらふくうほじやないぞへてつぱうづ」（二ウ）さつさどふ
便理自在の国土にや住めどまゝにやならない色のみち
（はやし）ときをまたんせきをながくきんとほどとでまよはせな
諫語千度に私しや及べども情夫（ぬし）は不門の色狂ひ
（はやし）いけんもたがひのためじやものうわきもたいてにしたがよいさつさどふでもよい」（三オ）
腕（かいな）を枕下にそと差込んで強（じつ）と見詰るぬしの顔
（はやし）ぐちはふじんのつねじやものよそのうはきはやめしやんせ
私しや亥のとしぬしや午のとし午亥（むまい）」（三ウ）中だと他（ひと）がいふ
（はやし）珍々甲鳥差向ひさつさどふでもい
ふつとかけたるわたしのなぞのとけてうれしいけふのしゆび
（はやし）三春行楽在誰辺（たがへんざい）かはりやしやんすないつまでも」（四オ）
計知（けち）と邪推え（しんにう）かけて野暮といやみの編かむり
（はやし）字解が教句で是よろしさつさどふてもい」（四ウ）
誓言不変の二人が中へ誰が水さしてか此しだら
（はやし）おまへの意（こゝろ）は秋の空変りやすいは蛇の眼傘」（五オ）
君が規則のとゞかぬゆへに見世や叱手（やりて）にわらはれる
（はやし）楷婆（かいば）や若いしやどふでもい足下ひとりがめざす敵」（五ウ）
楽も浮気もしぬいたからはじみな夫婦でともかせぎ
（はやし）家職を大事身をまもり朝寐奢酒はよしなんせ」（六オ）
心あれども人前不言目と眼で承知の恋の智恵
（はやし）こゝがいのちのいろのみちけどられまひぞへおたがひに
までどこぬ夜になくほとゝぎす」（六ウ）なみだひやつく枕がみ
（はやし）深情紅閨一個娘来たらぬ男子はばかなのか
君私睦情（りくせい）してまた苦を求め今じや悔悟のこのおもひ
（はやし）かたときはなれちやゐられなひぐちもみれんも恋のじやう」（七オ）
乗ればもちやげる腰をば居へるあれさいきます人力車
（はやし）一里の価が五十疋東西南北客しだい」（七ウ）
弓袋刀鞘平治の皇土何国（いづく）の隈にも鬼はなひ
（ハヤシ）とざしせぬよのたかまくらあれもういく代もおたのしみ」（八オ）

気証誓紙を此手で書けと親は手ならひさせはせぬ
（ハヤシ）心とてにはのとりちがひ漢字がてん書でわからなひ
ほれられすぎたか根岸のりやうへ」（八ウ）恭順謹慎若隠居
（はやし）うきよはなれたわびずまひすて、もわすれぬ恋のじやう
すゑの末まであんじるわしがうはきなおまへになぜほれた
（ハヤシ）歎願千度も馬耳東風てへげにおやめよくいちらし」（九オ）
万里の外でもかべ一重でも恋にへだてた所はなひ
（はやし）ろんとんゑいらんむすこひや可愛はいづこも色のみちさつさどふでもい」（九ウ）
丸い鶏卵（たまご）も切よで四角車もいびつじや引かれない
（ハヤシ）むりもたいてにいはしやんせぜ、さへしかくじやつうよせぬ」（十オ）
鶏犬鳴じて夜も深々と積るはなしの忍び声
（ハヤシ）あれねなんすかおきなんし正月ならで暮の金
疑わくするはづぬしや浮気者誓紙を」（十ウ）変約さしやんすな
（はやし）女心はぐちなものうたがひぶかいも恋のじやう
よわいからだに勤をさせて苦労まさすがいぢらしい
（ハヤシ）ねんのあく日はいつじややら一日千秋まちどふい」（十一オ）
翠黛紅顔おめへをのけて何で浮気をするものか
（ハヤシ）気やすめいふのがぬしのくせわすれしやんすなその言葉」（十一ウ）
私しや野ずへにすむみのむしよ恋しなつかし月の顔
（はやし）閨房（ねや）の燈下にひとりむし君（ぬし）の来ぬ夜は身をこがす」（十二オ）
まつも別れもまた逢坂の恋の関所は越かねる
（はやし）悟れば一穴迷やぐち」（十二ウ）ほれてもとめた此苦労
松柏緑顕千歳不変こゝろがわりのないやうに
（ハヤシ）まつのちとせのともしらがすへはたかさごそうてみしよ」（十三オ）
とかく浮世は雪踏のうらでかねがなければなりはせぬ
（ハヤシ）ちやらじやない〳〵かんじよづく高位も」（十三ウ）下賤も是づくじや
ぞつと素顔の別品無類どこの手活の花じややら
（ハヤシ）おめかかてかけかげいしやじやかたぬきかきつねかごくらくか」（十四オ）
はやくお店の通勤やめて昼夜はなれずぬしの傍
（ハヤシ）はだとはだとをよせなべでつツつきあふたらうれしかろ
胸に十分思ふたことも逢たまぎれか」（十四ウ）口ちへ出ぬ
（はやし）娘児（ぢよし）が言葉は有顔（かほにあり）さつしてやらんせおぼこぎを
たとへ山谷片境なりと恋夫（ぬし）と世帯がして見たい
（ハヤシ）てなべさげよがはたおろがくわちやのてつだいしてもよい」（十五オ）
わつちが歎願浮気をやめてぬしと産業はげみたい
（はやし）野暮な夫婦でともかせぎ小金もためたら」（十五ウ）うれしかろ
しばしのうちだよ身を大切にちよいと往て来る蒸気船
（ハヤシ）万里一走わけはないあめりかまでは二三日じや」（十六オ）
情夫（ぬし）の英智にたらはぬわたし叱つて情をかけしやんせ
（はやし）不斗（ひよん）なことからこのしまつほれざ他人でくらすだろ
色狂遠（いろを）島原程吉原而（で）女戯迷（たらし）之浮気者
（ハヤシ）すいつけたばこがあめのやうふるもてるもれこしだい」（十六ウ）さつさどふでもい
あなたの気憶は唐糸木綿丈がなくつて切れたがる
（はやし）正札安直おつかぶせそさまがとんまのかいかぶり」（十七オ）
外面如菩薩内心如夜叉ほれて今更此苦労
（ハヤシ）いつてへおめへがちよいが、りちみちあげたがうらめしい」（十七ウ）
舌（ひた）の戦争勝敗いかに我子（がき）に応援親同士
（ハヤシ）かなぼうひきずりおさきものしりもながやのあけばなし」（十八オ）
心浅瀬の女子（おなご）の念の竿もとゞけばふかくなる
（はやし）夜更の忍来しゆびはよいあいづはたがいのむねにある
雲霧実晴色をばすて、つむりおろせどわすら」（十八ウ）れぬ
（はやし）秋空男心にくらしやみれんじやなけれど顔みたや
茶人好みと笑はゞわらへ松に来てなく鳥もある
（はやし）千心一知の世のならひたでくふむしもすきずきじや」（十九オ）
ぶたや牛馬じやまだ喰ひたりぬ蛇やとかげのごた〳〵煮
（はやし）あかいぬべつぴん上あぢだてんちんこんにやア」（十九ウ）ねづみなべ
ぬしとわたしは車の両輪真棒次第で身ももてる
（ハヤシ）あなツぺりやあさねぼううはきをやめてかせぎましよ」（二十オ）
牛のおさしに赤犬味煮（むまに）馬のてりやきぶたのぬた
（はやし）ちやぶだいこつぶの大一座ケレスにあはもりぢん〳〵びやらしやめんげいしやで
びはぢやん〳〵さつさどふでもい
了古門ノ竹堂梅兄著
同叟斎景年画」（二十ウ）

明治三午年四月
東京　松島町　伊勢屋庄之助板」（裏見返し）

開化新聞浄るり入どゞ一　一（明治初期）

〔開化新聞〕浄るり入どゞ一　一
国麿」（表紙）
恋といふ字をひとりで習ひ〔（常磐津）ちいさいときからおまへにだかれ手習ひせいといわしやんしてお手本かいてもろふたるいろのいろはの御師匠さん〕たれに試見をされるやら」（一オ）
すきなビイルをついのみすぎて〔（常磐津関の戸）いつぱいきげんで関守がてうしさかづきたづさへてあしもしどろによろ〳〵と〕あるきや違式をおかすだろ」（一ウ）
おまへばかりが男じやないと〔（一中ぶしあさま）千も二千も三千もせかいにひとりの男じやとたのしむなかのわかみどり〕いふてこゝろでないている」（二オ）
つらいせう妓になりたるうへは〔（つな五郎）いやな客にもひよくござ思ふとのごのやまどりの〕なが〳〵ぬしをばよぶつもり」（二ウ）
松といふ字はわたしとおまへ〔（常磐津しのぶうり）二世のかためとだきしめて〕わかれりやア音くんきみとぼく」（三オ）
余所に待身のあるとも知らづ〔（ふじがつら）はなさそふてうは霞ののべを待日蔭の樹々ははるをまつ〕わたしやおまへの馬車をまつ」（三ウ）
はりつめて見てもあわれな身はなつ氷〔（むしうり）どうでにようぼにやもちやさんすまいわたしばかりがほれていてうそのへんじをまことおもひ〕とけてかんろのさとふみづ」（四オ）
深い思あんにしばしの間〔（清元三左衛門）思はざりにしこのちぢよくいまのこの身はすてぐさやふたりがゑんをさつぱりと切れても切ぬ浮草やよるべ定めぬ恋のやみ〕泪ながらのたまのこし」（四ウ）
思ふおかたのめにちらついて〔（常磐津忍ぶうり）過にし梅の花見月目見へはじめと手をついてふうと見合すかほとかほ〕うつるガラスのふたおもて」（五オ）
札びらをきつて見せてもわたしはいやよ〔（だきがしは）いんぐはなものになれそめておもはぬくらうくるしみをうけるもみんなわたしがわざ〕どふですへにはもめるたね」（五ウ）
まつ身の遅さにじかんのはやさ〔（しん内いだ八）まづこちへおじやととこのうちしばしも（ママ）をもいわざりしが〕ぽつといきつくあけのとり」（六オ）
袖から落たる証文拾ひ〔（常磐津関の戸）是このよふにはじめからきせうせひしをとりかはしふかいおかたがありながらかくしておいてまたわしに〕かねをかせとはあきれきる」（六ウ）
恵ほう参りにはつ卯をかけて〔（梅のはる）はるげしきういてかもめのひいふうみい〕酔てあぶなき人力車」（七オ）
つもる恋路によはしん〳〵と〔（しん内明がらす）わたしやさむくはなけれども時さんがあのよふにたゝかれさんしたのがおまへはさぞくやしうござりませう〕まつのみどりも雪の中」（七ウ）
板一枚下は地獄のふねのりよりも〔（梅のはる）宝船こぐはつがいによいはつものをみつぶとん〕したのにまいがわしやこわい」（八オ）
人の噂さに世間もせまく〔（らんてう）おまへのそふしたかんしやくはつねのこととは言ながら四ツ谷ではじめてあふたとき〕今の思ひをかくしづま」（八ウ）
たま〳〵ふたりで花見にでれば〔（老まつ）てん俄にかきくもり大雨しきりにふりしかば〕あいのりくるまのゑんむすび」（九オ）
界紙に書たるきせうも反古よ〔（らんてう）らんてうどのと縁切てふたゝびよんでくりやんなと〕きれりや山谷ですきかへし」（九ウ）
いまじやひらけていづくのとちも〔（清元山姥）立寄る軒のしばの戸につたのにしきをおり姫のいをはたならぬ糸車〕男女同権ちん仕事」（十オ）
あらましはなしはしてかへしたが〔（清元権八）逢た見たさはとびたつばかりかごとりかやうらめしや〕あとのひと言気に懸る」（十ウ）

開化新聞浄瑠璃入どゞ一　二（明治初期）

〔開化新聞〕浄瑠璃入どゞ一　二
国麿」（表紙）
恋のふち瀬に身はなげ島田〔（常わづ）たゝかしやんしよがつめらんせうがとても邪間な気にほれた〕浮くもしづむもぬししだゐ」（一オ）
恋の闇路に瓦斯燈立て〔（清元三段目）いろで逢しもきのふ今日かたいやしきのごほふ公あの奥さまの御つかいが〕ぬしが迷の道しるべ」（一ウ）
ほどもきりやうもすぐれたおまへ〔（常磐津関の戸）いつたいそさまのふうぞくは花にもまさるなりかたちかつらのまへずみあをふしてまたとあいまいおすがたを〕写真でのろけがきかせたい」（二オ）

さいそくするたびうるさいならば〔（おそめ）そんなそのよな言訳を夫よりわしがいやならば〕はやくおかねをもどさんせ」（二ウ）
枯柴のもへたつよふにわしやおもへども〔（常磐津）言ぬは言に増穂のすゝき百夜で実を見せて〕さきが生木でひが付かぬ」（三オ）
つきだした鐘を諸とも身代かぎり〔（あわしま）きのふにかはるありさまは恋しき人にあはしまの姿となりてそこ爰と〕今じやのんきなくるまひき」（三ウ）
しれぬてわざも何つらかろふ〔（長唄まつかぜ）おもしろやはれても須磨の夕まぐれすなどる舟のやつしばしみとせはこゝに〕きみのそばならいとやせぬ」（四オ）
主しといふ字に人冠が〔（こいごろも）わたしの思ふはんぶんでもおまへのこゝろに〕あるならくらうもせまいのに」（四ウ）
心がらとはあきらめられぬ〔（清元喜せん）ほれ過るほどぐちな気に心の底のしれつねでじれつたいではア、ア、ないかいな〕迷わせられたが口おしい」（五オ）
おまへゆゑにはくろふもしたが〔（一中ぶし小町）はがいならべんあふせにはこのとしつきのむねの闇こよいはれ行あまのがは〕浮たわたしもいしのはし」（五ウ）
海山へだてゝくらしていても〔（清元山かへり）四ツ谷で始めて逢たときすいたお方と思ふたつ因果ゑんの糸車〕心は切ないてれがらふ」（六オ）
主の為ならでかせぎしよか〔（しん内）売てわたしがその金をみんこなさんにいりあげて〕それじや権利のたてちがへ」（六ウ）
上のお慈悲で年季をとかれ〔（常磐津関の戸）禿だちから廓のさとへ根ざしてうへてはるごとにさかりのやまかぜが来てはねよとの兼ごとも〕金じや勝手なじしゆじゆふ」（七オ）
きれて間もこつそりあげて〔（ふじかつら）なつの夜の蚊やりのあとのうたゝねにざしき〳〵もしづまりて〕またぬよあけがきにかゝる」（七ウ）
開化に歩行ちまた瓦斯燈〔（常磐津山うば）人目忍んであふ坂のせきよりつらい世のならい〕恋にやこゝろもしんのやみ」（八オ）
二とふしんとは言わるゝもの、〔（しん内）御しんぞさんのおくさんのとうへ見ぬわたしでくらすより〕三味せんひいても主のそば」（八ウ）
米を買ふか芸しやかをか〔（しん内あわしま）皆わしゆへに親と子がきうりも今はたへはてゝ〕恋とよくとのしあんばし」（九オ）
主が帰県をなされしあとは〔（つな五郎）あけくれ恋しゆかしいのこゝろがつうじておまめなおかほ〕しやしんにはなしがしてみたい」（九ウ）
すかれぬさきからすいたがむりか〔（つな五郎）何の因果に其様な気強男がわしやかはいゝ〕苦労くげんもうはのそら」（十オ）
火水にくるしむわしや川せがき〔（しん内）思ひもふかき川竹のながれよるべもさだめなき〕胸のけむりはたへはせぬ」（十ウ）

浄瑠璃サハリ集　第六篇（明治初期刊か。石川和助版）

浄瑠璃サハリ集　第六篇
小信画」（表紙）
序　山寿陳人
酒楼（さかや）の杉はやしは喜怒哀楽の？（しる）し？？竹本が杉林もおなじけれど中に？？てふ物？（すみ）て酒気をなびかし声を発す其奇々妙々なるは或は泣あるひは笑ふこりやきこへませぬと感慨せしむはこの浄るり節の面白きに限るそをいさゝかあつめる看客（みなさま）の見台に捧ぐ」（見返し）
（前半は浄瑠璃のみにつき、省略）
わたしやよくにもゑりにもつかぬ〔アレあの山家やの嫁を見よ。可愛そふに久松が思ひつめて死だのを。見すて、直によめ入は。大身代の山家やで。ゑかふがしたさじやみな欲じや。あつかはづらな女じやと。大坂中にゆびさゝれ。人に笑われそしられて〕きしやうせいしも書た中」（九オ）
男ゆへなら子までもすてる〔（阿波の鳴戸）まいちど顔をとひきよせて。見れば見るほどむねせまり。はなれがたなくふりかへり。何所をどふして尋ねたら。とゝさんやかゝ様（さん）に。あはるゝことぞあはしてたべ。なむだいじだいひのくわんおんさま〕のくにのかれぬくさり縁」（九ウ）
深山ざくらにぬしや気がうつり〔（千本桜）尋ねたまへば若葉の君。みやこでお別れ申してより。須磨や八嶋のいくさをあんじ。一門残らず討死と。聞悲しさもさがのをく。泣てばつかりくらせしに。高野とやらんにおわするかと。云のの有ゆへに。小金吾めし連御ゆくへを尋出す道追人に出会〕私は苦労のふじの花」（十オ）
情過してふかまに入ば〔（かみ治茶や八）あはれあふ夜のしゆびあらばそれをふたりがさいご日とまい夜〳〵の死かくご魂抜てとぼ〳〵うか〳〵〕身上きつねの尾をだした」（十ウ）
あへば云れぬ人めの手まへ〔（狐子別れ）引合されてくずの葉はさすが二人のおやのまへいわで心をしれかしの〕の、字畳へ書つくす」（十一オ）
世話やき咄しはチトみゝよりな〔（釜ケ渕）うらめしいは五右衛門殿。こなたの心を直そふばつかり。五郎市をもどしたに。共に悪事を見ならはし。おやころしとは何事ぞ。かふいふ事としつたらば。もどすまいものくやしやと。くどき嘆くぞ〕後家で通せぬ今時は」（十一

ウ）

しんく苦労はみなあてがはれ〔（彦山六）此くろかみをそへとせばきやうだい一所に居るこゝろ先の世までも同胞のちぎりわするな長かもじその子まくらの事までも未来へつげのくしの歯もときほどかれぬもつれをも〕ふけの出るのもおまへ故」（十二オ）

きりやうで押れて私やふらんすの〔（廿四孝三）にほふとめきの高坂が。つまとしられてうづだかき。雪のふところおさな子を。だいて幾重の柴のいほ。けらい先へとおひかへし。行ぎただしく打とふれば。いぶかしながら手を付て〕おひげ撫でるへナヤモクレ」（十二ウ）

はなれかねてはりくつにつまり〔（玉ものまへ三）義理とおんあいふたすじに。つたふなみだは雨やさめ。身にふりかゝるかつらひめ。母の情の有がたさ。御じひといふも口ごもる。ふりの袂にしらさめ。はされ間は更に見へざかき〕貞女つくせば親不孝」（十三オ）

気休め聞とは思ふていれど〔（沼津奥）げに人心様々に町人なれど十兵へは。武士も及ぬ丈夫の魂。よ深に立し一人旅。千本松にさしかゝる〕ぬしの詞を息杖に」（十三ウ）

ましな娘とくがいへうられ〔（てらこや）つゝみし祝儀はあの子が香でん。四十九日の蒸ものまで。持て寺入さすといふ。悲い事が世に有か。育も生れも賤くば。殺す心も有まいに。死る子はみめよしと。うつくしうむまれたが〕なべにぶちこむ親の欲」（十四オ）

今時や名さくおまるいかねよ〔（彦山九）親子がためには鉄の。たてとふしたる娘がみさほ。ふびんと思ひむつまじふ。夫婦に成て下さらば。本もうとぐるにうたがひもなき。わが夫の此魂。むこ引手にとさしいだせば〕あつい五円か十円か」（十四ウ）

こゝがわたしのいつしやうの願ひ〔（質みせ）おなじみ甲斐には折ふしに。たゞ一ぺんの御ゑかうも。ほかの千声まんぶより。うれしふじやうぶついたしますと。跡はことばも泣いれば。お染はかを、ふり上て。ソリヤ曲がないどうよくな〕目にもなみだの玉霰」（八オ）

いまさらどふして思ひがきれう〔（さるまはし）不孝ともあくにん共。おもひあきらめ是もふし。一所にしなしてくださんせと。かくせしかみそり取いだせば。アゝこりやまてやい／〜まちをれやい是で死ると我いのちがないぞよ〕とみせて死ぬきはゑんせぬ」（八ウ）

出板人　大坂平野町淀屋橋角　石川和助」（裏見返し）

よしこの集　八編（明治初期刊。八尾屋善兵衛版）

よしこの集　八編

小信筆」（表紙）

鷺を烏といふたは無理よ雪はしろうてお月さんはいつでも円いと蘭八の梅川にも語れるこそ誠の情をうがつといふべしされば世界をへ廻りても変らぬは恋つきせぬも恋よしこの、八編目巻は同じく報知の辻占気も蒸気車の口画に因みて其吉凶を聞玉へとまうす

蝙蝠道人記」（見返し）

義理と世間の往生づくめ墨にそめてもしぼる袖

退状（のきぜう）を書けば泪がほろりとこぼれ切るといふ字が又にじむ

起請書間の行燈のかげに命がけなるむしもとぶ

文のかず〳〵思はぬうそを書も世わたる紙のはし

嘘をつくまといはんすけれどぬしとふたりで鍋ひとつ」（一オ）

胸にせまりし思案もいまははらの上にて取なをす

夢の中から世界を見れば人目しのばぬ途地はない

あれが来す文紙子に仕立川にたつ迄通ふノダ

とける〳〵と眼を細くしてジットなぶらす洗ひ髪

腹がふくれてしんるいふくれそこで男がむなぶくれ」（一ウ）

先へ魂とられて居れば異見聞ても気はおるす

六ツと六ツとの其鐘のねに今朝も夕部も散らす花

わづか短かい世に住ながらまてば一夜もあかしかね

逢へぬ心を我より先にしるは泪の一トしづく

おのがからだを我てに買てながされに来るいん果者」（二オ）

嘘か鉄砲の火蓋を切て余所へそれ行性根玉

風の音信（おとづれ）まつさへあるにましていわんや人として

針の山より今眼前（めのまへ）に越にや逢れぬきこく垣

とけて嬉しい柳の髪に月のさし込櫛のかた

切戸押あけそれかとみればおぼろ月夜の影もない」（二ウ）

はりをかけたはくどかれたときいまはしほれる此たもと

ぬしの心はふた葉のあふひ風がかはつてとうざかる

夢になりともねらひをつけて心ひきたやあづさ弓

つとめすれども衿にはつかぬいつもすがほじや見てくんな

意気な横島実意のうらとふたつあはせてこひ衣」（三オ）

神や仏や医者ではゆかぬやまひ直すはぬしのさじ

噂とり〴〵むかうでとへば女子（おなご）たらしの口上手

萩の音づれ空ふくかぜに聞てざはつくむねの内

実がま事かま事がじつかじつはま事がするうはき

わしもつらあてはと思へども見かへる男がなひわひな」（三ウ）

袖とそでとへ手はとふせどもぬれのかはきしゑもん竿
石にたつ矢に文まきそへてぬしにおもひがとうしたい
あげていはねばわたしがた、ず咄しやぬしへのぎりがかけ
むりなねがひが叶ふていまはよくのかぎりにそう思案
ぎりもうきよも我身もすて、なぜかおまへがすてられぬ」（四オ）
枕ならべてまだわかくさのもえぎふとんのつまごもり
ほんにあのやうに惚られたならさぞやつらかろうれしかろ
うそはつみじやとしつてはできぬしかしぬしへはするまこと
心そゞろに神さんたのみむめをたつたりすはつたり
見ても見ぬふりいはぬがひみついやなせりふはき、つんぼ」（四ウ）
登りつめてはわしやゆびさ、れひよんなゑにしをつなぎ凧
すいたおかたのそのひとことがしやくの納るくすりうけ
筆の命毛きれなばきれよもはやながらへいぬ文句
そうてかうして是から先は可あいみどり子ひとつまつ
われた茶碗もかけさへあへば水もはなしももらしやせぬ」（五オ）
いちど見そめて二世迄かけてさんど笠きてしのぶ旅
私しや地車ツイ気がまはりほんにしんからやせがくる
瀬ぶみしながらツイ深はまりうかみかねたるこひのふち
時の氏神あいさつもたれよもや反古には成やせまひ
西へ〳〵とよふねにかよひまるのはだかのけふの月」（五ウ）
笑はれるのもむりではないよ泣てくらした跡じやもの
月見かごとに内をば出たがぬしにあふ間はか、れ雲
ま事あかさず人うたがうてどう言やかうじやとむり計
あはぬつらさに呑玉子酒きみといふ名の嬉しさに
すまぬ心はかげみのわたしぬしのゆかりは腹の月」（六オ）
おつな所へふきつけられて今ぢやくがいのうきしづみ
ひく手あまたのおまへじや物を少しやりんきもせにやならぬ
癪を押にもかひなきちからほそいゆびわもふとうなる
恋の山道人目のせきをこえて嬉しいぬしのそば
人にやかうぢやとまたいわ田帯乳までくろうになるわひな」（六ウ）
腹が立なら踏なと蹴なとあいそづかしもせまる義理
眉をかくしてもしこちの人女房もつとはいつのこと

ふではとれども文句はできずどうぞあはれぬ事かいな
すてられましたよこ、はなさんせすてたわたしになにみれん
嬉しう忍んでかなしうむすぶつらや人にもいはた帯」（七オ）
すいなおまへの顔みるたびにけつくわたしはぐちになる
つらやせけんに二人のうきなたつた一度のあふせから
はぢし姿を推量あれとまねきかねたる枯尾花
ぎりとせけんがよにないならばおもふ浮気がして見たい
待宵の月は冴ても私が胸はなぜにぬしゆへはれぬやら」（七ウ）
仇にや折らさぬさくらと此身酒のきげんでよしなんし
しんとふけゆく鐘の音かぞへまてど便りもなきあかし
むりな首尾して一寸あひにきたアレサはなしはあとにして
紙のはしをば渡ろとま、よ文でおもひのとゞくまで
りんきするのをいくらもためてあふて一度にいふわいな」（八オ）
あきがきたやら小夜更てからかへろ〳〵がきにか、る
あつい御異見わすれはおかぬしたがこちらも忘られぬ
七曲（な、わだ）のたまのあふせもせかる、中にあかき糸ひく蟻もがな
ぬしといふ字はまだ気がうすいいつか申（もうし）とかへて見しよ
あはぬつらさによな〳〵泣て蚊ほどやせたるみのつらさ」（八ウ）
こがれ〳〵し此むねの火を消すは水よりぬしの顔
末のはなしはまづまたしやんせ今の仕打があんじられ
野辺の若草つみすてられてたとへ切れても根はのこる
つもるおもひを枕にかたりぬしにあふ迄ひとり言
ひらきかねたる日かげのさくらあだな霞が邪魔をする」（九オ）
口説れて否にあらねどわしや稲舟の楫もまくらもとほきゑん
ぬしは駒形駒どめいしよどうぞ今宵は首尾の松
つらや日脚をはかりてまてどぬしはけふしもこんてんぎ
雪の梅見にツイ一枝とひらくかをりをまつ朝日
もしやそれかと掛香のうつりうらみおもてみこひ衣」（九ウ）
かぞへ尽せぬ数多の中のすきな一人が浮気者
捨た浮世にもの思へとや見るは涙の筆のあと
あれは勤じやそりや嘘じやのとわけをしらざる人の口
嘘を月夜の影から聞ば又もやみ〳〵だまし打

気にも五ツのさはりとやらで罪をかさねる六ツの鐘」（十オ）
逢夜はばかる其燈火（ともしび）をけして苦労の胸に焚（やく）
一日逢ずば最ふ千日に刈たかや芽の燃る胸
嬉しい言葉のはなから又も捨た浮世にかへり咲
あちらむいては出す其舌にのせられて居る口車
夢のとがなる寐乱髪をひとにとわれて言つらさ」（十ウ）
ほどのよひので一倍苦労よそへ出すのが案じられ
あこやこゝらで水責火責つらい辛抱もかげの舞
髪もゑにしも皆一ときにふつゝり切たる義理づくめ
心かたいと出す座禅豆いやじや九年もまつもの？
首尾を邪魔する長尻咄しはらを立たるしゆろ箒」（十一オ）
名残をしげに袖ひきとめてものをいふさへなみだ声
あいつばかりは偽るはづはないとやつぱりのろけてる
水もゝらさぬおまへとわたしなぜかこんなに汗が出る
あつい御異見わすれはおかぬしたがこちらも忘られぬ
人目ばかりのされ口上ももしやほんかとあんじられ」（十一ウ）
あへばわかれるつらさをおもやほんにこの世は苦のせかい
跡へひかるゝ柳のいとにわかれ出口のあさぼらけ
まちし花さへあらしが吹ばもとのつぼみが恋しうなる
おつな所へふきつけられて今ぢや苦界の浮しづみ
ひくてあまたのおまへじや物をすこしやりんきもせにやならぬ」（十二オ）
いつがいつ迄とめてもおけずけさはかへして跡はさけ
うしや卯か〳〵まかしたこのみうまくねとられはらがたつ
泣たむかしはゆびきり〳〵す今は身まゝにつかれさす
なまぜ添はさぬしんくもこして愛相づかしのかるはづみ
すまぬ思ひもつきあふ今宵心あかしてはれたきり」（十二ウ）
？をもとでが三歩にまはりほれりや七歩の身のよはみ
嘘と真事が有明あんどくらき言訳かきたてる
何のかんのと其深切が今に苦労をさすのだろ
神にちからをかり寐の枕夜たゞ恋しい人の夢
憎や今更振たる毛鑓手のうらかへしてハレハイサツサ」（十三オ）
中々くらへぬアノ渋柿ににくや嘘つく種だらけ
是ほど真事を尽て見てもとゞかぬは身のふしあはせ
嬉しがらせた其うら壁を今宵かへしに来たのかへ
おもひ切る文すゞりの海へ筆の命毛なげてかく
けふは人の身また翌（あす）はわが身の上にきく明がらす」（十三ウ）
猫の目の様なおまへのこゝろかはり安いにこまります
直にそだつたわたしのこゝろまげるおまへは雪の竹
しばし退（の）くのがお為とならば末のまことを取かはす
人の事かと立よりきけばみんなおまへとわしが事
三味を枕に一夜をあかしひくにひかれぬ親のばち」（十四オ）
親の目きゝが違ふたる新身さやへおさめぬいひ名付
笄が若や角にも見よかと気兼髪も両手にいわぬわし
雲の懐とび出す思あん風の手づめのむせ田葉粉
帰し兼てはとらへし袖につらやこぼるゝ朝のつゆ
跡へ引るゝこゝろとしらず酒にしたさのはしりかご」（十四ウ）
親にもらひし大事のからだ実とかへ事仕てあげる
今朝は鳴ずに我身と倶に朝寐せよ鶏せよがらす
恋はチヨロケンあつたら春を世間かぶつてする苦労
いやな浮名がもれたる木綿トンダはじまでつらさ染
嘘と嘘とに中だちされて実とじつとで逢た中」（十五オ）
忍び逢坂人目のせきを行もかへるもこゝろおく
嘘でつりがね又堤燈をもたせぶり成憎らしさ
真事いふてもわからぬ人の耳で鼻かむすてぜりふ
忘れさんすな忘れはせぬよふまあ踏つけさんしたな
ポント当りてくどきし胸を丸うして又かへす今朝」（十五ウ）
絵本問屋　大坂新町東口
八尾屋善兵衛」（裏見返し）

開化はやり都々逸（明治初期）

開化はやり都々逸」（表紙）
当世開化
流行都々いつ

馬く
山藤はん
？の巻
よしとら画作」（見返し）
花を見めぐり日暮しのつまづく名も縁のはし三筋に分る往来の辺り照そふ瓦斯燈のあかりに
輝やく煮売店の座しき狭しと大一座ひく三味せんの糸に足をとめられて歌ふ都度逸を二ツ三
ツ立聞して覚へしま、をかき現はすになん
花見月
雪月花を愛す
独遊亭風歌述」（一オ）
葭と芦との節あるゆへに深くさし込秋のしほ」（一ウ）
紅で書たる此はなし文雁の便りを待つらさ
こちらでせいたからとてさきの首尾がわるければしかたがないよ」（二オ）
文を手まくら楽しい女夫（めうと）酔（すゐ）な隅田の都どり
気らくななかだよ気さんじなものさね」（二ウ）
開きか、りし寒紅梅を水上げ済して床の花
こんなうれしい事はないよ」（三オ）
おもふ私しに思はぬおまへどうで浮気はやみやせまい
あはびのかたおもひでしゞうくろうがたへないよ」（三ウ）
寒い夜風に身をすり寄て嬉しなきにかなく千鳥
なんだかおつだよ」（四オ）
りん気らしいといわんすけれどだれがこんなにぐちにした
人にくらうをかけながらうはきもい、かげんにしておくがい、や」（四ウ）
癪を押へし其手を押へぬしの短気でこの病ひ
じれつたいよおまへゆへにくるしむのだよにくらしいねへ」（五オ）
待もせぬ客はくれどもまつあの人も声も聞せぬじれつたさ
まつ身ほどつらいものはないとのたとへだからしかたがないのさ」（五ウ）
三筋霞のひく三味せんやさかへ栄る門のまつ
なんだかやうきになつてきたやうだめでたい事のはじめの小ぐちに向てきたよ」（六オ）
ぬしのあるのに命をかけてまよひ染たが因果づく
このうへはみすてるときかないよ」（六ウ）
便りすくない此身の上としつて居ながらにくらしい
人のよはみをこんでいぢめておくれでないよ」（七オ）
あめの雁がね枕にひゞき一人りなみだの露しぐれ
いつそふさいでかんしやくがおこるよ」（七ウ）
不途した事からつひのりが来て今は片時わすられぬ
かうなつてきたうへはみづをさすともわたしの心はかはらないよ」（八オ）
更て青田にこがる、蛍れんじまで来て蚊帳の外
ほんとうにやるせがないよ」（八ウ）
親のゆるさぬしのびの駒はひくに引れぬ罰あたり
たがひにおもひおもはれてできたなかはすへ〳〵あんしんがならないのさ」（九オ）
人に気がねもおまへのおかげ明暮くやしいことばかり
おまへゆへにはどんなにくらうするかしれないよこのうへに心がはりもするとたゞはおかな
い」（九ウ）
あがりつめたるあの奴凧色もつのればのめをつく
あんまたがひにあつくなりすぎるとなかおれがするから気をおつけよ」（十オ）
いやなざしきで笑ふつらさないてうれしいぬしのそば
まはんがあればすかぬおきやくのきげんきづまをとるのだよ」（十ウ）
雨の蛍とわたしの心壱人こがれて夜もねぬ
（　？　）くれないからばか〳〵しいよ」（十一オ）
恋の闇路はかねての覚悟晴て逢れるなかじやない
この？ちは？？ばたれしもまよいやすいがふかみへおちぬやうにおしなはいよ」（十一ウ）
松にしのんで夜長の秋をあかしかねたる床のうち
ぢれつたいよばか〳〵しい」（十二オ）
せじとつとめになみだの笑顔なかせるおまへは無理ばかり
？？？ないよ」（十二ウ）
色の穂垣の朝がほさへも何をすねてかうしろ向
どうも心うちはわからないのさ」（十三オ）
切た中とてたよりはさんせ不好（いや）で別れた縁じやない
とうざかつたとてじせつがくればいつしよになるかくごありますよ」（十三ウ）
二葉あふひのふたりが中は人がさかふと切はせぬ
おたがへにじつをつくしあふこ、ろもちさ」（十四オ）
思ひ出すとはわする、習ひ私しや夜の目も忘られぬ
ほんとうだよ」（十四ウ）

開化新作度々逸　壱
（明治初期。麗柳楼嘉和津作。加賀吉版）

開化新作度々逸　壱
永島福太郎著
加賀吉版」（表紙）
しんさく開化都々一
麗柳楼嘉和津作
孟斎画
両ごく加々吉梓」（見返し）
はりがねが口を聞よな開化の世なら写真に苦舌を言せたい
色はせず京とならつた子でも今ではアイウエヲのサシスセソ」（一オ）
文明開化で規則がかわる替らないのが恋の路
朝夕に顔は見合と心のたけを通じかねたる硝子窓」（一ウ）
おまへの心と直安の時計ふらり〳〵とくるい出す
究理木瓜と言んすけれど河童野郎の屁房書生」（二オ）
まゐらせかしくと文かくよりも縫針手業を習はんせ
悪を懲して善事をすゝめ日毎発兌（うりだす）の新聞紙」（二ウ）
外に瓦斯燈内にはらんぷ人の車の三筋街
しのぶ恋路に石橋かけて手に手引れて渡りたい」（三オ）
屏風小楯に抜刀隊が女隊へ斬込やみ仕合
つらい座しきの芸妓（げいしや）を廃て権妻気どりのかこゐもの」（三ウ）
心がらとて他人の中で恥をかき染つちかつぎ
若やそれかと起出て見れば新聞配りのすゞの音」（四オ）
雪見帰りにもやいの綱も解て嬉しき家根のうち
いつそ死んでと思ふて見たが命ありやこそ末もある」（四ウ）
剃た眉毛を再び伸し二度の披露（ひろめ）もぬしのため
互ひの心に電信かけて言ず語らず人知れず」（五オ）
色の世界と言ふのは無理か五しき彩色（いろどる）万国図
いきな散髪小いきな坊主まげのあるのは二タ心」（五ウ）
這ば立たてば歩めとおしへた口で今さら転倒（ころべ）とは無理なおや
其日ぐらしと寒暖計は暑さ寒さで延び縮み」（六オ）
あれと言ふ間も煙りと共に蔭も見へなくなる蒸気
明るい結構な此世を見捨暗い地獄のあら稼ぎ」（六ウ）
思ひに堪かね文かきくけこ何様（どうか）首尾してまみむめも
おまへの心をらんぷで照らし恋の夜学がして見たい」（七オ）
教員が力尽くして教へる生徒文明進歩の区学校
引馬お駕籠の大小名も今じや手軽の華族方」（七ウ）
郵便のたより嬉して手にとり見ればあれさいやだよ人ちがひ
髭のある人亭主にもてば軍や地震で気がもめる」（八オ）
人手省いて多くの品を造る蒸気の大器械
空にや風船陸には蒸気車（じやうき）海に気船の早便利」（八ウ）
短かい様でも隅々までも届く保護の樫の棒
苦界勤めも開化の御代で自由づとめに二つ割」（九オ）
巡る地球は目に見へねどもつもるよはひは目に見ゆる
勧善懲悪婦女子の教へ新作ばなしの大芝居」（九ウ）
朝日にかゞやく日の丸旗は神の御国の御祭日
娼妓（ぢよらう）の真事と玉子の四角なけれど三十日に月は出る」（十オ）
十五夜に兎飛出て穴打眺め月の出ぬのでまごついた
足手伸した親をば捨て恋路に迷ふ不孝者」（十ウ）

開化都々逸　三編（明治初期。大倉孫兵衛版）

開化都々逸　三編
万孫板」（表紙）
ザンザめく酒の座敷の撥き唱に千万無量の情あるは都々一の他何をかあらんと妙々利屈を張
てもないが実に都々逸のさわり文句は其の時世に随而年々歳々趣向の同じからざるは妙とや
云ん又不思義とや譬ん其ふしぎと妙ヲ合併して綴りし冊の新文句嗚呼面黒イと我乍サツコラ
サアとしか云
　親釜集の隊長　皆真戯筆」（見返し）
思わぬ地震で身のなり行は野暮な田舎の侘ずまひ（武陵）
ついでに其方（そなた）に意気（いけん）があると主から聞のが私ヤうれし（土岐）」（一
オ）

背中合せの松ケ枝にさへ他所から手を出す藤かつら（此花）
猫に小判の相談すんで今宵抱れてねづみざん（心二）」（一ウ）
背戸の出合が結ぶの神よ草をひき寐の新まくら（鮮音）
是は私しが苦界のまこと誓紙代りに出す写真（瓜畑）」（二オ）
首尾を松ケ枝竹町の渡し越へて魚十で呑二人り（魚の家）
心替りなアノ母さんに南無と覚悟はしながらも（俊郎）」（二ウ）
つもる咄しにいつしか更て知らず〳〵となきあかす（？津）
ヤツトの思ひで人目を兼て色であひしも昨日今日（皆真）」（三オ）
そんな其様な言訳知らぬわたした写真が起証文（千桃園）
露が滴（しづ）くかしづくが露か濡て色ます新まくら（安楽）」（三ウ）
親も承知で日毎の学校恋と言ふ字の習ひそめ（武陵）
人の噂にちがわぬ離縁南無さん覚悟はして知れと（土岐）」（四オ）
六時前にはかへさにやならぬ堅い屋しきの御奉公（かいしん）
ぬしが来たかとわしヤ待よひにふけてれんじの窓の月（鯛？舎）」（四ウ）
このもかのもの浮名もいつか添て嬉しい隅田川（湖信）
閨の火も消て互ひに解たるのちは吸糧（すいがら）の火で顔を見る（露香）」（五オ）
すむの済ぬといふのも口説寐ては目出たきすみ田川（奥の家）
深く成たる互ひの中はほんに馬鹿らしきのふけふ（武陵）」（五ウ）
恋の初風身に染〳〵と主の顔見た其日より（鮮音）
先は華族で此方は車夫で及ばぬ恋だが身のねがひ（石井）」（六オ）
傾城に誠ないとはわけ知らぬ記者見せてやりたい人がある（蝸牛）
私しヤ嫌だといふたるものを口説落して口とくち（霞香）」（六ウ）
和漢書籍東錦絵問屋　東京日本橋区日本橋通壱丁目十九番地
大倉孫兵衛」（裏見返し）

〔懐中絵入〕端唄都々逸類集（明治十四年。清水嘉兵衛版）

〔懐中絵入〕端唄都々逸類集」（扉）
（端唄省略）
◎都々逸
主を待夜は戸たゝく風も若（もし）やとあたりへする気兼
久しぶりだと一ざの手前たつた今逢たその人に
思ふお方になぞではないが解せて見せたい胸のうち
口でけなして心で惚て人目忍んで見る写真」（三十六オ）
初手はおまへに説得されて今じや妾しが異見する
鐘の権兵衛を宵からやとひ明のからすを追したい
好と嫌ひが一度に来ればほうき立たりたをしたり」（三十六ウ）
浮気自由の権ある主を手管の糸にて捕縛する
便り待のにまた川づかへア、もぢれつたい五月雨
生に開化をした人よりも律儀に旧弊な人が増し
待に甲斐なき今宵の雨で内に居ながら袖ぬらす」（三十七オ）
私が亭主を罵詈（そしる）ぢやないが白痴（たわけ）で不実で女好き
我が女房を誹謗（ひぼう）ぢやないが胡臭出つ尻ぶ性もの
真におまへはラムネの徳利何為やお尻がすはるやら
かよわい腕も癇癪ぢからすねた枕を捻（ねじ）なをす」（三十七ウ）
義務が立ぬの世間があるの何の彼のとてよく逃る
動けないほど年季と尻と借を背負（しよつ）ても気はかるい
朧ろ月夜にまつ身の嬉し雁は帰るに主は来る
逢て居てさへ届かぬ言葉文に書れるはづがない」（三十八オ）
脱だ羽織を行燈にかけて人目をつゝんだ忍び足
小鳥の名に似た女郎の箪笥明て見さんせ四十雀
首尾が不首尾か不首尾が首尾か返さぬ女に待女房
義理も不義理も哀れも無理も札の紙から湧て出る」（三十八ウ）
才槌あたまも私しが見ては打出の小槌で捨られぬ
顔を赤らめ恥かしさうにそんなら貴君と？つた切り
ころし文句のおまへの文は没書どころか肌守
仕打で味もつ居へ膳料理一ぱい機嫌で箸を取る」（三十九オ）
こんなに嬉しく逢れる夜半があるで悲しい夜半もある
指を切らふとした剃刀を今日は嬉しうそる眉毛
嬉し可愛い昼寐の夢をヱ、も邪魔した手のしびれ
やつとはふ子と国会議院立るやうでもまだ立ぬ」（三十九ウ）
西洋つくりはおや馬鹿らしいかぞへる天井の板がない
黄でも白でも張紙やいやよ身代かぎりとコレラ病
大工たのんで鉋でそつと立たうき名をけづりたい

夢でもよいからもちたいものは金のなる木とよい女房」（四十オ）
見捨しやんすな行末までもなど、写真へひとり言
うその中からまことの事を云せて見たさにこの苦労
雨のふる夜も通ひはすれどたゞの一度も濡はせぬ
是はわたしの替へ紋なぞとうそをゆびわのかげのろけ」（四十ウ）
ぬしのうは気を聞たびごとに癪がふとつて身はやせる
早くおまへを鯰にさしてふたりぬら〳〵暮したい
もてりや散財振れりややけよどうせ斯なりや空財布
実のあるのが却ツて苦労人にもそんなであらうかと」（四十一オ）
わしが恪気はうけ売なれどぬしのうは気はおろし売
濡るえにしかあい〳〵がさもほんに嬉しい俄雨
浮た同士と云るゝはづよ涼み舟から出来た中
日和定めぬこの秋風になびく尾花の気が知れぬ」（四十一ウ）
濁り水でも澄さへすればそこのまことが見へとをる
座敷相場をくるはす猫はちよつと二を上ゲ三を下げ
そふての苦労は覚悟だけれど添ぬ先からこの苦労
ひざにもたれて顔うちながめこんなおまへになぜほれた」（四十二オ）
廊下来るのはたしかに狐狸もふるいと大あぐら
鯰だまして権妻にやなれど又も地しんで元の猫
うぬぼれ鏡で顔見る度にほれぬ女の気が知れぬ
東はしらめど女は来ないそこでアホウと鳴からす」（四十二ウ）
大きな声だよ静におしな主にや知れぬか靴の音
人もほめるし私しもよいと思つて見とれる主の顔
恋のやみ路に迷ふてゐるをランプ親父の異見する
岡ぼれしてさへ浮名が立に恋じや出る筈新聞紙」（四十三オ）
菊もませたか籬のはしにひらく禿の花のつや
羽織きせかけ行先ねどひすねてたんすを背でしめ
私しお尻は気車軽気きう早いと軽いで人が乗る
晴て逢とはそりや主がむり雨と雲とでもてる中」（四十三ウ）
うき名立られ引には引けずどうせ斯なりやちからづく
月を惜んで夜は更しても目には目のない朝ねぼう
水掛論でもしなけりや胸にもめるほのふが消しかねる
米は上るし等級は下るみそかの予防がしてほしい」（四十四オ）
ぬしは口中私しは腋香ほんに二人はくさい中
妻子（つまこ）の有のを承知でほれて末に手ぎれと出る積り
宵のくぜつに無理云過て今朝の別れが気にかゝる
更て待夜に見る秒時（せこんど）は一時〳〵に迫るむね」（四十四ウ）
折々亭主がおせわになると遠火でこがさぬやき上手
新ぞにや嫌はれ年増にやふられ僕ほど果報なものはない
主もするなら私しもするよ浮気くらべじや負はせぬ
右に主の手左りにペラをつかんで遊歩がして見たい」（四十五オ）
きせうせいしを活字に摺せ当名と月日をあけておく
胸にわきたつ蒸気を主のおそい車に仕かけたい
きつとざ升と帰した床にぬくまる間の肌寒さ
忌（いや）みはなれた小意気な年増一寸ごらんよこの写真」（四十五ウ）
ほれた私しの迷ひか主がじつを言ふ程うそらしい
雷の光りで逃込む蚊やの中でとられた臍の下
五月雨に袖も乾かぬ口舌の中へ空で音をなくほとゝぎす
親のゐけんと霜夜の酒は五臓六腑へしみわたる」（四十六オ）
逢ばさほどに咄しもないが顔見りや苦労で寐つかれぬ
じれて当なく待にはましかうそでも来るとのこのはがき
人目忍ぶが岡とは嘘よ四季の景色にながめたい
座敷住居（すまゐ）の梅にも鳥が人目忍んで逢に来る」（四十六ウ）
他の草木がしほれて後に松のみさほがよく知れる
君を松むし夜はしん〳〵と情知らずのかねたゝき
廻し屏風のおし鳥詠めひとり寐るな内にねる
愚痴もいふまいりん気もせまい人のすくもの持くわほう」（四十七オ）
達者な芸者も及ばぬはづよおどり上手な座頭金
ぴよんと心におろした錠を義理と云字がねじり切る
ペラの蛭子がそろばん置て外債利足を案じ顔
明治十四年六月六日御届
編輯兼出版人　東京神田区鍋町二番地
清水嘉兵衛」（四十七ウ）

三すじの種本（銅版。明治十六年。小林鉄次郎版）

三すじの種本

目録

一端唄替うたの類
一文句入都々一
一本てうし端唄
一二上り端うた
一三下り端うた
一都々一

野村銀次郎編輯」（目録オ）

都〻一文句入之部

水にこがるゝ私しの心〔（清元）浮てかもめの一イ二ウ三イ四ヲ〕指おりかぞへて首尾をまつ（新ばし小とく）

二人女夫（みよと）とならふとまでは〔（文字）互に胸もあかしあい〕今さらいやとはむりな人（すきや丁小みね）

おりる階子をよびかへされて〔（はうた）どうでも今日は行んすかと〕せなかたゝいて舌を出す（三遊亭円遊）

人の畑へくわをば入て〔（与三）しがねへ恋がなさけの仇〕又もニウスーの種をまく（市川団州）

あんじこがれてくろふもたへず〔（おはん）いとしかわいのかず〳〵がつもるとかひてしやくとやら〕やせおとろふたもおまへ」（四ウ）ゆへ（よし丁大吉）

世界ばなしに二人りへいけん〔（梅川きく）聞いる二人りは胸にくぎ〕知れやせぬかと顔とかほ（よし丁歌吉）

あれさおはいり此蚊帳のうち〔（神田祭り）小夜着ぶとんをなぐりかけ〕二人り楽しむねやのうち（春の屋小まん）

しあんあまつて辻占見れば〔（塩くみ）立名いとはで去年はこゝに〕時せつまてとの神のつげ（かふじ丁春吉）

こふなる事とは元より覚悟〔（明がらす）すいた男にやわしや命でも〕苦がひぐらいは厭やせぬ（八幡楼若竹）

笑ふやつには勝手に笑へ〔（とみ本）ぐちな女子にみれんな男ようあひぼれの実くらべ〕二人りあくびのでる」（五オ）までも（はたご丁小かま）

男のい、のも亦しんぱいさヲホン〔（文字）あかの他人の傾城に〕かわいがられりや身がた、ぬ（柳亭枝太郎）

たび〳〵お部屋をかくれて出あひ〔（はうた）こんどおふのが命がけ〕どふか人目にあはぬよふ（八幡楼小浪）

私しとおまへの二人りが中は〔（国せんや）二十年の夜るひるをなげき出し泣明し〕やぼでそつたる中じやない

私しをそれほどうたぐるけれど〔（清元）はすの浮気やちよつとぼれ浮た心じやござんせぬ〕二世も三世もかわりやせぬ（よし丁〆子）

まよひこんだる恋路のやみは〔（ながうた）きいておどろく人もなし〕たれ」（五ウ）しも一度は有習ひ（はたご丁小〆）

早くお顔の見初がしたく〔（清元）もじかせきがき書初に〕かひたぬしゑの此手がみ（住吉楼田毎）

春はのどかにツイきがゆるみ〔（清元）柳さくらの仲の丁〕浮れくるはのおもしろさ（三遊亭円太郎）

聞たいけんも忘れはせぬが〔（文じ）はやきぬ〳〵と引〆る帯かくさる、たはむれも？？？はあらぬうつり香かに〕今日もま、よとぶんながし

ま、よ浮名も七十五日〔（はうた）さかりの花と人の身はあすをも知れぬ夜半の風〕さとりや浮気も今のうち（よし丁とんこ）

二階せかれて晴てはあへず〔（はうた）ふけ」（六オ）て逢ふ夜の気ぐろふはひとめをかねて格子先〕咄しするまもま、ならぬ（河内楼白砂）

うた、寐ばかりはおよしといふに〔（はうた）あれねなんすか起なんし〕お風めしては身の大事（はたご丁かま吉）

ひとりつく〳〵火鉢にもたれ〔（一中）めには泣ねど気につかへむねになみだの玉くし毛〕うらみ言葉を夕しぐれ（よし丁歌吉）

ランプ吹けしそろ〳〵起て〔（清元）よそ目にそれとかげくらきとりのねぐらをたどり来る〕よばいすがたは妙なもの（柳屋小さん）

客の目顔に往来筋とよけてとふすは鉄道馬車」（六ウ）

ど、いつ之部

主をまつ夜は戸たゝく風ももしやとあたりへする気がね」（三十オ）

あかいきれかけ嶋田のうちはなぜか心がさだまらぬ

おなじ流れにさてすみながら鷺はゐねむる鶏はあさる

思ふお方になぞではないが解せて見せたいむねのうち
あゝもぢれツタイ顔見ぬうちは用がなんだか手につかぬ
朝顔の花のよふなるお前のこゝろ日ごと〳〵に気がかはる
口じや言れず仕打じやできずおしと目くらの色はなし」（三十ウ）
ないてまつ夜にふけ行かねは明の鳥よりなをつらい
船のもやいもいつとけそめておまへしだひの流の身
初手はおまへに説とくされて今じやわたしがいけんする
さみだれのある夜密にかうしの先で見ればうれしい月のかを
かうすりやかうしてかうなる事としりつゝこふしてこうなつた
好ときらいが一度にくればほうき立たりたをしたり」（三十一オ）
梅のにほひをさくらにこめてしだれ柳にさかせたい
なべにみゝありとくりにくちよちよくとはなしもできはせぬ
なまに開化をした人よりもりちぎに旧弊な人がよい
巻紙のへるにつけても我身をおもふ早くねんきを明くれに
なまじ声をばきかせておひて思はせぶりだよほとゝぎす
待に甲斐なき今宵の雨に内に居ながら袖ぬらす」（三十一ウ）
かみはきつてもにせまでかけたふかいゑにしをきるものか
一日どころかたゞ半ときもかを、見なけりや気がふさぐ
わたしが亭主をそしるぢやないがたわけで不実で女ずき
ほれているのをしつてはいれどおきのどくだがおことはり
もと〳〵浮気でこふなりながらうはきするなもよくできた
わしが女房をそしるぢやないがわきがで出尻ぶせうもの」（三十二オ）
人のいけんもしかねぬ人が人にいはる、このしまつ
わたしはとしわかまだ親が、り思ふおまへは女房もち
義務が立ぬの世間があるのなんのかんのとよくにげる
早くそめたいわたしのねがひいつまでしらはでおくのだへ
おまへたてればわたしがた、ぬこ、ろふたつに身はひとつ
逢ていてさえとゞかぬことば文にか、れるはづがない」（三十二ウ）
あやめによふにたかきつはあれど主に見まがふはなはない
びんのほつれはつとめじやほどに目かど立づにゆるしやんせ
脱だ羽織をあんどんに掛て人目をつゝんだ忍びあし
ふつ〳〵いやだと口ではいへどじつはみれんできれかねる
文じやわからぬ心のたけを寐ものがたりにして見たい
小鳥の名に似た女郎のたんす明て見さんせ四十雀」（三十三オ）
月にむらくも花にはあらしとかく浮世はさわりがち
はかない此身は軒場のむしよひと夜つられてなきあかす
ころし文句のおまへの文は没書どきろかはだまもり
梅とさくらの色香をくらべ中にすましたいと柳
ところ定めぬアノうき草はけふはむかふの岸にさく
仕打で味ものすへぜん料理一ぱいきげんではしをとる」（三十三ウ）
我身でわからぬわが身の心ひよんなはづみで此しだら
なんぼしあんの外とはいへど義理をしらない人でなし
指をきろふとした剃刀をけふは嬉しうするまいげ
きれる心はみじんもないがきさきがふじつでこのしまつ
いろけづひたよ此ほふづきも人目なければちぎられる
嬉しかわい、昼寝の夢をヱ、も邪魔した手のしびれ」（三十四オ）
いわにせかれてながる、水も末にやまとまるたきつ川
顔にやまよはぬすがたにやほれぬとかくさくらの花ははな
黄でも白でも張紙やいやよ身代かぎりとコレラ病
宵はまたせてれんじの月のふけてさしこむ胸のしやく
かむろみどりも時さへくれば松のくらゐのはちもんじ
大工たのんでかんなでそつと立たうき名をけづりたい」（三十四ウ）
よいのくぜつに夜中の手くだ雪もつもるか恋のやま
いやになりんこおへやの小ごと百もせうちのくそどきやう
夢でもよいからもちたいものは金のなる木によい女房
のろけさんすなその口ほどはさきじや思はぬうはきもの
此ゆきによふきなましたと互に積る思ひの深さをさして見る
うその中からまことの事を言せて見たさにこの苦労」（三十五オ）
ふられながらもまだうぬぼれてたまにひとりでねるもい、
枕ひきよせまたねの床にぬしのすがたの夢うつ、
雨のふる夜も通ひはすれどたゞの一度もぬれはせぬ
ねがひとゞいてヤレうれしやと思やおまへのまたうは気
たつはろうそくた、ぬはねんきおなじながれの身じやけれど
是はわたしのかへもんなぞとうそをゆびわのかげのろけ」（三十五ウ）

たがひにひとり身何はゞかろふ晴てふうふになるがよい
わけもきかずにふんだりけたりなんぼしがない身じやとても
もてりやさんざいふられりややけよどうせかふなりやから財布
あふたら言おふと思ふたこともうれしまぎれにどふわすれ
おやもとくしんせけんもはれてもしへとよぶのはいつのこと
実のあるのが返てくろふ人にもそんなであらふかと」（三十六オ）
まてど来ぬ夜はかたぶく月にかこちがほなる我なみだ
うきなもふけのぜうだん事がつのり〳〵ていまのやぼ
浮たどうしといわるゝばつよ涼ぶねから出来たこと
ふじつする気はすこしもないが何をいふにも主人もち
人もかうかとついぐちらしくけんくわするのもほれた情
ひより定めぬこの秋風になびく尾花の気が知れぬ」（三十六ウ）
女房ざかりをしらはでおいていまさらきれろとなんの事
びく〳〵さんすなどうなるものかたつたうき名はきへはせぬ
濁り水でも澄さへすればそこのま事が見へとふる
もつたいないとはツイしりながらむりなねがひの神だのみ
義理やせけんと前おきいふて切てくれろかそりやならぬ
座敷そふばをくるはす猫はちよつと二ヲ上ゲ三ヲさげ」（三十七オ）
人のしやくりできれるのなぞと奴だこではあるまいし
なぜかおまへはまつりのうしで人のはやしにのりたがる
廊下来るのはたしかに狐狸もふるいと大あぐら
ゆきのかんくをよふ〳〵しのぎ梅も花さくはるに逢ふ
秋の木の葉のみなちる中で松のみさほはよくしれる
人もほめるしわたしもよいと思つて見とれる主の顔」（三十七ウ）
けちとじやすいのしんにうかけてやぼといやみのへんかむり
おやへこう〳〵せけんへぎりもたて、わたしも見すてずに
私しがお尻は気車軽気きう早いと軽いで人がのる
いつそいはふと口まで出てもさげすまりうかと又だまる
うちをあんじてかへれといへどゞふぞとめたい胸のうち
ぬしは口中わたしは腋香ほんに二人はくさいなか」（三十八オ）
思ふお人の手にふれよかとおもやなりたや此文に
二世をかためたおまへのまへできれて気になるさんのいと

妻子のあるのをしようちでほれてすゑに手ぎれとでるつもり
すへをかけはし命もからむどふせまかせた蔦かづら
きしよふせいしを此手でかけと親は手ならいさせはせぬ
おり〳〵うちのがおせわになると遠火でこがさぬやきじようず」（三十八ウ）
梅とさくらの中よいどしへにくやいばらのへだてがき
七夕のとしに一度のおふせでさへもとかく邪魔する宵の雨
主もするならわたしもするよ浮気くらべじやまけはせぬ
おまへの心は今戸の川岸（かし）でかはらないとは言にくい
硯あらつてかく玉章もにじみ勝ちなる胸のうち
右にぬしのて左りにペラをつかんで遊歩がして見たい」（三十九オ）
やうすきがねはおはらもたとふ是にやだん〳〵ふかいわけ
笹にからんだぬしふきながしいやにからんできれたがる
きつとざ升と帰した床にぬくまる間の肌寒さ
いろはうれども心のまことゞろの中にもはすの花
うそを五色にぬしやふきながしさゝの上とは言はせん
ほれた私しの迷ひかぬしがじつを言ほどうそらしい」（三十九ウ）
人にや言れるもふ身はつまるいぢでもそはずにやゐられない
おぼこむすめも恋路のうたをくろふしてかく星まつり
宵の光りでとびこむ蚊屋の中でとられたへそのした
いろは紅葉もこくなるからにはつと浮名が龍田川
親もわからぬおいしやをよんで見立ちがひの恋やまい
親の意けんと霜夜のさけは五ぞふ六腑へしみはたる」（四十オ）
金にやなびかぬ心にやほれぬじつとまことのたゞふたつ
つらいお客や主人の気づまとるもおまへのためばかり
逢ばさほどに咄しもないが顔見りやくろうで寐つかれぬ
わしが思ひはそら飛鳥で目には見へてもまゝならぬ
こんも命もつゞかぬほどなけつくくろふがうさはらし
座敷住居の梅にも鳥が人目しのんであいにくる」（四十ウ）
庭のむしの音なきやむたびにもしや来たかと立て見る
ほれて逢ふ夜も短い一ト夜あけりやわかれをおしむ露
他の草木がしほれた後に松のみさほがよく知れる
おそまつなれどもわたしの男どふも人にはかしにくい

七夕の願ひのいとからつい結ぼれて今じやきられも解もせぬ
君を松むし夜はしん〳〵と情しらずのかねた、き」（四十一オ）
とかく浮世はま、にはならぬほどのよい人じつがない
つらいつとめをわたしにさせてあろふ事かよ色ぐるい
愚ちもいふまいりん気もせまい人のすくもの持くわほう
までど来ぬ夜になくほと、ぎすなみだひやつく枕がみ
いろのあるのを初手からしればぐちにみれんにほれはせぬ
ひよんと心におろした錠を義理と云字がねじりきる」（四十一ウ）

明治十六年三月二日　御届
同　　年四月五日　出版
編輯人　東京々橋区鎗屋町十四番地
　　野村銀次郎
出版人　日本橋区通三丁目十三番地
　　小林鉄次郎
売捌人　日本橋区横山町三丁目
　　辻岡文助
　　同区馬喰町四丁目
　　小森宗次郎
　　同区通油町
　　水野慶次郎」（裏見返し）

東都々逸五百題
（活版本。草廼舎蝴蝶編。明治二十二年。金園堂版）

（表紙欠）
東都々逸五百題
　　草廼舎蝴蝶編輯
　　常磐津文字三家閲

文句入ど、逸

真の夜中に不図目を覚し〔（言葉）何か夢でも見たのかへ今時分泣て居る奴があるものか、ダツテ妾（わたし）は悲しいものを〕お前に別れた夢を見た」（一頁）
私の心は三味線ご、ろ〔（言葉）胴からして直を出さう〳〵と思ふけれど世間の皮があるから三筋町の天神さまへ願かけて悪体云つたらば駒つたものだ毎ばん〕棹をかついで寝るわいな
根もない花だと麁略にするな〔（清元落人）散りても跡の花の中何時か故郷にかへる雁〕根がありや再び花が咲く
人目しのんで恋路の関を〔（義太夫梅川）夫は嬉しう御座んせう去りながら私がと、さんか、さんは京の六条じゆずや町〕こ、で峠の又苦労」（二頁）
綾や錦にくるまる主が〔（義太夫阿古屋）昔しの衣々引替へて木綿〳〵とおちぶれて〕愛想のつきぬが惚た情
帰る羽織の袂にすがり〔（鎌倉三代記）みぢかき夏の一夜さに忠義のかける間もあるまひ〕しく尻や妾が立過し
夕辺の夢見が迷ひの種よ〔（清元主水）しかも桜の初日の夜はでな一座の其中でツイ岡惚の浮気から〕今ぢや二人が身の迫（つま）り
又もお株な気休め文句」（三頁）〔（清元きせん）世事でまろめて浮気でこねて〕人をでつちと甘く見る
真の話しに心も解て〔（長唄勧進帳）実に〳〵是も心得たり人のなさけの盃を〕請て飲込む
燗ざまし
主は海外旅行の身ぶん〔（野崎村）あまり逢たきなつかしさ〕どうぞ御無事で帰るやう
義理と知りつ、すねては見たが〔（主水）心なほきは折れやすく〕今さら後悔三時すぎ」（四頁）
写真手にもちつく〳〵ながめ〔（十種香）ゑこうせうとてお容（すがた）を〕是が紀念（かたみ）とひとしづく
ツイした事から浮名が洩て〔（はうた）桐の雨か、りて袖に濡つばめアレ見やしやんせ鳥でさへ馴しところを振すて、〕つれないお前に此の苦労
登るはしごを心で数へ〔（ステ、コ）逢たサよ見たサしたさに来たの〕涙ぐむとは怨みだよ
何も其の様にふさいで居ずと〔（義太夫廿四孝）つれそふ妾に何ゑんりよツイ此様（こう）〳〵とお身のう〕（五頁）へ〕明せばとも〳〵苦労する
人目多けりや顔見るばかり〔（義太夫妹背山）かんじんの寝るときは離れ〳〵の床の中〕手も握らず色目もつかはず何する事なほ出来ぬ
元結の切てしまへば根も葉もないが〔（義太夫白木屋）ソリヤ聞ゑませぬオ三さんお前と妾がその中は昨日や今日の事かいな家敷につとめた其中にフツと見染て恥かしい恋のいろはを袂から〕それを忘れて此の言詞
思案なかばに空とぶ鳥は〔（常磐津源太）アレ雁がねの女夫づれ〕連て逃ろの辻うらか」（六

頁）
私が思ひは三国一よ〔（常磐津乗合舟）冨士の白雪や朝日でとける解たがどうしたへ娘島田
はサ苦説の中ばでサ寝てとける〕解てくやしき繻子のおび
咲た花ゆへ又散る苦労〔（清元玉川）ア、恋せまい迷ふまい〕イツソやもめの気楽ずみ
ナンボあかるい開化の世でも〔（清元北しう）千里が一里通ひ来る〕恋のやみぢにや瓦斯は
ない」（七頁）
恋の諸分も知らない二人〔（清元おはん）始めてこわいはづかしい跡でうれしい枕して〕斯
（こ）うなるからには末始終
ついした事からコレ見やしやんせ〔（富元お千代）目元に絞る縮緬の二重廻りの抱へ帯〕最
早袖にも隠されぬ
妾（わたし）が悪けりやあやまりませう〔（己唄口舌して）口舌して思はせぶりな空寝入〕
すねずと此方を向しやんせ
主ぢやしみ〳〵苦労もしたが」（八頁）〔（一中ぶし）妾も元は廓にて面白い事華麗（はで）
な事訳のありたけ仕つくして〕今は堅気の夫婦（めをと）づれ
鳴な鶏まだ夜は明ぬ〔（キヤリくづし）あけりや烏が告わたる〳〵〕早く返すも人に寄る
百夜通ふてサテ情なや〔（しん内明がらす）たとへ此の身はあは雪と共に消るも厭ねど此の
世の名ごりに今一度〕逢て怨が聞せたい
字余りど、逸」（九頁）
色が出来たとアノマアどうして夫はマア減相もない今時の娘子どもは油断がならぬぢやマア
ないかいな
今日は来やうか逢ねばならぬ話しがあるにマアじれツたい身はかごの鳥ヱ、モ飲ぬ酒でも忍
ぐのだ
鳥渡（ちよいと）見りや無事な人で手をから手を取て手と手と合せりやお前も泥水のんだ末
四国は讃州中の郡象頭山金比羅こんていそはか御前立には金山比古の御尊
京大坂東京三国（が）の地に無いタツタ一人のお前を捨て如何（どう）マア他国へ往（ゆ
か）りやうか」（十頁）
おかしくもあり笑はれもせず夫はマア何であらふ葬式（とむらい）の提灯もちが屁をひつた
のではマアないかいな
私の心は辻うらないでしんそん亥の刻に当つて馬抜なしやうで十八けんこん狐で呑合ひいつ
でも無益な事ばかり
一度で済事二度も三度もしつこいぢやないか恍惚（のろけ）ちや惚たが（ホントニ）解りや
せぬ
浅草の名物すと、ことんの念仏堂めつポウ高いが五重の塔山の古茶屋のこ茶店のこり鳩ぽツ
ぽに楊枝店飛だりはねたりはじけ豆
山で木を切りや其の木を薪にして薪をたいて炭にして炭を粉に」（十一頁）してたどんにし
て否（いや）なお客に抱寝をされて頭をはられて灰となる
鳥渡見りや黒い物で中見りや真赤な物して見りや面白い物皆様お好の花の札
意見しやんすな意見はよしなよ内を出りやモウ忘る、豆腐にかすがいぬかに釘戸板に豆だよ
つべこべ云ふだけ無駄な事
明の鐘ゴンとつきや烏がカア〳〵鶏トツケツコー積りし雪が真白で日の出が真赤夕辺がすぎ
たかお前はんのお顔か真さをだ
本町二丁目の金物屋へどろぼふが這入つて盗賊（どろぼ）の睾丸かみさん摑んで金物屋でよ
かつたよ船宿なんぞの神さんなれば周章（あわて）て棹」（十二頁）でも摑すだろ
しのばずの池には数年大蛇が住む蛇（ぢや）さう蛇（ぢや）が其の大蛇が女蛇々（めぢや〳
〵）か男蛇々かなん蛇かかん蛇か分らぬ蛇
あめはほろり〳〵いなづま火か〳〵かみなりころ〳〵とヲゆふていだきメたがゑんのはし
いろは尻取都々一
如何なるお医者も解剖（ふわけ）は出来ぬ色と欲との有どころ
論より証拠だ是マア御覧羽織と衣服（きもの）に侵染（しみ）としは
葉唄文句の口説ぢやないが帰りやしやんすか此雪に」（十三頁）
二世とちぎりし写真をながめ思ひ出しては片ゑくぼ
反古にしやんすな妾の苦労みんな誰故おまへゆへ
返事するさへ猶はづかしくモシと呼のは猶のこと
床の番する振れた客はみんな出雲の神のばち
千歳までもと契りしものを今更切るたそれは無理
恪気で妾は云ふではないが主の浮気なぜ止まぬ
主と二人でいま此の苦労寝物がたりのこともある
るの字の頭へこの字とがの字附てくだくよ此胸を
をそい帰りを待つ、じれて思はず引さく水うちわ
わけも云はずにたゞ口小言愛想づかしかじれるのか」（十四頁）
かず〳〵うらみは積つて居れど主の話しの後にしよ
よせと云はれりやまた猶更に折て見たいよ花の枝
たまさか逢たに短い夏の夜あけに悲しきあさわかれ
れこがないゆへ見初たけれど振れたお客はさぞや嘸

そしらぬ素振は人前ゆへと承知しながら腹が立つ
つなぎどころのない身のつらさホンに私はすて小舟
寝ても覚ても苦労の夜中悪や戸たゝく那（あ）の水鶏
何から先云ふて宜やら二人しばし莞爾にら目くら
らくな務めぢやないとは知ど主の為なら厭やせむ
むりや邪見も苦労だけれど可愛がられりや又苦労」（十五頁）
うしろ姿は確にそれと思へどまさかに呼悪ゐ
ゐまも今とて貴君のうはさなど、取なす喰せもの
飲ならお待よ燗してあげる夜更ぢやお止よ冷酒を
おしき筆止めまづあら〳〵と用事許りに候かしく
くもる月影辻占わるく思ひむすべる胸のあや
やさしい気立にツイうか〳〵と迷心のくるひごま
まさか夫とも云ひ出しかねて一寸とつなぎの茶碗酒
げいしや娼妓の家業と主はまこと三分にうそ七分
ふるい文句の気証を書もたがいに浮気をせぬ証拠
こゐし焦れてやう〳〵逢ば侭にならない人のまへ」（十六頁）
えらひ〳〵と無暗（むやみ）に褒て人をおだてる主のゑて
手管と知りつ、ツイ欺されて何（どう）すりや宜（よか）らふ是はまめ
あの時あアして是からしたも今ぢや互に笑ひぐさ
さへたやうでも又すぐ曇る心ぼそさの秋のつき
きれない姿も恃みにやならぬ溢（こぼ）れ易いよ花のつゆ
夢はさかゆめ当にはならぬトハ云へ気になる今の夢
めを出しや剪取り花咲アはさむホンニ不実な花挟（はなばさみ）
身には覚への無いではないが余計な世話だよ新聞紙
しつかり固めの比翼の紋も末は合ふとの三つどもゑ
ゑんを繋ぎの屏風の中は切にきれない蝶つがひ」（十七頁）
ひとりくよ〳〵案じて待ば永く思ふよ夏の夜も
もしや夫かと戸を開け見れば悪い辻占秋のかぜ
せけば急ほどアレ憎らしい人をぢらすよほと、ぎす
すいた同志で夫婦になつて意気な処に暮したい
色のいの字に能く似た姿二人ふざけて居るところ
論より証拠は少しの事も直に何だとつめことば
鼻を合せて口をも合せ臍をあはせた後はなに
にらめる目にさへ愛敬以て怖さ忘る、主のかほ
惚たほれぬの其源は粋な鶺鴒が来て教へ」（十八頁）
返事するさへ人目があれば目顔で知らせる格子外
疾（とう）から私は寝返りなれど切るはお金を取たのち
智恵の袋は大いほどが邪魔にならずに身の便利
立派に遣ならお金をお呉れ起証誓紙は私や入らぬ
主を待つ日は車の音がする度其かと飛で出る
留守にト一を密（そ）と引入れて切たよゆもじの忍緒（しのびのを）
押ども引ども動ぬ主ははまつた車の輪
妾やおまへに任せた身体（からだ）ぎりも世間も入るものか
門に人目の途ぎれぬ内は忍んで這入れぬ宵月夜
算（よま）れた鼻毛で貸たる紙幣（ぺら）が身代かぎりになつて来た」（十九頁）
頼む牛乳玉子もきかず妾も腎虚で身がやつれ
れんぼ為るのを明して云へば白痴でもお金がある故ぞ
密（そつ）と鍵金外しておいて細目に戸を明け主をまつ
積る話しは一割ほども済ぬと思ふに明のかね
猫と云はれて腹立つならば鯰取るのを止（やめ）にしな
何ぼ流行に後れぬ気でも厭だよ肺病税コレラ
楽になつたと澄して見ても心憎いは此の地震
胸の算ばん鵤（いすか）の嘴よ免といふ字を着た鰌（どぜう）
移る尻取り都々逸いろは案じて自分でコリヤ旨（うま）い
異見聞ほど猶更つのる我が身ながらも因果者」（二十頁）
乗て世渡る妾の船へ棹（さし）ておくれよ水馴ざを
怒り散して飲む焼酒が煮立て居たので舌を焼く
火事に雷地震に雪に此の春ア何だか滅茶苦茶
山ほど積りし思ひのたけを雪の朝の向ひ酒
儘になるなら紙幣を造り廃業届けがして見たい
今朝も今朝とてお部屋の小言寝言とお尻を気をつけろ
二つない気で迷ふたものを心知らずの水の月
心と心と心と心合ふて心が増すこゝろ
襟につくのも桜の一つ積る心はぬしのため

手鍋下よと口では云へど実は乗たい玉の輿」（二十一頁）
逢ふ夜途絶へて肌寒くとも妾や重ぬ小夜衣
酒は醒るし娼妓（きやつ）ア往たぎり生憎煙草の粉もない
切るなんぞとアレ無理ばかり手出したのは主が先
油断しやんすな箱入じや迚堅い名計石炭油
雌（めんどり）が時を啼（つく）つて雄鳥（おんどり）啼（なか）ば私や主故泣明す
水に縁ある彼（あの）屋根船も人に漕れる浮気性
静に成（なさい）な那（あ）のお査公（まはり）に聞れちや宜無（よくない）痴話喧嘩
縁はいな物彼（あの）別品は主に惚たは何があて
低い花嫁見て婿さんは吉野山より高く誉（ほめ）
若（もし）エ貴君（あなた）と背中を叩襟のゴールは最（もう）何時」（二十二頁）
娼妓渡世と玉ころがしは穴を見当に客が来る
炭に譬へりやお前は堅木をこりや妾もあつくなる
いつかほころぶ蕾の花の顔にほんのり桜いろ
論はないぞへ察しなさんせ主ゆへ今日びの此白歯
恥かしいとて云ずに居ればエ、モじれつたいお互に
悪（にく）い秋風まよひの論はあなめ〳〵のすゝきのほ
惚た中でも我慢は出来ぬ今日を限りの運のすへ
へんな事からツイ遠ざかり知らぬ顔とはつみな人
としま盛りに白歯で浮れ苦労するのも親のばち」（二十三頁）
血（ち）ゑん近づき皆な借倒し心いらいら此の不義理
悋気らしいが言ずに居れば末か如何（どう）やら覚束ぬ
主に二日も逢ずに居れば風邪のくしやみも気にかゝる
類が共とて那（あ）の子と君は桃と桜の顔とかほ
思ひ廻せば此身の泣も廻る因果のくるまの輪
態（わざ）とけなして又或時は胸で褒合ふ深ひなか
香りゆかしき蕾の梅もやがて開けば散る浮世
よし悪は定めがたいが何処から見もホンに程よき那のお方
他人構（がま）しいお前の仕打心置なくしておくれ
例の癇癪モー是ぎりと云ふは出鱈目みんな虚（うそ）」（二十四頁）
添て二人が暮せぬならば死であの世で家を持つ
つらい勤めの浮川竹を出ればしうとに又気がね
念がとゞいて手活となれば朝晩楽しむ床の花
情け知らずの待身を知らで今日も来（こぬ）とは何ぢややら
楽なやうでも多の客の機嫌取る身は気が痛む
無理な義理づめ無体な身受ホンに困つた此苦労
虚か誠かサツパリ知れぬ先でも知れまい我底意
異見しやんすな妾の気性知つてするとは不実者
飲でお前はくだ巻ならば捨てしまをう此の酒を
鴛鴦と人に云はれた二人が中をヒヨンな事から一人泣く」（二十五頁）
口惜い思ひも男の不実ホンにもつれた胸のあや
八釜しい世間知らずか岡焼もちか何の益なき人の邪魔
待ど来ぬ夜はツイ癇しやくで毒と知りつゝ茶碗酒
今朝の別れは何時よりツライ何故かジレツタイ昨日今日
ふくさゝばきに手加減覚へ惚た心を茶道ばこ
心がらとはソリヤ情ない苦労するのはお前ゆへ
遠慮するのは始めの中よ何時か心もうち開て
テンに嫌なら何故爾（こ）うなつた今更嫌（いや）とはホンニまア
厭（あき）も厭（あか）れもせぬ其中を義理で別れる其つらさ
サツパリ切たと人には云へど影ぢや未練の忍び泣」（二十六頁）
聞て北野の梅とはおろか偖も見事な花の眉
昨夜（ゆうべ）の移香まださめぬのに又も嬉しき今朝の夢
女波やさしき小磯の浜へじれて打込む仇男波
身から出た錆つき離されて今は野中のやぶからし
しみ〴〵とツライ勤の辛抱するも心がらだかお前ゆへ
縁と時節を待とも知らず先は平気で片思ひ
久しいものだが虫づが走る買てお呉よさつまいも
若しヒヨツト変りやせぬかと案じて居れど態と知らしてうたぐらせ
世帯かためて気質になつて酒も飲ねば色もせず」（二十七頁）
吸つけ煙草にツイ浮されて人の意見で此目まい

いノ部

いろのいたづら移りにけりな手拭ふ布にも小町紅
幾夜寝覚のさびしき余り写真をだきしめ床の守
色も常磐の山まつだけは露も匂ひもほどのよさ

色目と思つた其の目は藪でお門違の間の悪さ
いろの都こもきて睦ましく鹿も紅葉のにしき連れ
いろはさめない一粒鹿の子ぬしとこゝろのあい鼠」（二十八頁）
いろよき紅葉も妻よぶ鹿も恋にうきなのたつ田川
いふて仕舞か云はずに置か主の浮気のないしよ事
嫌なお方の信切よりも好たお方の無理が宜い
嫌な座敷と嬉しい座敷私や泣たり笑つたり
今の音〆ははつ音の皷み音を慕ふて来る狐
色にや栄誉もお金も入らぬ当にするのは主ばかり
色を教えたアノ鶺鴒にかへて不粋なあけがらす
池の蛙のこそ〳〵話し聞て寝る夜の春の雨
囲碁は必ずつゝしみますと言てしようぎにはまり込
一吸（ぷく）おあがり妾（わちき）の実がつめて有ます此の煙草」（二十九頁）
入れてお呉よ痒くてならぬ妾一人が蚊帳のそと
意気な桜の一枝よりもじみな松葉のすへ永く
意気なお前に不意気な妾ドウせお気には入らぬはづ
色に心を染たる報ひ夫（それ）と親にも岩田をび
今逢て為にならぬといふ其人に礼を述たりうらんだり

ろノ部

廊下来るのは慥に彼婦（きやつ）と思や隣房（となり）へ入新造
論より此の子の始末がさきよ知れりや互ひの罪となる」（三十頁）
廊下ばた〳〵障子をがらりヲヤと莞爾笑ひ顔
老少不定の身でありながら時節までとは切れ詞
論より証拠を取られておひて云訳するとは馬鹿らしい
廊下づたひに人目を忍び互ひに心を奥ざしき
論より証拠だ此の子の寝顔能（よく）も似たもの瓜二つ
碌々に寝ない妾をお前は無理よ夫ぢや身体（からだ）が続かない
廊下とんびで困らすお前又も狸のとぼけもの

はノ部

花の笑顔も移れば変る霜をいたゞく翁ぐさ
羽袖引れて嬉しく解て深く結んだ番（つがひ）鴛鴦（おし）
はづかしいはへ牡丹の花を見に行私しは鼻が獅子
花を咲せて数ある中に一際けだかき白ぼたん
遥々尋ねて見に来た富士を憎や隠した峯の雲
鼻元ばかりをお客に売て情夫（まぶ）にや心の底を売る
花の盛りに飛来る蝴蝶あらしに揉れて遠ざかる
離ちや居ども変らぬ心主に見せたい遠眼鏡
花のいろ香につい深見草はなれがたない蝶番ひ
花の盛りは二八の比よ顔に色もつ艶ぼたん」（三十二頁）
花火褒つゝ簾をあげてソツと流で手を洗ふ
離れ〴〵に別れちや居れど水に浮草根は一つ
薔薇も牡丹も枯れゝば一つ花でありやこそ別へだて
離れ〴〵の住居（すまゐ）をすれば互ひにうたがふ事ばかり
働きがなけりや意気でも美男（いゝをとこ）でも今の娘は惚はせぬ
はかない赤縄（ゑにし）とテンから知て結ぶも不図した出来心
腹はふくれる浮名はパツとたれに云ふか此の辛苦
話しや仕度（したい）し人目はあるし我慢する身の其つらさ
羽織着たまゝツイ転び寝の皺が恪気の種となる
離れ座敷の障子の影を按摩と知らずに気をば揉み」（三十三頁）
晴て互に夫婦となれば忍んだ昔が野暮らしい
はたから見たればばかげた噺しまよはにや其理がわかるまい

にノ部

庭の草葉の虫の音ふけて軒の燈籠もねむい顔
憎い雨だと小言は云へど好た同志のもあい傘
二階座敷の手摺にもたれまぶはこぬかとまねき猫
日本晴だよこゝのうちがうらみ上野に討つた仇
二枚ふとんをひきたる猫も恋ゆへ痩（やつ）れて雨のなか」（三十四頁）
喏（にやん）とよび出すそのあい言葉忍んで恋路の屋根伝へ
にはの一木のあの白牡丹薫りしたうてくるか蝶
二世とちかひし大事なお前別れりや此世に用はない
握る手先の暖味（ぬくみ）がまわり解て嬉しい雪の肌
日曜土曜が毎日つゞき外の五曜がなけりや宜い
庭の桜を採ふとしたら折ては悪いと書てある
西も東も知らない者を連て浮気なたびかせぎ

憎らしいよと横眼でにらみ可愛と云ひ想な抓（つめ）りやう
苦い顔する借金取も円（まる）を見せれば笑ひ出す
悪い規則が世にないならば疾（とう）に身儘になるものを」（三十五頁）
苦い濃茶の二人が中も水を差れて甘くなる
憎い記者だがアノ新聞は二人が為には結ぶかみ
憎いと云たを兎や角云へどまさか可愛と云りやせぬ
二度の務もお前の為よ不実するとは情けない

ほノ部

ホンニ妾（わたし）がボンヤリ者で主に苦労をかけ燈籠
ポント云ひ切る花火も後に心残すか筒のけむ
ホンニ貴郎（あなた）は気短など、云ひつゝ箒を密（そ）とたてる」（三十六頁）
惚りや千里も一里じや抔と虎の尾に従（つく）古狐
牡丹に唐獅子菜の葉に蝴蝶わたしや離れぬ主の側
牡丹もおよばぬ姿に迷ひいつか心もくるひ獅子
惚たほの字を火の字に書ば熱くなるのも無理はない
ほそい元手の三筋の糸は長い浮世のつなぎざほ
惚た女の蝙蝠傘は指で押へりや直ぐさせる
ほうづきは初手に揉れて中たび切れて末は夫婦となるわいな
星の数ほどお人はあれど月と見るのは主ばかり
惚て居るのを知つては居れどお気の毒だがお断はり
惚た同志で気楽な暮し小袖ぐるみであさ寝ぼう」（三十七頁）
ほれて呉れずはなま中此様（こんな）気兼苦労はせまいもの
惚た女房のある其人になんで此様（こんな）に惚たらふ
ホンニ難面（つれない）アノ稲妻は二の目見ぬうち消てゆく
ポンと叩かれモ一ツ恃む其所（そこ）らが虱の集会所
惚た哩（わい）なと芝居のやうに云はれるものなら嬉しかろ
惚た其の振よ叙幕に見せて御金ねだるは三段目
外のお客へ腕（かいな）の文字を隠すおまへの腕まくり
ほどの宜い事聞せて置てあとは沙汰なき時鳥
ほと、ぎすたしかないたと雨戸を開て見ればこよいも月が出る」（三十八頁）

ヘノ部

下手な芸者と跛脚の車夫は乗たり引たり転んだり
ペラの蛭子か算ばん置て外債利足を案じ顔
隔つ座敷で弾く三味線も君を俟つ夜は忍び駒
兵隊のがれに重罪犯しや鉄砲取ずに砂利車
蛇に女房がなられちや畏（こわ）い色はしないとあきらめた
返事するさへ小癪に障る矧（まし）て言葉がかけらりよか
ヘンな奴だと思へば尚もシツコク寄添ふ意地悪さ」（三十九頁）
返事し兼て火鉢の灰へ火箸で分らぬ文字を書く
屁茶な此身も権利とやらで厚い恵みの御代に立
平気ぢや居られぬ此の移換へ夏の始めの古布子

とノ部

時計が損じて烏が唖で鐘に撞木がなけりやよい
鶏の啼まで痴話した翌朝（あす）は夜と昼との突鶏子（とつけつこ）
留て置たし留たら主の為に悪かろ家の首尾
年も往ぬにサゾ痛からう初の旅路の鞋くひ」（四十）
遠くで色すりや剣術心互に竹刀で苦労する
どうか調子の替りと見えて矢鱈に振れる燗徳利
どうでもおしよと投出す身体（からだ）其様（そんなら）斯（かう）かと引よせる
止たい思ひが天まで届き主を帰さぬ今朝のあめ
どうせ及ばぬ願ひぢやなど、云ふ中や思ひが未浅い
遠く隔てど切さへせねば心便りの鳴子縄
土手の八丁は車で来たと口の八丁で間を合はす
どうなと為（さん）せと身を摺附木今更消れぬ胸の中
徳利話しをすませた後で静に異見を聞く寝酒
どうか私の心の中を悟つてお金を呉りや宜い」（四十一頁）
どうか為（した）かと一ふで書て遣（よこ）しや無心を云ふものを
どうかしたかと一筆書て遣す隙ありや昼寝する
年の背や水の流れとハテ人の身は明日待る、宝船
どうか浮気はモー吉田やと意見夕ぎり主のため
ドーモぢれつたい顔見ぬ内は用もなんだか手に附ぬ
疾（とう）から心に惚ては居れどドーモ云ひ寄るひまがない
解てニツコリ笑へば帯も繻子と博多のはら合せ
泥鰌が鯰に昇進（へあが）る比は猫も変じて山のかみ

ちノ部」（四十二頁）

一寸顔出ししたのが基であけて行まで残る月
一寸顔見せまた雲がくれ主は妾に秋の月
一寸首尾した夜は逢ふ坂の関たつ談しで後（あと）や前（さき）
一寸時雨に袖ぬらされて暫し仮寝の雨やどり
散す心かアレマア憎い春の夜中の仇あらし
猪口を取あげ顔打ながめ左様（さう）もおまはん飲度（のみたい）か
一寸御覧よ此の新聞を主の浮気が書てある
一寸抓（つめ）られ嬉しい夢が覚りやあり〳〵蚤の痕
一寸覗いて思はせぶりに憎や乙鳥の通りぬけ
一寸切ても又アイウエオ変らぬ契（ちかひ）をカキクケコ」（四十三頁）
一寸した間に逢ふとすれど澄だ水にはおりがない
智恵もあさりな馬鹿貝なれど見替られてはむきになる
痴話で夜深し朝寝をさせて然（そし）て返さぬ下心
力づくにて切ない者は固く結んだ縁の糸
一寸御覧よ此の児の顔を主に宜く似た色白さ
一寸見つめりや恥かしさうに顔に紅葉の色娘
千代と契りて変らぬ色の松に嬉しき風だより
痴話が募りて根もない口説腹を立てたり立せたり
千鳥とび立つさゞ浪さへも岩と名の附く色がある
一寸眺めは奇麗だけれど末の頼みにならぬ雪」（四十四頁）
忠義一図のお初は世にも主人持つ身のかゞみ山
ヂツと見つめてホロリと泪お前はなアと取すがる

りノ部

律義一ぺん戸棚にかくれ自分で留守だと馬鹿な奴
恪気する人理学を知らぬ生者必滅会者定離
梨下の帽子（シヤツプ）は取らずとまゝよ靴で踏込む瓜畑
理も非も知らずに結んだ縁と夏の氷は解易い
利口と思ふは親爺の欲目わちき風情にだまされる」（四十五頁）
立派に遣るならお金をお呉れ起証誓紙は妾（わし）や入ぬ
恪気するなら証拠をお見せ胸に覚えのない妾
利口者だと云はれた私何故かお前にや馬鹿された
理を非に枉ても任せた身体添なきや妾の気が済ぬ
利足は入らない流してお呉れ何時か換した那（あ）の起証

ぬノ部

ぬしに水性（うはさ）の袋をかけて今から入るよ癪の種
濡る覚悟でお出のお前晴て逢ぬも無理ぢやない」（四十六頁）
ぬしが浮気に浮気をすれば妾（わたし）や苦労に苦労する
主と和親の仮条約にちよいと写真の取かはせ
ぬれぬ前こそ露をも厭へぬれて色ます女郎花
主と妾は田末の花よぬれて色ますあやめぐさ
主が月なら妾や団魚（すつぽん）と浮て此の世に隅田川
主と妾を鎖で止てともにかせいで暮し度
主の浮気で心がくもり袖になみだの雨ばかり
主の心にまだ白菊の色香に迷ふて来る蝴蝶
主の口癖不図云ひかけて咳にまぎらす人の前
主と二人の懇親会を中止するのは明のかね」（四十七頁）
主と聞たで爪突く火鉢ア、痛かつたと撫る膝
主の心は蒸気の煙り遠くなるほど薄くなる
主に貰ふた小袖の長さ合ぬ思ひが身にあまる
主の心は日蔭の氷真実（まこと）云ふても解にくい
主に逢ふ瀬を神かけ念じ恋の闇夜をふむ百度
主を心に私や掛けだすき細い手わざの糸車
主は今来てモウ帰るのか浅黄ぽいかやあいたらぬ
主といふ字に人冠があれば苦労はせまいもの
主は口中妾は腋香（わきが）ホンニ二人は臭い中
主の為なら火の中にても苦にはお七が身の覚悟」（四十八頁）

るノ部

留守にや案じる返れば邪魔よ悪戯（いたづら）盛りの一人ツ子
留守居する身の心も知らずホンニ憎らし那（あ）の水鶏
留守を覗（ねら）ツて盗賊（どろぼう）猫が来てはチヨロ〳〵盗み食
留守と知らずに来て見りや一人何時（いつ）頃帰るとヲツニ聞
留守に抱く子の寝顔を見れば主に宜う似た愛らしさ
留守居する夜は軒端に巣食ふ雀の羽音に眼を覚す

類は友呼ぶ妾（わちき）の情人（いろ）は人は狸とあざなする」（四十九頁）
瑠璃も珊瑚も磨きやうで光る素（もと）は瓦も同じもの
留守を使つて朋友（ともだち）よ返し後で舌出す若夫婦
留守にするなら留守居をお置き妾（わたし）も是から用がある

をノ部

起すも悪いし寝（ねか）すもおしく思案半ばに鶏（とり）の声
教えず習はず覚ゆるものは欲と食ふのと色の道
怒（をこ）りちらした咄の跡は炭も白けて居る火鉢
思ふ私の其の百分がヤット届いた二分五厘」（五十頁）
表向では切たと見せて切ぬ手品の落し首
男撰みは当座の花よ夫が実になりや人の妻
思ふ気まゝになる夫までは苦労艱難根くらべ
送る文をば二重に封じ中は一重にねがひます
思ひおもはれ互の心恋にやあくまでかわら町
思ふお方と添たいまゝに八百屋お七は身を焦す
逢ふに玉おり心は須磨の浦にくよ〳〵松のいろ
折つたお園のおぼこの花に疵はお庭の普請小屋
思ひ染たる未通女の娘恋にみだれし野崎村
女心はうつろひ易い惚たが当にはならぬもの」（五十一頁）
お前ぢや気を揉み女房にや気がね是ぢや命が続かない
思ひ切ては又ふり返る岸にさくらの渡しぶね
思ひ思ひの思ひを遂て思ひ尽せぬ苦労する
思ひ込んだら夜も日に知らぬ廓（さと）の夜桜朝ざくら
お為ごかしもモー聞厭た嫌なら嫌だといふが宜い
男といふ字を分析すれば丹田開拓する力
親の異見を聞く度毎に主の言葉を思ひ出す
お前の心一ツで此かみすりがのどへ行やら眉毛やら
おそいかへりを待身につけて止めた昔を思ひだす」（五十二頁）

わノ部

私しや春雨主や野の草よぬれる度毎色をます
悪いと知りつゝツイ瓜畑靴を入れたが身のはめつ
私の心は表も裏も無て涼しい単（ひと）へぎぬ
分りや二種（ふたつ）の朝顔なれど一ツにからんで花が咲く
私しが忍んで往（ゆく）のも知らず悪（にく）や燃へ出す此蚊やり
私しや元より水色浅黄染りや濃なる下ごゝろ
私しやお前の下着の小褄肌にや附けども影の妻
私やお前に交情（おつこち）絞り妻に鳴海と云はれ度（たい）」（五十三頁）
私やお前に火事場のまとへ振られながらに熱くなる
若い同志の根もない喧嘩背中合せや腹合せ
腕力づくなら滅多に負ぬ腕に覚への此の拙者
私や呆れた端書で返事アラマア見るのも恥かしい
私の心に切ない義理があるも知らずに無理ばかり
私（わたし）の命は元から主の物は元から私（わし）のもの
私の生れは上方なれど気象は負けない江戸の水
私や柳に千筋の願ひかけて結びし縁の糸
私や深雪に埋（うづ）んだ梅に解て花咲く春をまつ
私が娼妓でお前は車夫よ恥もいとはず共かせぎ」（五十四頁）
妾（わちき）が娼妓（きつね）で疑ぐり深い主は狸で化やすい
別れのつらさに謎打かけて解にや返さぬ今朝の雪
妾（わし）を見棄て他国で花が咲くか見しやんせ咲やすまい
妾（わたし）の病気はお医者ぢや不可（いけ）ぬ主のお顔を見りや治る
わるどめするのがうるさいならばこがれさせずにくるがよい

かノ部

壁の破れを何時（いつ）しか越へて蚊帳へまで来て覗く月
蚊帳で首尾する雷さまは出雲の方から鳴て来る」（五十五頁）
傘の印しは違ふて居れどハテな能（よく）似た歩きぶり
通ふなはての松風よりも身に染渡るは明の鐘
神を願ふて叶ひし恋は抱た背中で手を合す
金のある内や間夫だといふが無なりや虻とも思やせぬ
可愛がられて又責られて今ぢや手活の夏の菊
可愛お方の来る夜は知れるしめたしごきが空どける
可愛さうだよ白歯で身持聞けば亭主がないさうだ
かよわひ腕でも癇癪力すねた枕をねぢなほす
顔を赤らめ恥かしさうにソンナら貴郎（あなた）と云つたぎり

風で腹立ち雨にてしめり虚と誠のゆう鳴子」（五十六頁）
気質の妾（わたし）を其様（さう）ぢらすなら今に焦れて石になる
かゝる事とは妾（わし）や白狐主は手管の釣上手
隠す話しも何時しか外へ漏てさし込む窓の月
神や仏へ願かけるのも転んで罰金出さぬ為め
風が戸を吹や若やと明て見ればすました月の顔
顔に桜をオンノリ出てソンナラ貴郎（あなた）と云つたぎり
顔は見たいし見りや恥かしい扇一重が立田川
傘の骨の数程お人はあれど広げてさすのは主計り
壁に耳あり徳利に口よちよくと話しも出来はせぬ
門の鳴子の夜風にゆれて若や主かと胸さわぎ」（五十七頁）

よノ部

寄る屋根船もやひの綱も結び止たる縁のはし
好（よく）もつけたよ名を紙入と真（ほん）にあるのは反古ばかり
弱い稼業の妾をいぢめ主の心は鬼か蛇か
読だ手紙が一々胸にきくはづ其の字は釘の折
止（よし）てお呉と払ツた其の手いつか枕の下に入る
宵は騒ぎに紛れて居れど闌（ふけ）りや気になる明の鐘
他所で解とは露白糸でくけた博多の男帯」（五十八頁）
他所の浮気の綻び端（こぐち）縫ふ針いち〳〵胸にさす
読でうれしき此の信切な文が却つて癪のたね
宵のあらしに思ひの川が増て恨の浪が起つ
宵の口説に無理云ひ過て今朝の別れが気にかゝる
夜あけ前まで手枕させてしびれきらせて云ふ無心
万よし原金さへあれば何時も陽気の春げしき
宵は程よく受ては居れど朝はしぼる、雪の竹
他所の咄しも我身の上と思や心が身をせめる
夜毎つれない主ゆゑ妾や並べる枕に恥かしい
他所で陽気な三味線聞ば内で陰気な小言聞く」（五十九頁）
夜昼思ひを妾やかけ時計ドンと逢なきや気が済ぬ
横に出て来る那（あ）の蟹でさへ葭とあしとを分て来る
横に寝して唾（つばき）を付て指で音を出す琴のいと
寄辺なき身は夢にもたのめ雨戸たゝくな夜の雨
夜なべ朝おき人あいさうを好（よく）すりや舞込む福の神

たノ部

誰もしらないふたりが中を硯かけごの筆が知る
民のかまどが賑はひ過て煙りがふへたよ陸蒸気」（六十頁）
只（たつ）た二ツの笑窪にはまり今ぢや諸方に穴だらけ
誰か来たそで垣根の外で啼た松虫音を止む
便り松茸ちつとも早く延ちやいやだよおかめ蕎麦
たとへ百日お茶ひくとても外のお客は見るもいや
玉子守りは転ばぬ用意転ばす奇特はゑびす紙
他人のお前が入らざるお世話末の考へしちや居らぬ
鯛やひらめの海魚よりも私しやどぜうが口に適（あ）ふ
珠のことばを錦に織てつゞり合せて恋ごろも
狸寝入と悟つて鼻の穴へたばこの煙を吹く
たとへ嘘でも切るは不服説得するほど腹が立つ」（六十一頁）
便り待のに又川づかへア、もじれつたい五月雨
便りや電信通ふは蒸汽遊歩は合乗じん力しや
旦那の忘た煙管で下婢（げじよ）の部屋から火の手が立上る
辰田芳野も見る人なけりや花も紅葉も山のちり
煙草は尽るし火の気は失る来るかづかれの泣寝入
たゝむ夜具から枕が二個（ふたつ）飛だ始末をつい見られ
竹を画（かい）たる屏風のうらは慥か中好い雀がた
抱たばかりで別れて仕舞ひメた未練が手にのこる
旦那お一人妾もなどゝオツト権妻夕すゞみ
大事の〳〵の主はあれど様は付ない入ぶくろ」（六十二頁）
互の心もアイスクリム解ぬ誓ひの氷ぐわし
だまされた私や前世の約束事よだましたお前の末を見る

れノ部

恋慕と先でも御座れば宜が先ぢや恋慕を倒（さか）に読む
れんじの鈴虫啼止む度に主が来たかと立て見る
れんに掛たる短冊読で首尾を占ふ独り言
れんじ窓から吹込む風も時に取てはゾツとする

恋慕した迚お金がなけりや自由にやさせない此身体」（六十三頁）
れきが来たらばお前は兄よ帰りや二人でお取ぜん
礼儀正しきアノお方さへ恋の話しは寝て、する
恋慕するのを明して云へば馬鹿でもお金のある故ぞ
レキを騙して巾着銭を取てお前にやるつもり
例の人かと急いで来（きた）が見れば口惜しい気障な客

そノ部

ソット炬燵を抜出た猫は告（つげ）に往（いつ）たぢやあるまいか
袖の移り香疑ひかけりや一枝折来る梅の花」（六十四頁）
底の見えすくアノ薄氷とけたやうでも有るへだて
添ふての苦労は覚悟だけれど添ぬ先から此の苦労
染た濃茶も主や空色と茶にした緋打の桔梗ぞめ
袖に涙の露おき初て思ひ増穂の花す、き
算盤玉にもか、らぬ金を二一天作して通ふ
配偶（そふ）た揚句に出た梅毒が癒りやお前があごで蠅
袖もしめらぬ袂も湿（ぬれ）ぬ晴て目出度にい枕
底の分らぬ千尋の海へ仇にいかりを卸される
添て見せます妾の意気地約束したのは反古にやせぬ
袖に移りし此の梅ケ香は東風の便りか今朝の春」（六十五頁）
其処（そこ）に居るかと捜つて見れば枕屏風の影ばかり
夫（それ）ぢやアンマリ邪見ぢやないか是まで苦労した甲斐が無
算盤のたまに逢ふのに起せど起ぬ二一天から来ぬが宜（よい）
算盤持ずに積りし口説割る思ひで踏に来る
算盤まくらにまどろむ夢にパット浮名も立つ浪華
夫（それ）と云はれぬ涙を問はれ是で泣たと出す芥子（からし）
算盤の珠の数ほど通はせ置て今更はじくは主の無理
空に晴衣小袖も遂に蝶ものがけの出養生
袖の移香まだ白梅を来てはそよ〳〵春の風
空は晴ても逢なきや曇る義理にへだての硝子窓」（六十六頁）

つノ部

ついでがあるから昨宵（ゆうべ）の傘を何処（どこ）に返そとオツに焼
月にや照され雪には降れせめて言葉の花なりと
月夜烏と口では云へどうその吐（つか）れぬ此の時計
積る怨を心に止てお楽しみだと云つたぎり
妻恋稲荷に願をか（ママ）主の虫の居処（ゐどこ）の宜いやうに
月にてらされあたりを兼てはなれ〴〵の二人連
尽ぬ話しに限（きり）ある夜を烏怨むは此方が無理」（六十七頁）
冷たい前髪べつたり顔へ当て頓間（のろま）の気を冷す
月日や矢ばせに立やすけれど主の帰帆は待遠い
包むかすみの袖ほころびて香り溢した峯の花
月の雲間を洩出るまではしばし止度（とめたき）ほと、ぎす
尽す辛苦の誠が見えてヤツト泥から咲くあやめ
月はかたぶき夜は更行て心細さや明のかね
露にやツトポリ夜毎にぬれて風にやつれない女郎花
月を咨んで夜は更しても日には目のない朝寝坊
蔦にからまれ千歳の松も日に増し見えるよ身の窶れ
唾をつけ〳〵毛をなであげてグット突込む筆のさや」（六十八頁）
連て逃るは容易（たやす）いけれど知れりや互ひの身のつまり
露にや夜毎にシツポリ濡て風にや邪見な女郎花
辛さ忍んで涙の顔を主にかくして笑ひなき
ツンと澄して反身になれど永く続かぬ主の側
露の思ひでやう〳〵育ち色に知られた春の草

ねノ部

寝間は気軽く別れたけれど着（きせ）る羽織の手の重さ
寝ざめ詫しき此の暁の雁の便りもそらだのめ」（六十九頁）
寝ればツン〳〵座れば無心立ば後で舌を出す
寝ても覚ても目先に見ゆる振かけられ度忘草
寝（ねる）の嬉さ起るのつらさ仕事と小言がなけりや宜い
鼠なきするアノ猫の眼も代り易いが気にかゝる
猫と鯰と双方（どちら）も髯でち、くり合ふたる子はどぜう
ねしづまる比徐々（そろ〳〵）這ふて本望とげたで中（ちう）と鳴く
鼠穴より牝猫の穴か庫の為めには無用心
寝ては考へ起ては塞ぎホンニ苦労は金ばかり
寝るといふても枕は仮さぬ恋しがらせて意趣返し

猫にや嫌はれ狐にやふられ是からソロ〳〵白い鬼」（七十頁）
寝る間もないほどオ、忙しや金の勘定で肩がはる
根をば切れて枝をば絶れ可愛がられる床の花
女房もちとは知ての事よ惚るに加減がなるものか
女房叩き出し子は踏殺し後で亭主は首くゝる
根のない事にも枝葉をつけて口説の種をば造り花
寝てなど苦労を忘よとなれば主が浮名は夢ばかり
寝たり起たり起たり寝たり一人寝る夜のいじらしさ
猫転べ転べと云はんすけれど妾（わちき）の心はゑん次第
年が明たらお前の所へ往（ゆ）くか往かぬか時の運
願ふの引のと少しの借を文の後から亦たも文」（七十一頁）

なノ部

泣て別れし涙を隠し笑ふ初会の客ざしき
長い煙管の煙草の火にて大事な紙幣を煙にする
並べた枕を一ツはかくし留守にや操を立て屏風
泪で実の化粧がはげりや吐（つい）た嘘まではげて来る
鍋釜茶釜に摺鉢れん木区別あれども添とげる
何どきなりとも引して遣（やろ）と風の神めが吐（ぬか）しやがる
啼鹿の声もかれ〳〵主まつ虫の最（いと）ど憐れを添る鐘」（七十二頁）
何と途方にぬしや暮の紙幣（ごん）と突出す我が身体
啼な鶯暫時の間凌ぎや気楽に花の世を
泣な此方（こつち）よ向け疑ひ晴れた惚たが因果で無理もいふ
長い着物を短く着ても心で錦の綾を取る
情け薄雪かけたる謎を解て返事がしてほしい
中が宜いとて礼儀を欠な円といふ字も角がある
鳴す半鐘で不図眼を覚し主は妾（わちき）に出をかける
泣にや泣れず飛では往（ゆけ）ず心すみ画のほとゝぎす
何かをする程勉強をすれば何かが立ほど庫が立つ
泣〳〵送ツて戻つた寝室（ねや）に残るぬくみで又未れん」（七十三頁）
内所の異見を横ぞつぱうに聞て意気地を私（わし）や立る
ならば出雲へ銀行立て色の為換がして欲い
泣てだますが稼業のやうに云はんすお方は先が無理
涙ながらに待夜の蚊帳に月もくもらす胸の中
名残を咨んで返した後の閨房の伽する初蛙

らノ部

蝋燭の心ぢやなけれど二人が中を切ねばならない身（みの）明り
羅漢さまでも衣服（きもの）を纏ふ裸体（はだか）ぢや道中がなるまいに」（七十四）
洋燈消たる透間の風は出雲で取持つ神のわざ
楽は好まぬ苦労は承知苦労しがいのあるやうに
雷の光りで逃込む蚊帳の中で取れた臍の下
埒があかぬと急（せく）のぢやないが善は急げと人がいふ
楽なやうだが妾の心封じられたる身のつらさ
羅生門より晦日はこわひ鬼が金札取に来る
ランプ頭と誹らば謗れ己が居なけりや家（うち）が闇
乱暴しやんすな隣や近所詫を云ふのは妾（わし）ばかり」（七十五頁）

むノ部

梅の薫りは寝屋まで通ふ人なら浮名が立であろ
梅の匂ひを桜にこめてしだれ柳に咲せたい
無理な口説に泣せて置て寝とはあんまり虫が宜い
梅と桜を両手に持て外にます花あるものか
虫も殺さぬ顔附なれど無心いふ時や鉄面皮
梅に月とはアリヤ格別よ主と妾（わたし）のなかもべつ
無理を云ふのが妾の無理か無理を云せる主が無理」（七十六頁）
麦の青葉も背丈が延て色気づいたか穂が見える
結ぶ出雲の此のかみ写し妾しや一生のまもり神
胸に封じた互ひの誠端書の表にや書（かけ）はせぬ
胸に手を当て仮眠（とろ〳〵）したら情死（しんじう）の夢見て魔（うな）された
室の梅さへ開けば香るかくす恋路も人が知る
無理についだはお酒に酔せ床を抜出る下ごゝろ
胸にあるだけ云はしてお呉主の理屈は後で聞く
向ふ見ずでも主より外に他所を見る眼は妾や持ぬ
胸に打つ波引く袖が浦飛立つ思ひのはね田をき
無理に引止め遊んだお金主に苦労をかけやせぬ」（七十七頁）
無理に引止め居つゞけさすは悪（わるい）と思へど是非がない

無理に操の枝打折て先へ消え行く松のゆき
無理な首尾して逢ふのが花よ八重も一重の思して
向ひ酒なら一合でお止しトハ云へ飲せざすねるだろ
胸に手を当て思案をすれば仇な人ほど実がない

うノ部

浮名の立のは矢よりも早い切れた噂は誰もせぬ
浮気鶯梅をば棄て、隣り歩きのもの、花」（七十八頁）
浮草の所定めぬ浮気なお前コレぢや始終が気にかゝる
うた、寝の覚て溜息心のもつれ人にや話せぬ此しだら
表面（うわべ）ぢや笑ふて心でじれてクドイお客も商業がら
浮名立〳〵願いが叶やまたも世帯の苦労する
うれし悲しが又重なりて急にや晴ない胸のうち
浮てうかして〳〵て浮て胸で泣身の此の苦界
浮名立のを珍らしさうに新聞出す人恋知らぬ
嬉しい便りを漸く聞て今朝はゆるんだ肩のこり
裏を返してお客の羽織鼠海気でねこがすく
上を思へば限りがないと下を見て咲く百合の花」（七十九頁）
虚をつく摩の鍋ではないが重なる思ひに増苦労
虚の中から誠の花が咲て芽を出す佐渡の土
内に居る時雷り聞て外で陽気な線香焚く
うつり易いが写真にや取ぬ梅毒（かさ）と病目（やんめ）に虎烈刺（コレラ）病
旨い世界にチン〳〵鴨の好たすき焼さし向ひ
浮た同志と云はる、筈よすゞみ舟から出来た中
浮名立させ今さら逃りや名誉回復出訴する
疑ひ晴たらモー是からは誠あかして添ふ思案
団扇を小楯に欠伸をかくしむせた蚊やりで空涙
浮世逃れし庵りの庭に独り澄した苦清水」（八十頁）

ゐノ部

異見聞くときや頭を下な下りや異見が上を越す
異見聞つ、畳へ指で好きの頭字書て居る
異見するのはアリヤ親の役お金遣ふが此方（こち）の役
異見するほど尚ほやけ酒を飲で困らす主のくせ
異見聞くとき突く両の手は形（なり）も蛙のつらに水
異見聞くたび身をもち直し花も浮気な枝を折る
異見ぐらゐで恋路が止りや落る夕日も呼戻」（八十一頁）
異見するとはお前の野暮よ義理も世間もある物か
異見するやふな私じやないよ惚てやろと人が言ふ
異見しやんすなお前も昔しや同じ野に咲く蓮華草

のノ部

檐（のき）に釣れた妾（わし）や風鈴よ鳴もならぬもかぜ次第
惚（のろ）けじまいのモー惚じまいドンナやお方も手にや附ぬ
惚けて衆人（みんな）になぶられながら思はずゐつぼに入る妾（わたし）
載せてもちやげて腰動して旦那いきます人力車」（八十二頁）
飲ぢや悪いと止たる口で最一（もひとつ）次（つぐ）とは能く言た
淫（のろい）お客を口にて吊し昇（あげ）たり降（さげ）たり自在鉤
望みある身は谷間の清水暫し木の間の下くゞる
上る日影もゆたかな空にけぶる柳のなが堤
飲ぬと知りつ、波々つぐは酒をすけ度下ご、ろ
飲ぬ先から顔赤らめて一寸貴郎（あなた）と思ひざし
檐にかけたるアノ風鈴も銭（かね）がなくては鳴はせぬ
逃れられない今夜の無心受にや頼も聞きやせまい
飲で猩々世々安楽の夢をむすんだ樽まくら
飲でか、ツてツイ浮々と飲れた妾の意苦地なさ」（八十三頁）
望むお前に振棄られて外に望みのないわたし
のろい女と笑ば笑へ人は妾（わた）しをねたむのだ
登りつめたる階子（はしご）に代て煎じつめたる此の世帯
咽を鳴してモー来る頃と撫（なぜ）て待つ夜の猫火ばち
退（のい）たお前の座つた跡へチンとすまして笑ひ顔
檐端つたふて来る蛍でさへも月の隠れた隙に来る
後の逢ふ瀬を楽しみ今朝は無理に帰した其つらさ

おノ部」（八十四頁）

おしきところは次号へのばし客を引づる続きもの
思ふたお方の心のうちへ引て置たいてりがらふ
思ふお方になぞではないが解て見度（みせたい）胸の中

お顔見ながら話しも出来ぬ玻璃（がらす）障子の内と外
逢て居てさへとゞかぬ言葉文にか、れる筈がない
お前の心は弥生の空よ花はあつても曇りがち
お互ひに熱くなつては稼業の邪魔よト云ふて逢ずにや居られない
親の眼鏡で見抜た主と晴て曇りの内儀業
お互に扣（ひかへ）めにすりや端（はて）しが付ぬト云ふて云出す折がない」（八十五頁）
お顔皆鶴それから先は色よい返事を菊ばたけ
おなつかしさに慕ふて居れど情あさまの主の胸
お前の病気に妾（わし）や気をもみぢ好な酒さへ龍田川
お部屋の異見であきらめますと云ふは心の裏階子（うらばしご）
お前の嘘をば手帳へ留て死ぬと閻魔へ訴へる
お前に見せよと結たる髪を夜中に乱すも亦お前
朧月夜に人目を忍び雁も北へとソツと行く
思ひの丈をば素振に見せて一座（はた）を兼たる色眼鏡
お前ばかりを待網など、嘘を佃でひきあげる
思ひざしだと顔覗れて飲ぬ先からポツとする」（八十六頁）
男猫待のか頸輪の鈴を鳴す女猫のいじらしさ

くノ部

来るかノ〳〵と待せて置て外（ほか）へそれたか夏の雨
来ると程よく調子を合せ客をのぼらす階子酒
来るかノ〳〵と眠りもせずに夜中釣る、蚊帳の中
櫛は縁きりかんざしや遺物（かたみ）指環は当座の縁繋ぎ
愚痴が溢（こぼ）れて思はず何時か堪へ袋の緒が切れた
苦労増のも私や厭やせぬ優い返事の此の手紙」（八十七頁）
雲に入る月の油断をコツソリ忍び檐端つたふて来る蛍
狂ふた昔の月日もすぎて獅子も中よき白ぼたん
苦労黒繻子とけたる帯をむすびなをして権（かり）の妻
くもるこゝろもいつしか晴て親に明した妹背中
口にや一筋心にや三筋つらい調子を合す三味（さみ）
苦労さんすは短い命気楽に暮さにやつまらない
口でけなして心で褒て人目しのんで見る写真
口に云はれぬ娘の願ひ乳母が結ぶの糸のあや
苦労するのはテンから覚悟意気な亭主を持つからは
苦労しら菊をしろひ育ち今ぢや手活の花で居る」（八十八頁）
苦労し遂たお方は何故か何をするにもソツがない
汲みつ汲まれつ互ひの胸を結んで嬉しひ四手あみ
苦労に痩ても此の道や別さ留る力の強い事
曇る心も鏡台山に晴てうつした月のまゆ
願主誰とも記さぬ鈴は人目忍ぶのかみ頼み
暗い妾（わた）しと知りつ、先が夜網打込む面悪さ

やノ部

山も霞でハツキリ見えぬ夫で目鏡をかけた橋」（八十九頁）
山家そだちの私の身でも粋と云はれた初蜜柑
夜学ノ〳〵で勉強するは人の教へぬいろの文字
山も錦の色染分て風に浮名のたつたひめ
野暮な妾も住む土地がらに連て芽をふく柳ばし
やたら藪蚊のへだてはあれど粋なお人の肌も吸ふ
焼ば又かと小言を云はれ焼なきや妾の気がすまぬ
焼たお芋とふかしたお芋ドチラのお屁が臭からふ
柳がくれの那（あ）の三ケ月は凄い筈だよやみあがり
山で切る木は沢山あれど思ひ切る気は更にない
やみとお前に斯う入上て末は如何せう格子さき」（九十頁）
安い時計と蕩楽（どうらく）むすこ狂ひ易うで苦労する
やさしい育ちの私だけれど彼婦（あいつ）故だよ腕車（くるま）ひく
安目を真に受け鼻毛を伸し代りの出来たも知らないで
野暮な姦夫（まをとこ）本夫（ていしゆ）の顔に泥のつくはづ転ぶもの
痩る筈だよ今日此頃は人の知らない苦労する
野暮ぢやないからチト来て御覧妾が国サの松島へ
八釜しいなら静かにおしなお前が黙れば妾（わし）も止す
やつれた姿も何処（どこ）やら床したしか粋者（それしや）の果だらふ
八重の山吹はでにはさけど末は実のない事ばかり
焼餅らしいが云はねばならぬ毎晩明ては不用心」（九十一頁）
焼て燃立つ妾の胸は主のランプでツイしめる

まノ部

窓の戸たゝいて那（あ）の夜嵐が嬉い夢まで他所へやり
待に甲斐なき今宵の雨で内に居ながら袖ぬらす
まゝよ三度梅毒（がさ）よこねに搦（から）み旅は二本づゑ湯は草津
儘にならぬと写真を詠め思はず食切るつま楊枝
纏ひ附たら離れはしない藤の蔓より紙幣（ぺら）のつる
真面目な顔して算盤持ど目前にチラツク廓（さと）の花」（九十二頁）
待つ夜の長さを半分残し逢たその夜のたしにする
間夫と二人の相談づくは客をとらかす舌げいこ
まゝよ三度笠真直に被り借のあるとこ横にする
松といふ字は中よい筈よ公と木とのさし向ひ
廻し屏風の倒れた縁でとなり同志のおちかづき
まはす屏風に立切る襖恋と情けのうら表
松の様なる片意地ものも雪の肌には折やすい
まゝになるなら私の出臍そいで足たい此の鼻へ
未だ帯や解ねど解たる胸を恍（さと）ってお呉と眼に云せ
間夫を夜明に突出す鐘は例日（いつも）と違つて耳に立つ」（九十三頁）
又たの逢ふせを契つて帰し後で指折る其の長さ
待て居たのにアレマア嫌な格子までとは憎らしい
間夫は本床廻しの床に番をして居る間ぬけ面
儘になるなら瘡までかいて主にさせ度アノ検査
儘よ〳〵が家庫（いへくら）倒し儘にならなくなる身体
儘にならぬが浮世の習ひ自由の権とは恋しらず

けノ部

化粧したのでフト見違へる雪のあしたの桃さくら」（九十四頁）
けふか明日かの可愛い中も淵が瀬となる世の習ひ
今日に昨日と淵瀬がかはり当にならない飛鳥川
化粧する気かまだ水臭い上べばかりで惚はせぬ
芸者殺すにや刃物は入らぬお茶の三日も挽ば死ぬ
芸者商売サラリと止て今ぢや真面目な襷がけ
今朝は四辺（あたり）へ猶々気がね嬉しい首尾から寝過した
下駄の歯形に未練を残すつらい別れの雪の朝
今日も今日とて噂をしたよなぞと手管の口車
芸者止ても又権妻で苦労するのも主の為め
権利〳〵と云しやんすれど妾（わちき）にや其様（そなへ）な義務はない」（九十五頁）
今日こそ日頃の願ひが叶ひ世間晴ての夫婦中
芸妓（げいしや）する身と金側時計何時かお髯の襟に付く
芸妓する身と画工（ゑかき）の皿は人の知らない色がある
げいしや鑑札返上致しお傍でたち縫して見たい
傾城に誠ないとはソリヤ嘘の皮誠あるまで買ばある
喧嘩するとは不粋ぢやないか口で話せば分る事
権利の義務のと云んすけれど色は議論ぢや出来はせぬ
兄弟と知らで契つた二人の中は人にも云れぬ腐れ縁
消した妾の此の刺繍（いれずみ）は主の名前を入れる為
外面如菩薩内心如夜叉とは云へお前の事ぢやない」（九十六頁）

ふノ部

深いこゝろを紅葉に見せて他所に過行く初しぐれ
ふけよ川風流れよ浮名ぬしも共寝のなみまくら
二ツならべた枕を何卒（どうぞ）末のすへまで変へぬやう
文の使に忍んで来れば親爺の異見の声がする
二ツ枕で気は浮船の中はうれしい四手あみ
双親（ふたおや）かゝつて右から左慈悲と情でかたしらべ
深い奥底あけても主はあみを卸してひく心」（九十七頁）
文明開化に便利なものは汽車に電信活字版
含みましたる牡丹の色香露の情に宿る蝶
ふみも心もとゞいて解て今宵結ぶは二世のゑん
文の封じを切る間もホンにもどかしいぞへ夏氷
ふみも寄算人目をかねて一寸目つきのかけ合せ
二人コツソリ咄しの中を闇にして行く火取り虫
冬の氷も時さへ来れば夏の最中に雪の花
ふけて揚巻誰しら玉と結ぶ比翼の杏葉（きようえう）牡丹
富士のたかねにふるのも雪よしづの檐端の雪も雪
不図した事からツイ思ひつき主のお出の待遠さ」（九十八頁）
フツト写りし鏡みの内へ止ておきたい主の顔
船板一枚こわくはないが舌の二枚が恐ろしひ

太く書る、細見よりも細く家族と書れ度
深くなつたる其源は誠の泪の一としづく
富士の山ほど苦労をするが元は一夜の出来心

こノ部

是で妾（わたし）へ妾がほれたナゾと鏡台かたづける
恋の法律確乎と立りや鐘とからすは国事犯」（九十九頁）
恋の迷ひ路明りは入らぬ人目憚かる事ばかり
恋の邪魔すりや那（あ）の烏さへ可愛と啼ても悪まれる
恋のしがらみ気をまた紅葉鹿の通ひ路長づゝみ
斯（こう）なりや分れがまた惜くなる解た話しの雪の朝
恋の道には上下を云はず鹿といふ字に馬が乗る
心づくしに袴を取らせ湿（ぬれ）る嫁菜に春のあめ
恋の淵瀬に身をなげ嶋田浮も沈むも主しだい
恋の会議を出雲で開き鐘とからすが廃し度
声もかすかに友呼ぶ鹿は夢に聞たかおぼろ月
恋といふ字を分析すればいとし〳〵といふ心」（百頁）
事のおきつは誰しら浪に金で命を捨小舟
恋の山路にトンネル開き人目知らさず通い度
恋のいろはを卒業すれば夫からちりぬる親の金
心の誠をすかして見せて解ける氷の夏の夜半
心せき？身は八重ざきの花も情けのふかみ草
こがれて松茸しぐれる眼元どうか首尾して出（でゝ）きのこ
氷より堅い心の妾ぢやけれど主の手管に解される
こゝろの曇りが昨宵の夢に晴れて嬉しき今朝の雪
心すみだで気も晴〳〵と顔は互ひに桜いろ
斯なりや遠慮が何あるものか門札かけたる晴た中」（百一頁）

えノ部

縁切榎も呑せて見たが惚た同志は効はせぬ
遠慮するのは始めの中よ惚りや互ひに喧嘩する
回向するとは昔の事よ今ぢや男で苦労する
エ、ヂレッタイ、ア、悔しひと鬱（ふさ）ぐ茶碗であをる酒
閻魔が畏（こは）いは昔の事よ今ぢや閻魔とごろ寝する
エ、此様（こんな）になつたと島田を撫（なぜ）て後は能く見ぬ主の顔
縁は出雲で結んでもらひなぞは互の胸で解く」（百二頁）
易を見たらばお前は浮気妾（わたし）や出雲へ暴れ込む
縁がありやこそ高峯の桜折て手活の花にする
回向するとて仏の前へ二人向いて小鍋だて
縁があるなら幾度もお出レコがあるなら居続を
閻魔だまして元服させて後で奴隷に叩きうる
縁の深瀬の番（つが）いの鴛鴦に邪魔も船頭の気取楫
縁を結んで毛糸の網の手内職さへぬしの為め
縁を切火も焼ボツくひに又も燃つくほくち箱
縁は深川切れても後は永代二人でつくします
海老で鯛つるア昔しの事よいまじや狐が鯰つる」（百三頁）
笑顔含んで咲たる花も仇に折る、庭のうめ
笑顔つくらふ花をば棄て、悪やすげなく帰る雁
縁の綱手のあひのり車梶はごんさい口でとる
遠慮しやんすな此様（こう）なる上は妾（わちき）の身体は主のもの

てノ部

出先問はれてツイ口籠り散歩とばかりは云ひ兼る
手持不沙汰で去（いな）した訳は繁き人目の別へだて
天が目で見て壁耳で聞きソシテ云はせる人の口」（百四頁）
調子合せりや宜気（いゝき）になつていとゞ逆上（のぼせ）る浮れ性
鉄道器械に電信だより負ず劣らぬ国の益
亭主と人目の関所がなけりや晴て浮気が出来るだろ
てつきり惚たを悟つて居れど何時まで体よく釣瓶ずし
調度首尾さへ宜い時姫と是から惚気の三代記
手前勝手の我ま、云ふも好た同志の夫婦（めをと）なか
蝶は番（つがひ）で何時でも舞ふが来るも帰るも私や一人
手鍋提ても添ねばならぬと云ふお方は主ぢやない
天狗に舟ぞこ枕をさせりや鼻が帆柱髯が梶
手のとゞく嫁菜たんぽ、摘ずに置て届かぬお前で苦労する」（百五頁）
手入れ嫁菜のしたしい中も時が経てはまづくなる
調子合せりや調子に乗て調子外れのこゑを出す

出来る事ならつぢつま合せ着せて出し度人の中
出来た様だと心でさつし尻へ手をやる酣徳利
敵の寐いきをこつそり聞てそつと窺ふ蚊屋のしろ
天下泰平へんなき御代は民もあんどのかたまくら
手まくらさしかい顔見合てヱ、もにくらし明の鐘
手管の綱とはツイ白魚の罹る憂（つら）さは恋の？

あノ部」（百六頁）

逢はねば逢はぬで苦労に苦労逢へば逢たで又苦労
逢は逢はぬの裏とは知れど猟に食はすも吝（おし）ひ夢
明す中にも少こしの嘘は苦労かけない妾（わし）の実
アレサじれつたい抜たぢやないか早くおはめよ坊の足袋
行燈引よせ煙管を伸しアレサを止（よし）よ火が消る
行燈吹消しアレ化物といふて取附く主の膝
逢たい見たいは日に幾度かまして逢たい今日の今
逢ふて別れて後見送りて内へ帰りて又ふさぐ
雨の桜を小柄で削り赤い心を墨でかく
逢ふ夜松かぜ便りを聞きて一人くよ〳〵村時雨」（百七頁）
あけを奪ひし今紫の色香にやお客も迷ふはづ
あどけないのが可愛いけれど初心過るもじれつたい
合ぬ歯の根を心にしめて忍び逢ふ夜の庭づたひ
あふさへ〳〵喜ぶうちに何時か口説も式三番
逢は互ひに泪の種と思へど逢はずにや居られない
逢ふと思へば又引分れ乾く間もなきはね釣瓶
逢ふて居る今夢では無歟（ないか）逢れそうなる訳じや無
逢ふて嬉しさ思へば跡は何れ涙の種となる
逢で心を妾（わし）や古傘に骨も見へすく恋病ひ
逢はば斯まで嬉しい者を何んの異見が耳に入」（百八頁）
逢ふた上にも逢たい事と愚痴な願ひの恋の欲
逢ふた初めに其捨言葉聞ば苦労もせまい物
はへば互にたゞぼふぜんとはなし残してあとくやみ

さノ部

三度の食事は二度でも宜いよ主と一所に暮すなら
三年男をたつたと云へば寝てする事には構やせぬ
三味線枕の浮気だとても覚えあるぞへ岩田帯
先は住吉此身は住ぬ夫に浮名が高燈籠」（百九頁）
先が切れた歟心の箒はけぬ此身の塵の数
座敷仕舞て気儘な酒は脱だ着替の皺伸し
酒は飲遂浮気はし遂儘に長生し遂たい
去た女房が行燈に針の穴の恋しひ独り者
相模女とぬしやあなどつてさんざ妾（わたし）を手玉石
さけものみ鯛あそびもし鯛金もためたいじれつたい
酒が言するとは知りながら疑るお前が憎らしい
相談づくなら遠ほざ可（かろふ）が問ひ音信（おとづれ）はしてお呉
酒の真菅（ますげ）も世に苅だされ儘よ恋路のさん度笠
三世因果の道理で口説き二世の契りをする和尚」（百十頁）
酒が云はせる無理とは日比合点しながら腹が立つ
座敷車力と惚けで知つた能（よく）も乗たよ口ぐるま
酒に云はせた心のたけを受てこぼすは情ない
サツト漣み立つ鴛鴦のちらす水面（みおも）の月のかげ
棹を握つて脇櫓がかんを付るお客と猫のふね
鷺か烏か明（わか）らぬうちに春の小鳥がやかましい
酒に相かぎ心の錠を開ひてお金の封をきる
才子ぶりする鈍馬（とんま）な野郎尻のしまりもない癖に

きノ部」（百十一頁）

瑕は此処（こゝ）だと歯でなでて見る夕辺嚙れた舌の頭（さき）
君の洋行見送る波止場目出度帰朝を待つわいな
気兼苦労もみなおまへ故今さら切るとは情けない
聞けば聞ほど実ある主へ初会の手管がはづかしひ
義理と云ふ字を御存じならばヨモヤ見棄はなさるまい
切ならお切と畳を叩き刃物ぢや切ない縁の糸
起請誓紙を活字で刷らせ宛名と月日を明ておく
君の為めなら命も遣る気苦労ぐらゐは税のうち
気障なお客と影では云へどアイと返詞も金しだい
君を起した此蚊とおもや義理にも滅多にや焼れ無」（百十二頁）

胡瓜きられた私でさへもお前に取つく蔓がある
胡瓜きられた身のなり果はたよる手蔓も切てなし
伽羅をたかせた昔しに替て今は嵯峨野の夕蚊遣り
君は今頃駒下駄はいて声も高尾のそゝりぶし
君に別れて逢ないときはねやに淋しき鹿の声
気兼苦労もなくさほしかの声もたのしき山ずまゐ
屹度（きつと）ですよのですよが余計唯の屹度に仕て欲い
汽車で通へば苦なしに往（ゆく）が矢張をあしが先に立
君に粟津の難面（つれない）恋路私しや堅田の片思ひ
客を送つてれんじに持たれ見やる名残りの空泪」（百十三頁）
きざな人だと口には言へどあいと返事も○（まる）次第
君は吉野の千本桜色香は好れどきが多い

ゆノ部

夢なれば醒てくれるなしばしの間だ醒て逢れる身ではない
ゆき丈そろへて何時着られやう今は下着の隠しづま
指でつまんで広げて入れて白い水出す糠ぶくろ
雪を被つて寝て居る笹を来ては雀がゆり起す
夕べ結んだ此揚巻も今朝は口説のもつれ髪」（百十四頁）
夢にうつゝに忘れぬ主の姿うつした此の写しん
夢の浮世か浮世の夢か夢の世に夢むすぶ夢
雪に添寝の数々積り重い身と成る窓の竹
夢でも善から持たいものは金の生る木とよい女房
夢に夢見たその嬉しさをぶんと蚊が来てさす意見
昨夜（ゆふべ）とぼした報いで今朝は油取れる洋燈部屋
雪の肌をばチラリと見せて解（ほどけ）易いは繻子の帯
夢になり共真一度見度い富士の額に月の眉
指を切らふとした剃刀で今朝は嬉しうそる眉毛
雪の夕に嘶がつもり首尾の日和に解て逢ふ」（百十五頁）
夢で嬉く逢時さへも恋の邪魔する明の鐘
雪の夜寒に待草臥て主と思ふて抱こたつ
昨夜（ゆふべ）逢たに又顔見たい心にうなづくテリガラフ
夢は逆夢よいとは云へど妾（わた）しや嬉しい逢た夢
指を切ふと云ふたは手管貨幣（かね）が無なりや手を切う
夢の浮橋渡らば舟と思ふにかいなき此速瀬
行にや行かれず行かずにや置けずと云て行のも変なもの
雪に口紅照込む朝日受けて笑顔の梅の花
雪の中でも梅さへ開くお前も時節をまたしやんせ」（百十六頁）

めノ部

目には見えねど此処らと妾（わたし）や主のあとをば大井川
目附で知らせて悟れと云へば悟つて居ながら知らぬ顔
回（めぐ）るゑんかな車の私挽にや引れぬ此始末
妾と云ふ字を分析すれば果して浪風立つ女
牝鹿雄鹿のそのなか〳〵は立た角をもおる小鹿
日出度座敷で牡丹の色を顔に散らして蝶の酌
回る地球にさて住ながら回り兼たる智恵と貨幣（かね）」（百十七頁）
めぐる地球に碇をおろし暫し止たき今朝の雪
眼で知らせ顋（あご）で受たる昔に換て鼻で扱ふ今朝のしぎ
目と目で便りを届かせ置て口と口とで請こたへ

みノ部

見捨られたよ枯野の尾花夜半の狐火身を焦す
未練らしいが唯一事を云つてやり度事がある
未練ものだとお前は云へど切るつもりで惚はせぬ
未来で罪科受よが儘よ現世で悪性が仕て見度」（百十八頁）
店にや親指奥には小指外にや人指す指が居る
三筋の世渡りさらりと止て今日は嬉しい二等親
水になるのは元より覚悟私しや囲の室氷
水でかためた氷の身でも解りや浮名も水の泡
三筋でだんなの気を引く猫は権妻姿の本調子
水をさゝれし氷でさへも今じや思を口移し
水をさゝれちや崩れる恋路かたひ初手には解安い
右を上れば左が下る中でまご〳〵するつらさ
短い線香承知で立て、狸寐して居る馬鹿なやつ
身一ツなれども写真でお顔見れば其日の憂晴（うさばらし）」（百十九頁）
水に被（され）よが火に燻（くべ）らりよが儘よ飽迄色擬（きどり）

水も漏さぬ中とは見えぬ貨幣（かね）が結んだ薄い縁
晦日に月見時節だけれど女郎の誠にや未だ遇ぬ
操立ぬく貞女でさへも蚊屋へひき込む窓の月
見へも飾りも構はぬ程にぢれて尚更深くなる
道は開ける蒸気は出来るいとも便利の新日本
乱れ髪見りや辛苦が増よ心もつれが有ふかと
味噌こしの底に溜りし妾の思ひコスに越れぬ此人目」（百二十頁）

しノ部

実つと誠の種さへ蒔けばはなれまいとの花がさく
忍ぶ切戸に色香を止て露を目に持つ花の顔
忍び駒掛て口説て出来たるお前罰（ばち）でも当らにや切はせぬ
しみ〴〵と逢て話も出来ない両人（ふたり）如何すりや気儘に逢るやら
心実見えたるお方と思や今となつては水のあは
忍び啼してふと目を覚し見れば藪蚊が逃て行く
真に能似たこの児の寐顔主をそのまゝ瓜二つ」（百二十一頁）
実を夕月互の戸胸あけて涼しき蚊屋のうち
鹿の角でも時節が来れば落て身軽となるはいな
賤のおだまきくりごといふて深く入鹿の奥御殿
初手は小猫で中度（なかたび）や狐今じや鯰の二等親
獅子に牡丹ははなれぬ者を中を芍薬つらにくさ
尻の毛抜れて鼻毛を読れ眉毛の唾を空（むだ）にした
絞れば随分有そな客と纏（から）んだ手足でメて見る
白鬼を騙して折たる角が帰りや嘘に生て居る
自由自まゝの太平楽もうらむまいぞへ貨幣（かね）のわざ
鹿と紅葉もそめないうちに秋風立田の川にしき」（百二十二頁）
鹿の啼く音になびかぬ紅葉君に操を立田川
鹿のなく音につひいろづきて派手に錦を着る紅葉
鹿と咄しも聞ない内に又もお前は気を紅葉
鹿の声よりお前の声が胸に残りて明烏
自由世界に不自由の物は貨幣（かね）と命と私しの智恵
しかと見留たお前の浮気角を出ずにやいられない

ゑノ部

縁切榎で割（さこ）ふとすれど惚た同志にや利（きゝ）はせぬ」（百二十三頁）
縁は深川きれても後は永代ふたりで佃じま
縁は異なものびつこに片眼二人合せて一人前
越中ぶらさげ越前出して這ひし姿は越後獅子
縁の綱手のあひのり車梶はゴンサイ口で取る
縁を結んで毛糸の網の手内職さへ主のため
襟の合から手さきを出して鼻毛ぬき〴〵物思ひ
栄曜（えやう）にや掛物かへても見るがホンに女房は床柱
笑顔に見惚（みとれ）て手に持つ猪口を火鉢へ溢（こぼし）て灰かけた
縁も時節もナニ待りやうぞ惚た意気地で添遂る」（百二十四頁）

ひノ部

広ろい世かいを此春雨にせまくして行もやい傘
日の暮方にはお前の事と見ても涙に暮の鐘
人の出世は知れないものよ襤褸も未にはかみとなる
ピツシヤリ叩かれ始めて気づきあいたかつたと眼に涙
人もうらやむ二人が中も晴ちや逢れぬ隔てがき
人目世間に悟られまいと苦労して咲く室の梅
人の花折し私は済ないけれど思案の外なら是非がない」（百二十五頁）
人もあらふに仲間の人と浮気するにもほどがある
一ト枝手折ばアノ女郎花からんで離さぬ蛇ゑちご
髯にすがつて馬車へは乗れど又も地震で元の猫
人が捏ても私しや一筋に通す積りの串団子
人は何んとも未だ白雪のうちにほころぶ梅の花
ひたと寄添抜身を握り殺ておくれと鼻でいき
日々に新に又日に新なぞと水性（うはき）の仕あきする
人目包めど浮名が外へ洩る障子の指の穴
髯で官吏が勤まるならば勤めさせたや臍の下
髯に大蔵省をば任せ内閣顧問は間夫の役」（百二十六頁）
膝で知らせて眼尻で消て一座酔せて後の首尾
人と思て飛退見れば干た褌おちるかげ
人目包めど香に現はる、墨田土産の桜餅
一二三四（ひとふたみいよ）の手が遂外れ転げ始めの手鞠唄

昼は人目を忍んで居れど暮ると密かに来る蛍

もノ部

もと〳〵浮気で此様（こう）なりながら浮気するなも宜く出来た
元を糺せば他人と他人洗ひ立すりや主の恥」（百二十七頁）
モジ〳〵しやんすな此様なりや侭よ構つちや居られぬ人の口
元は吉野に咲桜花世事にくすぶる炭俵
物質（もの）の変化は理学で知れどどうも解らぬ主の胸
若しや私を呼ぶかと見れば枝豆抱へてどなる声
紅葉に焦れて啼く鹿よりも私しや主ゆへなきあかす
若しやそれかと気をおく胡蝶牡丹は心の〆くゝり
紅葉ふみわけ妻こふ鹿のこゑも淋しい秋のくれ
紅葉散ふる社の前へに鹿の馴れたる奈良の里
もつれた苦説がツイ解（とけ）かねてタマサカ逢夜を後向
もてりや散財振れりややけよドーセ斯なりや空財布」（百二十八頁）
燃る思ひは浮名と共に立や蒸気の出るけぶり
持たが病の女郎買遊び天窓（あたま）はげても止（やみ）はせぬ
燃立つ思ひを涙で消して口惜い一夜を我慢する
もじの読ない猫社会（なかま）でも野郎の鼻毛は能く読る
揉で揉れてもまれて揉で拭て棄らる掃除紙
若や夫かと門の戸開りや棒を抱えて立て居
持かけられても乗れぬ者は人の女房と口ぐるま
燃る思ひを涙で消して焼ぬふりして待つらさ
も、年迄もといふたじやないか半年またずに此しまつ」（百二十九頁）

せノ部

背中そむけて云度事も我慢して寝る其のつらさ
背から羽織を着せるに付て叩いた昔しを思ひ出す
西洋造りはオ、馬鹿らしい算へる天井の板がない
背中で泣子をゆり揚ながら男涙にもらい乳
せまる途方に早暮合の貨幣（かね）に火を付気はランプ
晴天白日露ちりほども曇らぬ心が世のかゞみ
切角の御心切だがまた其内に学若し成たら馬車で逢ふ」（百三十頁）
責て夢でも見やうと思ひ寝ば半鐘でまた起る
是非に今宵は相そめ川と待にまたなく色くらべ

すノ部

硯引寄せうらみの丈を書ど書れぬ胸の内
須磨のうら曲（わ）に照る月かげは今も昔も変りやせぬ
少しや自分で憂目をお三輪あんまり浮気が杉酒屋
粋な風情に仇めく二人色香争ふうめごよみ
姿美代吉いもと、知らず色に命をちゞみ売」（百三十一頁）
炭をつぎ〳〵火箸を筆にあつい男のかしら文字
すゞみがてらのお前の噂胸にヒヤリと氷水
すへを三毛猫なでごえ旨（うま）く膝へのり〳〵隠す爪
すがる垣根も秋果がほにいとゞ赤らむからす瓜
するどい爪をば隠して置て猫撫声とは恐ろしい
すねて帰ると身支度すれば降て留る今朝の雪
吸付煙草につい迷はされ大事のお貨幣（かね）を烟にする
末を田の実に故郷をはなれ縁のふか田へ根づく稲
吸付煙草の烟と成つて主の腹中（おなか）が見て来たい
姿見せずに啼く一声は恋の暗路（やみじ）の時鳥」（百三十二頁）
筋を立れば断ねばならぬ悪ふもつれし凧の糸
姿優しく声美くしき鹿に邪魔気な角がある
すかぬお客と添寝の夜は蚊帳の一重も魚の網
墨とすゞりは仲よいけれど水をさゝれりや薄くなる
墨も硯りもへる程書て送る情のこもるふみ
角力甚句でやう〳〵客に出るもスツチヤン爺（ちやん）の為め
好で求めた妾（わたし）の苦労助（すけ）る貴郎（あなた）がおいとしい
東都々逸五百題畢」（百三十三頁）

明治廿二年六月廿五日印刷
仝　　年六月廿九日出版
版権所有
発行者　池村鶴吉
本郷区台町三十二番地
印刷者　滝川三代太郎
日本橋区新和泉町一番地

発　兌　金園堂
日本橋区通四丁目四番地」（奥付）

情歌判断銭占（明治二十三年。環翠堂版）

易学粋士著
〔情歌判断〕銭占
環翠堂版」（表紙）
情歌銭判談　見出し　白は文字黒はうら
（一～六十四の図省略）」（見返し）
一●●●●●●乾為天（占い文句省略）
花のゆふぐれ小窓をあけて人にいわれぬものおもひ
二○○○○○坤為地
涼み舟でもおまへの口であをがれる程あつくなる」（一オ）
三○●○○○●水電屯
否なお方を程よくぬけて好きなお前とむすびたい
四●○○○●○山水蒙
母はたれともしら歯でふくれ出来た其子はもんちらし」（一ウ）
五○●○●●●水天需
口で惚たじやあてにはならぬならば保険を付さんせ
六●●●○●○天水訟
しらぬ事とて恨みはしたが聞ば苦をます苦の世界」（二オ）
七○○○○●○地水師
思ひ出してはツイ気もふさぎ主の浮きにまたくろう
八○●○○○○水地比
水にすんでもおまへの口で仰にまかしたこのからだ」（二ウ）
九●●○●●●風天小畜
金でうつたるみは山吹の実のない情がさとの花
十●●●○●●天沢履
思ふ同志のもんくを聞ば自由の権だと理をつける」（三オ）
十一○○○●●●地天泰
君（ぬし）の権利と臣（わたし）のじゆう併た世界でくらす春
十二●●●○○○天地否
ぞつと身にしむあなたのくせがしたふて苦労のこんくらべ」（三ウ）
十三●●●●○●天火同人
互の精神（こゝろ）を江湖（せけん）へしらせそしてじせつをまつている
十四●○●●●●火天大有
思ひおもはれ便りはすれど逢ねばどうやら気がすまぬ」（四オ）
十五○○○●○○地山謙
好たお方とおもふてさせば目とめでかよわすでんしんき
十六○○●○○○雷地予
ふとした事から精神（こゝろ）がまよひ今にみすじで世を渡る」（四ウ）
十七○●●○○●沢雷随
何も私が嫉妬（やく）のぢやないがかくさづ実を言がよい
十八●○○●●○山風蠱
初てはしんせつ今ではふじつ乱れ心のあとやさき」（五オ）
十九○○○○●●地沢臨
ストゝンと下りる階子のまん中ごろでしんぼしやんせと目に涙
二十●●○○○○風地観
きまゝ自由にまかせた柳今にしんめが伸びて来る」（五ウ）
二十一●○●○○●火雷噬嗑
さきのこゝろもまだ見ぬうちに惚たわたしのふかくもの
二十二●○○●○●山火賁
賤ひつとめはしているもゝの主へ貞女は破らない」（六オ）
二十三●○○○○○山地剥
酒のうへだと言ならおいゝ止（とゞめ）さしたるこの手紙
二十四○○○○○●地雷復
硝子障子へなにやらかいて顔見て二人が笑あふ」（六ウ）
二十五●●●○○●天雷无妄
花で迷はせ又しもがれに人にすかるゝ桜炭
二十六●○○●●●山天大畜
お主（まへ）の愉快を風（ほのか）に聞て泪の雨にぬらすひざ」（七オ）
二十七●○○○○●山雷頤
片時わすれぬおまへの事をよるは寝てまた夢にみる

二十八○●●●●○沢風大過
絵にもかけない互ひの胸をうつしてみたい写真鏡」（七ウ）
二十九○●○○●○坎為水
妓（ねこ）が気をもみや浮気な蝶はたかみでけん物するわいな
三十●○●●○●離為火
穂にあらはる、薄でさへも空吹風にはなびきやせぬ」（八オ）
卅一○●●●○○沢山咸
君（ぬし）をまつよは屏風の絵まですねて居るぞへぎざな松
卅二○○●●●○雷風恒
梅やさくらは咲たら散るがひらけてちらない花をまつ」（八ウ）
卅三●●●●○○天山遯
沖の石でも汐干にやかわくせめて日曜にや忘れたい
卅四○○●●●●雷天大壮
君（ぬし）は如何（どふか）と雨戸を明りや柳にかゝりし朧月」（九オ）
卅五●○●○○○火地晋
ぬしの杯とる手をにぎりそつとそひねの夢枕
卅六○○○●○●地火明夷
実で起して涙で返（かへし）うらんで逢瀬を待かねる」（九ウ）
卅七●●○●○●風火家人
清き精神（こゝろ）はオイラの情よにごる詞のあとやさき
卅八●○●○●●火沢睽
旅の烏でさまよふ元はかわい〳〵のぬしゆへに」（十オ）
卅九○●○●○○水山蹇
規則つくりの此初ぶたいゆめの自由のながぜりふ
四十○○●○●○雷水解
乗た計で出さず置はわたしやいやだよ舟人（せんど）さん」（十ウ）
四十一●○○○●●山沢損
田舎そだちと笑はゞわらへ人に好れる時もある
四十二●●○○○●風雷益
あつく成はづおまへとわたしもとはこたつでできた恋」（十一オ）
四十三○●●●●●沢天夬
艱苦する墨文かく業も自由にやならないみの辛さ
四十四●●●●●○天風姤
ま、になり度ま、にもしたいけれど浮世はま、ならぬ」（十一ウ）
四十五○●●○○○沢地萃
恋の役場を出雲へたて、主にしまりがしてほしい
四十六○○○●●○地風升
人めしのんで遣るちわ文がいつしか互ひの枕らがみ」（十二オ）
四十七○●●○●○沢水困
浪の音聞がいやさに山家へすめばまた松風の音計り
四十八○●○○●●○水風井
主は松の木まがつていてもわたしやつたゆへからみつく」（十二ウ）
四十九○●●●●○●沢火革
愚痴もお前の身を思やこそおもわぬ程からい、はせぬ
五十●○●●●●○火風鼎
可愛いおか、に勉強させて国会議いんにしてみとる」（十三オ）
五十一○○●○○●震為雷
一度で済事二度三どのろけて惚たがわかりやせぬ
五十二●○●○○○艮為山
有名むじつの夫をもてばうはきは承知でこがすむね」（十三ウ）
五十三●●○●○○風山漸
籠で育ちしうぐひすなれば初音に嘘が鳴れうか
五十四○○●○●●雷沢帰妹
おまへの姿を牡丹に見たてわたしやてふ〳〵でとまりたい」（十四オ）
五十五○○●●○●雷火豊
あらマアあきれた端書の返事わたしやみるのもはらがたつ
五十六●○●●○○火山旅
写真ながめて又おきあがり独りねるとはばからしい」（十四ウ）
五十七●●○●●○巽為風
ぬしは教師でいろはお教へやがて首尾してアイウエオ
五十八○●●○●●兌為沢
水でだまして咲せた花はどこやら色がさへかねる」（十五オ）
五十九●●○○●○風水渙
富士の山ほど苦労をするがもとは一夜の出来ごゝろ

六十〇●〇〇●●水沢節
わかれがつらいと小声でいへばしめるはかたの帯がなく」（十五ウ）
六十一●●〇〇●●風沢中孚
おそいかへりを待つみにつけて留たむかしお思ひだす
六十二〇〇●●〇〇雷山小過
丸く世渡る御主のむねにぬけめないぞへ新貨へい」（十六オ）
六十三〇●〇●〇●水火既済
電信にとまるつばめはありや二ご、ろどちのたよりをきくであろ
六十四●〇●〇●〇火水未済
地れつたいほど待たせておくが何んの手がらになるだらう」（十六ウ）
明治廿三年九月五日刻成
仝　　年十月十五日出版　　定価三銭
版権所有　愛知県額田郡岡崎町大字連尺四十九番戸
編輯発行兼印刷者　伊藤小文司」（裏見返し）

よしこの源氏の誉
（活版本。明治二十六年。松廼舎散人編）

〔明治新選〕よしこの源氏の誉」（表紙）
松廼舎散人編
〔明治新選〕よしこの源氏の誉
粋士遊客必携」（扉）
〔明治新選〕よしこの源氏の誉
情歌（よしこの）文句入
大胆不敵の女じやないか〔（キセン）せじで丸めて浮気でこねて〕又も其手でだますのか
文明開化の洋服姿〔（明烏）わしや、りはせぬ殺しておいて行かしやんせ〕すがるた」（一頁）もとに袖がない
つらひ勤も暫しの月日〔（一中小春）誠はしんぼう一つぞや〕縁とじせつをまつがよひ
みにも飾らず互にはだか〔（新内抱柏）夜毎日毎の可愛さは次第につもる富士の雪〕とけて
わたいも夏景しき
世間に浮名が立ふがま、よ〔（はうた）人のそしりも世の義理も〕思ふふたりがそへばよい」（二頁）
ついした縁から心を染めて〔夢起てはうつ、まぼろしに〕目先にちら〳〵ぬしの顔
確（し）かと結んだ心で居るが〔（清元）兎にも角にも世の中の移り易ひは人心〕そらどけしさふな繻子の帯
ついした事から浮名がもれて〔桐の雨か、りて袖にぬれ燕あれ見やしやんせ鳥でさへ馴れし所を揮（ふ）りすて、〕かわいひおまへに此苦労」（三頁）
一夜（ひとよ）泊りの旅客に惚れて〔（大功記十段目）これが別れの杯かと悲しさ隠す笑ひ顔〕あすはからすの啼き別れ
篠（しの）を束（たば）ねてつく様（よ）な雨に〔（清元）かきを取られて丸木ばしおつとあぶないすつてのこと〕ぬれて通ふも恋の道
親の意見も蛙のつらへ〔（新内）どふした縁でかの人に逢ふた初手から可愛さが身にし」（四頁）み〳〵と惚れぬいて〕見ずにや居られぬ主の顔
眉毛おとして白歯を染めて〔（常盤津）一日なりとも女夫（めをと）になつて〕ぬしと一処に暮したい
惚れた弱身とぬしやつけこんで〔（声色お染）あれまたあんな無理いふて〕人をじらすも程がある
よしこの佐和璃入」（五頁）
及ばぬ恋路と知りつ、惚れて〔（千本すしや）たとへこがれて死ぬればとて雲井に近き御方へすしやの娘がほれられよか〕とはいへ女房のあるからだ
人目忍んで恋路の闇を〔（新口村）それは嬉しうござんせうさりながらわたしがと、さんは京の六条珠数や町〕こへて峠のまたくろう
因果づくとはおもふてゐれど〔（宿やのだん）こがれそめたる恋人とかたらふ間さへ夏の夜のみじか」（六頁）いちぎりにほいないわかれ〕かたときわすれぬうきおもひ
深き実意を人目にかくし〔（大功記十）妻がしらいで何とせふ二世も三世もめうとじやと思ふてゐるになさけない杯せぬが仕合せとは〕恋の秘密かきよくがない
むすめ心のたゞ一筋に〔（野崎村）余りあいたさなつかしさ勿体ないことながら観音様」（七頁）をかこつけにあいに北やら南やら〕来て見りやつれないことばかり
死ぬかいきるの二瀬となりて〔（沼津のだん）ながしい間に路金もつき其みつぎに身のまはりくしかうがいまで売りはらい〕こうなりやたがひの心底づく
浮気なおまへにこるよなわたし〔（酒やのだん）去年の秋のわづらひにいつそ死んでしもうたら斯した」（八頁）難義は出来まいものお気に入らぬと知ながらがらみれんなわたしがりんゑゆへ〕くろうしたのもみずのあわ
実なやうでもおまへの浮気〔（妹背山山の段）としに一度は七夕の逢ふ瀬もあるに此やうに

お顔見ながら添ふことのならぬは何のいんぐわのむくひぞや〕ほれた当座のひとさかり
疑がふ心はみぢんもないが〔（廿四孝）ゑこうせう迚お姿を画にはか、しわせぬ物を魂か」（九頁）へすはんごん香名画の力もあるならばかあいとたつた一言のお声が聞たい〳〵と絵像のそばに身を打ふし〕どふもまこと、思はれぬ
おもひ切れとは昔しのことよ〔（堀川のだん）夫りや聞へませぬ伝兵衛さんお詞むりとは思はねどそも逢か、る始めより末のすへまでいひかはし互に胸を明しあい何の遠慮も内証のせはしられても恩にきぬほんの女夫（めをと）と思ふもの〕思ひきらる、ぎりはない」（十頁）
おもふ妾（わた）しに思わぬお前へ〔（朝顔宿や）又も都を迷ひ出でいつかはめぐり逢阪の関路を跡に近江路や美濃尾張さへ定めなき恋し〳〵に眼を泣きつぶしもの、あいろも水鳥のくがにさまよふ悲しさは〕いつかおまへに大井川
さほどおまへに実あるならば〔（三浦わかれのだん）みぢかいなつの一夜さに忠義のかけることもあるまいこれほどまでにつきしたふ妾（わた）しが心おもひやつて」（十一頁）もくれもせで〕あいそづかしもほどがある
のぼりつめたる二階のはしご〔（寺子や）あすの夜たれが添乳せんらむうゐめ見る親心つるぎと死出のやまけこへあさきゆめみし心地して〕今更目が覚め諦らめた
積る恋路の海山こして〔（忠九）貞女両夫にまみへずたとへ夫に別れても又の夫をもふけなよぬしのある女の不義同然かならず〳〵」（十二頁）ねざめにも殿御大事をわする、な〕とけてうれしき雪のあさ
元ゆひの切てしまへばねもはもないが〔（白木や）そりや聞へませぬ才三様おまへとわたしが其中はきのふやけふのことかいなやしきに勤めた其内にふつと見そめてはづかしい恋のいろはをたもとから〕聞けばきくほどはらがたつ
すもふとりを男にもてば〕（十三頁）〔（千両幟）江戸長崎国々へゆかしやんすりや其跡の留守は猶さら女気の一人くよ〳〵物あんじ夫にけがのない様に祈る神さん仏さん妙見様へ精進も戻らしやんして顔見るまで〕片時やすまぬわたしの気

よしこの詩入

耳も聞へず目も疎なれば」（十四頁）〔（詩）高歌ノ一曲掩明鏡　昨日ノ少年今ノ白頭〕過ぎし昔がなつかしい
花の盛りも嵐のたとへ〔（詩）一年始テ有リ一年ノ春　百歳曾テ無シ百歳ノ人〕飲んであかさん今宵こそ
風のもと来る座敷の端歌〔燈ハ暗シ数行虞氏ノ涙　夜ハ深シ四面楚歌ノ声〕おもひある身の胸に釘」（十五頁）
たとへ如何なる苦労をしても〔花際徘徊ス双蛺蝶　池辺顧歩ス両鴛鴦〕はなれとむない主しのそば
金がなくなりや未練が残る〔君不ヤ見今人交態ノ薄キヲ　黄金用ヒ尽セハ還テ疎索スト〕先きの親切薄くなる
官の仰せと是非なく〳〵も〔帰舟明日昆陵ノ道　回首是白雲ト〕」（十六頁）無事に帰朝としめり声
初めア、して斯して斯ふと〔男子立テ、志ヲ出レバ郷関ヲ　学若シ不成死トモ不還ヘラ〕思ひし事も今はあた
思ひ初めしは五ツ年昔し〔願クハ作テ軽羅ト著ン細腰ニ　願クハ為テ明鏡ト分ン矯面ヲ〕今にかわらぬ胸のうち
知らぬ他国で苦労はすれど」（十七頁）〔郷国不知ラ何ノ処カ是ナル　雲山漫々使人愁〕もとをたゞせば主のため

いの部

いつも闇夜か恋てふ路はふんで迷わぬ人はない
一度いふたら二とない男わたしや産まずでさんもない
いやと頭をふうりんなれどなるもならぬも風しだい
いろにそまらぬ気はもみじ葉の空にうきなを龍田川」（十八頁）
いしの山々つもりしおもひはれてうれしき秋の月
いく夜ねざめに主をばおもひあわぬこゝろが須磨の浦
いきな柳にてまねきしられ月もしばしばかげによる
いつそ問ふかいや問ふまいかた、む羽織のさけのあと
色香にほへど嵐がふけば何処へちるやら里の花
一寸のさきもわからぬ恋路のやみは五分のゆだんもできわせぬ
いへばぢれるしいわねばつのる何処が意見のしどこやら
池の氷とわたしが心はる風わたればついとける」（十九頁）
色香ふくみしあやめの花も根（もと）をたゞせば水くさい
いろで押へりや香りでほこる雪と梅とのあだくらべ
一所になかやう暮していても擦りや火の出る早附木
言わず語らず語らず言わず実と実とのやみじあい
色にださぬが心の旨味呑んでみなんせこの新茶
いつそいわふと口まで出てもさげすまれうかと又だまる
いやなかやくを又きくらげで茶碗むしくしとぢるむね
いやな座敷で三味ひきあきりやばちであくびの蓋をする」（二十頁）

いつた一言あとへもひけずゑんまがほして聞くむしん
いろ〳〵話しのあげ足とるは手のないわたしをなかすきか
いつもかわらぬすげないおまへあんじさすのも程がある
意見きく程なほさかつのりおもひ切られぬ恋の意地
軍済して帰つて来ればまたも浮気で苦をさせる
軍商売する人もてば心の休まるひまは無い
言ふは恪気と堪忍袋縫て居るのも妻の義務
嫌な奴だと横目に睨みや惚れた何んぞと思やがる」（二十一頁）
い、たい誠は山々あれどいへばてくだと思はる、
意見の意の字をぶんせきすれば義理を立よと曰心
今の今まで大事にされて用が無なりや落し水
いつそきれたら気が安かろと言ふは迷ぬ人の事
云ひたい愚痴さへ顔見りや消へてとかく涙がさきにでる
色気はなれた墨絵の恋も薄いト濃いトの筆かげん
意見聞くたび身をもち直し花も浮気な枝を折る
色で気を揉む紺屋ぢや無がつめの先迄くろうする」（二十二頁）
否で起したしやくとも知らず宝丹出たる馬鹿な客
一度はさつぱり云ては見たがむすめぎ離ぬ此動気
いつぞ五臓のやまひがつのり夢で成とも顔見たい
今も今とて貴公（あなた）の噂さ抔とお世話を夕まぐれ
出雲の八代（やしろ）の奥印受ニヤ口で惚れたは当ならぬ
色目と思つた其目は藪でお門違ひの間の悪るさ
意気なお汝（まへ）にわしや厚くなり今じや勤も浮（うは）の空
一日なりとも夫婦（みようと）に成て世帯苦労が仕て見たい」（二十三頁）
色も香も有り抜目が無いと噂に影さす窓の梅
いきなはり弓矢さきがそれて鷺とからすのあてちがい
いふにいわれぬ私がこ、ろざんぎりあたまじやないけれど

ろノ部

六十二元素で固た体だ解てお前と合併（あはせ）たい
碌に文字さへ読めない癖に顔に八字の八字（はじ）をかく
ろも楫（かい）も浪にとられてわしや沖の船何処へ取りつく島もない」（二十四頁）
露路（ろじ）の細道くらがりまぎれ辿る心は恋の闇
論はないぞへ惚れたがまけよどんな無理なと云はしやんせ
六枚屏風を廻して置て中で二枚の舌津かふ
論より証拠だかゞみを御覧ぬしと此の子のかほかたち
ろれつまわらぬ其口さきでいやに気を廻す気障な客
廊下忍んで歩める女どふやら心を奥の間に
碌な思案の出んのも道理費（つかい）果した身のつまり」（二十五頁）

はノ部

晴てのみやろとは蝶花形よむすぶゑにしは妹背山
花は上野か眺は隅田月にふぜいはまつち山
はしたないよとさげすまれてもやかずにや居られぬ其浮気
春るの初（は）じめのあら玉娘め抱いて根松のメ小まつ
花の兄（あにき）が笑がほで来てもむつとして居るやなぎごし
春の雨夜はわたしの心あきの日よりはぬしのくせ」（二十六頁）
半分貸うと蒲団をおんに掛けた後からむぐりこむ
羽織を着せよと後へ廻りかけて出先をくろうする
花が浮世かうきよが花か散れば見返るひともない
始は人目で分れて居ても座敷が浮れりや傍へ寄
花よ能く聞け生（しやう）あるならば人の籬きになぜ開く
花も水あげできたと見へてふくむ笑顔にあいがつく
花のさかりはつ、むにあまる風のみだる、萩の露
晴てあふのは嬉しいけれど秋の月とは気にかゝる」（二十七頁）
晴れてあふ夜は最中の月よ隠す隈ないむねのうち
花につばめの気がつらかろと少し柳もつのめだつ
花の笑顔にツイ浮れきてじつとねぐらをしぬるとり
はらに身のない瓢箪さへも胸にく、りはつけておく
花は世上の愛敬ものよ野暮な人にも香を送くる
運ぶ梅が香アレいぢわるな中をたてきるがらすまど
羽織着たま、ついころびねのしはが恪気の種となる
晴れぬ此身の心をしらずさへる月夜は恋のやみ」（二十八頁）
はらはたてどもなくのをやめて笑じやうごとなろまいか
早く相たい添ひたい見たい堅たい御方に好かれたい

にノ部

苦いお前と顔しかめてもどうも止ないビール酒
莞爾わらふて指たる猪口を澄して返盃（かへす）は水臭い
二世はかはせど添夫迄（それまで）は世間へ気兼の身だのしみ
庭の木蔭に鳴止む蟬の木移りするのも気にかゝる」（二十九頁）
二世といふのはそりや気やすめよあすもわからぬ心ゆき
憎くいなかにも気やすめいふてだます気だけが実らしい
にくらしいよと横目で睨み可愛といふよなつめりやふ
二世とちぎりし男にやかねがないて他国にわかれゆく
二世かけて三味を枕のくさり縁ひくにひかれぬ撥あたり
二世とちぎりしおまへの前できれて気になる三の糸
二枚つこふた其一枚の舌はかへしたあとでだす
二度の首尾から始のうそがはづかしなつたおまへには」（三十頁）
莞爾わらふて見せたいとこを憚る人目にすましがほ
憎や人目のあつせい主義が恋の自由をさまたげる
二世や三世はそら扨ておいて当座そうさへむつかしい

ほノ部

程のよい言聴せて置て跡は沙汰なき時鳥
惚た同士はこゝろも空にのぼり詰たる軽気球
ほんにお前は庭木の小鳥止めて置たい枝に居る」（三十一頁）
ほんにお前は自惚強いナンデお髪に惚ましよふ
ほんにお前は思はせ振な来れば帰ると言が癖
ほんにお前は川辺の柳其日ノ〳〵の風まかせ
ほんにお前と夫婦と成て開た世界が渡りたい
ほんにお前は夜店の指わ女迷はす銀ながし
惚たわいなと少しのことがなぜに此様にいひにくひ
ほんのひようしに契りし縁もいくよかさねてともしらが
ほれていれどもまだ主さんの心しらねばあかされぬ」（三十二頁）
ほれられたのがお前のふしやううるさかどうともしておくれ
ほれ薬り何がよいかといもりに問へば佐渡のかなやま類なし
ほれて居るのは知ては居れどお気の毒だが御ことはり
ほれた謎をば三筋の糸にかけてとかせるしたごゝろ
惚れてほれられて猶ほれまして是より惚れよがあるものか
ほれずにほれてる顔して居るとほれぬにお客がほれてくる
ほども洋服小意気な客にわちきや洋袴（ズボン）と初会ぼれ
ほんにあかるい電気の火でも恋の闇路はてらされぬ」（三十三頁）
ほれたどうしと寒暖計はあつくなるほど上りつむ
仏顔して三度は居たがかさなる無心にモー閻魔
ほんにいやだよ夜あけの鐘と借りたお金と此気兼
惚た顔せず口へもださず外へ杯さすつらさ

へノ部

塀を乗り越し手を出す糸瓜他処で浮気の花咲かす
隔てられても心の奥はすけて見えすくよし障子」（三十四頁）
へるは身代ふへるは負債これぢやいかんと気がついた
糸瓜野郎が減法ふとり恩ある垣根をおしたをす
へちじやわたしはよつ程へちじや惚たお前は猶へちじや
変な顔して眺めていれば変な思ひがなを変んな
へちやな芸者も官的さんも同じ勤めの身の苦労
へちな男と軽蔑すれどへちな人程かねがある
下手な手前へもあいそとだせば薄い茶の湯も濃くたつ
隔てられては跳び立つ思ひ泣くになかれぬ籠の鳥」（三十五頁）

とノ部

燈火（ともしび）の暗く成のは出雲の神か但しや苦労の仕初か
遠ざかる程逢たい者を切て命が有ものか
届たはがきに名は無いけれどきがねして出る内の首尾
どうせ浮名の立うへからは封じぬ端書の文づかひ
土瓶はよいもの水をば注て落して毀（めつ）ても手はきれぬ
堂してよいやら立たり居たり顔に紅葉の新枕ら」（三十六頁）
となり座敷も千里の道もまゝにならねばおなじこと
鳥も心がすげなかく（ママ）わりやほんに想ひを桐のはな
泥にはまつてむかひがきてもかへるノ〳〵のつらにみづ
年は寄つても浮気はやまぬいろに期限の律はない
どろに住めども心は清く咲てうつくしかきつばた
とめたい思いが天までとゞき主しを返へさぬ今朝のあめ
どれか是れかと迷ができてたをりかねたるはなぼたん

遠ざかる程おもひがまさりあへば逢ふのでいやまさる」（三十七頁）
鳥はなくもの鐘やつくものよ主はいなずとよいものを
とめる今夜もいぬ気じやものを何のあすくる実があろ
どうぞこよひとよびだす手段わざと憎ふにかく手紙
とゞのつまりは傘一つ坊主頭もまるでわや
どうせ及ばぬ願じやなど、いふ中や思ひがまだあさい
とんとあがりし楷子（はしご）であたまあいたかつたと目になみだ

ちノ部」（三十八頁）

鳥渡（ちよつと）口説で背中と〳〵探る互ひの腹とはら
千話もおさめて口舌もやめてそつと親身の情くらべ
ちらりと格子へ出す顔みつけぬしを吸付たばこ盆
一寸一と筆染井のうわさ文のたよりできくのはな
地獄の婆と駅場（しくば）の女郎は仕に来るお人を待て居る
ちるはもとよりかねてのかくごあだにさかせし花じやもの
ちぎりかけてもあほほうづきはいろけないのでなりにくい
ちよつと顔見せまた雲がくれ主はわたしにあきの月」（三十九頁）
痴話はいつしか洋燈（ランプ）とともに消へて時計の音ばかり
散り易きものと心に合点はしても花の色香につい迷ふ
茶やの行燈にてふ〳〵が止まる元は菜の花（は）の種じやもの
花やの敷居がつい低くなればうちの敷居がふじの山
猪口〳〵あふ夜を一つにまとめ徳利はなしがしてみたい
ちよつと顔見てさしうつむいてほれたほの字を頬にだす
鳥渡上気で無理から突てじきにとまつとこまる羽根
千代もかわらぬ色とやいふてまつにほこゆるやどりぐさ」（四十頁）
千代に八千代のいろ香を込めて人に手折らす里の花
一寸つめりし其爪の傷痕（あと）きへぬ思ひの種となる
痴話が積りて起した癪を直す薬は主しが実

りノ部

恪気しながら小袖のしはをのばす火熨斗のあてこすり
恪気するのもためおもふゆへそれをしりつ、何のかの
理屈がましくをまへはいへど恪気するのが何よかろ」（四十一頁）
力身かへつてわちきも男恋の達引せにやならん
恪気一図で浮気だなぞと云ふたも今更間が悪るい
臨機応変手管の舵棒口の車を引き廻はす
恪気さんすが火のない火鉢誰も手を出す人はない
恪気しながら書いたるふみも筆に根をもつうらみごと
理屈づくでは行かない物は恋と情けと色の道

ぬノ部」（四十二頁）

主に貰ふた片身の写真寐間も放してなるものか
主はきつ、き嬉しい首尾をあけりや門口（とぐち）の枯柳
ぬしの心と夏売氷解ると解けぬが苦労する
ぬしは原告わたしは被告まはす屏風は判事役
ぬしは水素で私は酸素むすびあふたる水の縁
主とつながる鎖があれば赤い着物も厭やせぬ
ぬしの誓ひと流行のペンキ初め美事ではげ安い
主の下歯は私と極て止（やめ）てをくれよ喰散し」（四十三頁）
脱だ羽織を行燈にかけて人目つ、んだしのびあし
主のあとから都を退去恋は保安のほかにある
主は手くだで迷わすけれど妾（わた）しや実意で迷わせる
主の心の腐らぬ先に漬て置たやアルコール
主は画探（ゑさがし）私（わ）しや解当よ捜しあてたでとける中
主と聞よりわらはれ乍ら一ツまたぎの段ばしご
主から仕入た手管やペテン是からお客へ売附る
主の噂にのろける拍子吹殻吸ひ込むながぎせる」（四十四頁）
主と云れて急（せ）くつま先に花緒は無（なかつ）たたばこぼん
ぬしはうわきの田毎の月よどこへまことをうつすやら
主が貧すりやどんすの帯をまげて世帯のたしにする
主に惚れるの権利があれば実意つくすの義務がある
主しとわたしは藤の木そだちぬしがはなならわたしや蔓
主しを待乳と誰白鬚の逢ふてこ、ろも隅田川
主の木性を見抜いたからはあだや金性にや迷やせぬ
主わ上等わたしは下等人が中等で邪魔をする」（四十五頁）
主の心はわしや白雪のふるかふらぬか空だのみ
ぬしはしんなし画工の筆は色にさま〳〵染みやすい

主の実意は嬉しひけれどよそへもこふかと気がもめる
ぬれて色ます柳もけさはつらやもめだす風のわざ
ぬしと云ふ字をさかしに読んでしぬ気になつたも無理はない
主のこぬ夜は紙帳を釣つてさしこむ月さへいれわせぬ

るノ部」（四十六頁）

留守にした事かぎつけられて青い顔する木の芽味噌
流浪するのは承知の上よ浮気な主に添ふからは
留守居する身の心も知らでれんじよりさす月の影
留守と云へどもいつでも内よるすと云ふのは○（まる）がるす
類であつまる朋輩ゆへか惚気いふたり云われたり

をノ部

思通はす電信線のきれても未練で捨られぬ」（四十七頁）
親には反哺の孝あるくせに恋には不実な明烏
帯やしごきで七捲半にまいてやりたや明の鐘
思ひ思ふて思ふて出来て猶も思ひを増す思ひ
おいたいなされとおふしやるけれど恋がお俊で伝兵衛さん
鴛鴦の衾をかさねて居れば明のからすが引わくる
お金減らしたやすりの罪か何んの因果に目が潰れ
思ひ過して寝もせぬ夜半にきざな月だよ笑顔
おらが女房をほめるぢや無が能（よく）も写た此写真」（四十八頁）
思過せばなほ杉酒や飲なジヤなけれどみわ大事
思ひ出すよおまへの不実他人のやさしさ聞につけ
お礼参りを是見よがしに二人てに手をとりゐさき
遅い返りの弁語をすましや届く手がみが告訴する
親の異見も尤ともなれど思案の外なら是非もない
思ひ直してひきだす三味の糸が切れても又ふさぐ
思ひ紛れとつめびきしても葉歌の文句で又ふさぐ
恩をあだゆめ結だあとで見ぬと思へもよく出来た」（四十九頁）
思ふ妾（わたし）に思はぬお前おもわせうとは此地（こち）の無理
お顔が見へてもお声が洩ぬ自烈多（じれつた）硝子の障子窓
お忘れ物かと云ては見たが実は未練で止たそで
沖のかもめがなくのも道理みづにあわずにいられやふか
及ばぬ恋路と諦めながら蟻のおもひも天とやら
想ひありあけ気は播磨潟あかしかねてはなく千鳥
思ふ恨みは皆夕立よはれて涼しき胸のうち
親の裁判不服ぢやないが自由結婚してみたい」（五十頁）
逢ふたばかりで心がすまば酒飲や樽見てよふであろ
大きな声だよ静におしよ主にやしれぬか靴の音
お客に高下の隔てはないが好きと嫌ひの別がある
思ひきります諦めますと詫ぶるあとから出るのろけ
おぎのうは風身にしみ〳〵としばしおもひのそでしぐれ
おもふ一筋とげない故へにつらい三筋の家業する
おともせるのに障子をあけていれてよろこぶなつの風
おもひ込んだは此身のそゝふ聞けば主あるあなたをば」（五十一頁）
おもひ〳〵の思ひをとげて思ひつくせぬ苦労する
おまへある故へうちじゆの人にいふにいわれぬきがねする
おもふとほりにゆかないうちが恋のまことの情くらべ
おくる文さへ見もせであとはすかぬ屑屋の目にかける
お顔三つ櫛今更それとわけていわれぬもつれ髪
おやにうとまれ辛苦はすれど爰がみさほのたてどころ
思ひ込んだるわしや蔦かづらたとへきれても根はのこる
おまへさだめてすげない者と思はしやんしよがまゝならぬ」（五十二頁）
おまへが酸素で私が水素外に燐素がなけりや能い
おかど通れどまだしめのうちかどに青々まつばかり
逢ふは別れの初めとしれどおもいすごして此苦労
想ひ焦れて火鉢にもたれ独りごといふて笑われた
尾上づかゑのおはつじやないがからすなきさへ気にかゝる
逢ふて嬉しき笑ひもいつか朝はなみだの種となる
おもふ心もさわべの蛍みづにてらされ夜をあかす
逢ふて居てさへ届かぬ言葉文で書かれるはづはない」（五十三頁）
おまへの浮気をしりつゝほれて恪気するのもぬしのため
思ひ切戸に錠まいおろしうわきに散らさぬ梅のはな
怒り顔して睨んでいれどとけてくだくる雪達磨
逢ふていほふかあわずにおこかこゝが思案のおきどころ

わノ部

わたしやぬし故ぬしや私しゆゑなれぬ世帯に苦労する
妾（わたし）の心に切ない義理が有も知らずに無理ばかり」（五十四頁）
わかれに着せとる羽織の紋も影と日向とあるこひ路
別れのつらさに鳴帯よりも忘れシヤンすな煙草入
別れに汚したなみだの顔を一寸直して出る座しき
私しやお汝（まへ）に首丈け焦（ほれ）た疑（うそ）なら手付に丈長（せのび）する
わしとおまへはくづやの屋根よかわらないのでついぬれた
わたしの心に錠まへおろしかぎはおまへのむねしだい
わしも今までまつてはいたが時節までとはあんまりじや
私しや野に咲く気ま、の花よ園のながめははづかしい」（五十五頁）
わけもないのにわけあるやうに言われりやぎりでもせにやならん
わしが心のさへたる月をうつすおまへの濁りみづ
わたしやいやだよ墨絵のかけじいろもないのに床にいる
わしが思ひは空飛ぶ鳥で目には見へてもま、ならぬ
わたりかけてはあやうくおもふ藤のはしより縁のはし
わけもかたらず唯だしぬけにゑんを切れとは何事じや
わけを聞たらわたしもさほどあいそづかしはいわぬもの
妾（わた）しの心の狂ふた故に主に苦労を掛け時計」（五十六頁）
わしとおまへはおく山ぼたんさいていれども人しらず
わずかひと夜に気があらたまりしんにうれしい初だより
妾（わた）しや自転車ぬしをば乗せて軽く世帯をまわしたい
わびてまつ夜にふけゆく鐘に乱れてふしの二絃琴
妾しの意見を徳利と聞いて皿りと浮気を止めにしな
私しや横根でさつぱりひまじや漢楚軍談聞きにゆこ
妾しや根〆を極めては居れど主しは浮気の本調子」（五十七頁）

かノ部

風もふかぬにアレ見やしやんせ浮たこ、ろの軽気球
帰り支度の乙鳥（つばめ）にかへて初会馴染の雁のふみ
籠に飼れてなく虫よりも妾しや気侭の野の蛍
斯（かう）と知ずに犬骨折し鷹の餌食（ゑじき）に見かへられ
疳の強は妾の持病入ぬ留立置しやんせ（地質（ぢがね）ダヨ）
固ゐようでも油だんはならぬ解て流る、雪だるま」（五十八頁）
堅ひ同士のすれ合中に燃ゆる火打の石と金
飾る花壇の究屈よりも私しや野ぎくの乱ざき
風の模様の変るをおもやうか〳〵乗られぬ軽気球
神代このかたかはらぬものは水のながれと恋のみち
風の便りは古昔（むかし）の事よ今は手ばやい伝信機
寒暖計にも度があるものを過ちやいけない夜の業
かくしだてする雲なき月にうちとけ話しも更るねや
川い〳〵と云つたる末が川へ二人で身をしづめ」（五十九頁）
顔に桜をオンノリ出してソンナラ貴郎（あなた）と云つたぎり
片頬につこり笑を含む梅はほんとにつみつくり
かねと烏を被告にとりてこひぢの妨害告訴する
書ば切れると思へば愚痴に未練留る筆の先
堅く糊して人目を封じ心のこま〳〵はしりがき
帰りなますかお名残おしや又も逢夜の首尾の松
可愛けりやこそ悪くさも増さる風の中にも咲くさくら
堅い氷も春ふく風に遇へばそろ〳〵とけか、る」（六十頁）
可愛〳〵と夜の目もあわぬもとは他人でありながら
かものあしほど短い夜半もぬしを待つ夜はつるの頸
かたくつもりし深山の雪もとけりやふこなる谷川の水
門を叩くは旦那の声とあけりや間夫めが作り声
堅いやうでも解けやすいのは春の小雪としゆすの帯
堅い中でもあれあの砥石義理の手強く引きわける
かねはなくなるみれんは残るさきの親切うすくなる
垣にまとひしあさがほさへも其日〳〵の花の色」（六十一頁）
蔭ぢや惚気で笑はれ乍ら逢へばいやみやぐちばかり
かみそりのさきは切れても手もとは残る最一度あわして下さんせ
可愛てたまらぬ妾（わ）しやあふて見りやにくい怨みはありながら
かたくつないだ心のこまもさとの桜にや乱（くる）ひがち
堅い餅でも油断はならぬ毛が生へかくると割れてくる
帰る男をついとめかねて鳴たからすに愚痴をいふ
髪ははら〳〵ねまきのま、でおくる廊下のみじかさわ

帰へる風して羽織を着ればとめる風してベロリ舌」（六十二頁）
堅くちかひをするそれまではむねをはなれぬ此苦労
可愛いとしの其むつごとも一夜ぎりなる里の花
蚊帳で首尾さすかみなりさんは出雲のそらより鳴つてくる
鐘に怨みは数々ムる火事の半鐘に暁の鐘

よノ部

夜の仕事がつゐ過ぎたので飲にや成まい牛の乳
宵にや程よく受ては居ど朝は凋（しほ）る、雪の竹」（六十三頁）
宵に見さした残りの夢も見に嬉い夜を明す
横にはふよなあの蟹さへもよしとあしとはわけてでる
欲で馴染だ身がはづかしいかふして意気地を立てみりや
よそでうきながたつよこじまもとけて嬉しふあい弁慶
夜半の手枕つい其ま、にさめてぼんやり主のゆめ
夜毎かよへば目にたつ浪の人がうき名を夕千鳥
夜毎日毎に枕は換へど君への操はかへはせぬ
よひにやすげないあのむしの音もふけりやまことをなきあかす」（六十四頁）
洋服姿はよく似て居れど能く見りやそでない検査医者
寄辺さだめぬわしや浮草でどこではなをば咲かすやら
様子聞かねばおはらも立とが是にはだん〳〵ふかい訳
よいにやはれたるたがいのむねをまたもくもらすあけの鐘
読ぬお前の気の横文字を引てさとれば英和字書
宵にや降つても流れの水もすまぬ気を持つ朝の色
よもや人目に悟られまいといふてさしたる紛（まが）へ櫛」（六十五頁）

たノ部

倒（たふれ）掛つた親父の家を娘ころんで引おこし
互に人目は忍んで見たが他（ひと）の耳には戸が立ぬ
たまに逢ふ夜は誓を立て折て数へし指を切
立た誓紙が皆仇事となりしいすかの鳥の跡
偶（たま）にや保養とこらへて居れば主はい、気で内を外
単すの引出を背中でおさへ怪い出先きを問たゞす」（六十六頁）
たつた一夜のなさけの雨で開きましたよ梅の花
郵便（たより）が届いてやれ嬉しいと読ばいつもの無心状
頼む赤縄（えにし）の糸目がきれて落つくとこにも迷ふ凧
手折る桜も蕾がはなよひらきやあらしにさそはれる
たまに逢ふ夜と天道さまも粋をきかして今朝の雪
種まかぬ岩に松さへはへるじやないか添ふにそはれぬ事はない
立つた浮名が消へない内は減多に浮気ヤやめわせぬ
他人に漏らせぬ事あかされて苦にはしながら落ついた」（六十七頁）
狸寐する気で真（ほんと）に寐込や何時の間にやら夜がふけた
たとへあらしがよしあるとてもよそへかほるな庭の梅
だますだまさぬ唯客しだいうそとまことの二瀬川
高い低いのしあんがあろか命をすて、もこすびやうぶ
高ふとまりしあのはねさへも今はおもひの風に落ち
たつた二つの笑凹に嵌まり今じや諸方に穴だらけ
だますくせなどモーやめさんせ浮気はおまへのうまれつき」（六十八頁）

れノ部

恋慕するのは自由の権よ恋の法律ありはせぬ
蓮は泥水妾（わた）しは苦海同じ流で花咲かす
礼儀くづさずしかつめらしくされていや増す恋の意地
礼もいはふし話しもしたしそして聞たい主しの胸
れんじさし込む月影よりも妾（わた）しや見たいよ主しの影
烈火の様なる心のほむら主しに逢のが消火水」（六十九頁）

そノ部

束ばくされよとこうなりや侭よどうせ人目の関破り
袖に止（とまり）し此梅が香は東風の便りか今朝の春
そんなに恨を言ないものよ家でやく程持はせぬ
そんなに恨を言ない物よふかれて帰る晩もある
ぞツと身に染むあの恋風がついに風邪（ふうじや）の根（もと）と成
十露盤に肱をもたして返事をしなと末をかけてぞ割くどき」（七十頁）
添へぬ積りで実つくさりよかすへの見とめがつかぬかて
底の分からぬ千尋の海へあだに碇は卸しやせん
誹る者ありや賞者（ほめて）もムる其処で物には裏表
添ふての苦労は承知で居れど添わぬ先きから此苦労
袖に涙の露置き初めて思ひます穂のしげ薄

相場したのが不覚のもとで米に辷（しんにう）かけた今
そつと裏から返したけれど下駄が気になる雪の朝」（七十一頁）

つノ部

つれない心も初手から知れどかはりやすいも程がある
月も流石に御存（ごぞんじ）ないは恋の闇路の三十日事
つゆにぬれたる此袖褄は君とねの日の小松ひき
強い煙草もおまへの手から附て出れりや弱くなる
月夜烏でおきやくを帰（かへし）間夫はほんとのあさかへす
つらい苦界も浮気の友とのろけ談話（はなし）が憂はらし」（七十二頁）
月待ふりして主呼いれて月影ア雨戸の外へだす
月にちらりと姿を見とめ忘れかねたるほと、ぎす
蔦かづらからみつきとてそこらを眺めさきにきがなきや是非が無
露のなさけを身にうけそめてけさはしほる、萩の枝
つらひ勤めも小春じやないがまことは辛抱一つぞや
辛らひしんぼも皆ぬしゆへと思へば何も苦にやならん
つらや此身は荒神松よいつもけむたい中にたつ
月も朧にいとやさしげにしほれいる身の川柳」（七十三頁）
月に四五度の日曜はあれど妾（わた）しや臨時の休暇待つ
露をふくみてうつむく花に機嫌なをせとさわる蝶
妻となつたら悋気をやめてあたま丸髷（まるわげ）はり仕事
つらひ意見の其中さへも主しの名が出りや忍びなき
積る恋路の海山こしてとけて嬉しき雪のあさ
月の光りで読む此文を亦も邪魔する通り雲
月夜烏と止めては見たが虚言のつけない明けの鐘」（七十四頁）

ねノ部

根も葉も無事輪に輪を掛て本にお前は人いじめ
ねがほに見とれて首尾あんじつ、あけきる今まで起しかね
塒さだめぬわしや杜鵑（ほと、ぎす）主しをねぐらに定めたい
ねごとのあまりにのろ気をいふてまだ眼がさめぬとわらはれた
寝ればつん〳〵座れば無心立ば後で舌をだし
ねがひ叶ふて二人で住めば野でも山でも都のおもひ」（七十五頁）
寝覚めわびしき此暁きの雁の便りは空頼み
眠むる柳に心をかけてヒソ〳〵燕がゆりおこす

なノ部

啼てお客に貰つた金は嘘のなみだのこぼれ福
情けご、ろの種さへ蒔けば何時か真事（まこと）の花がさく
泣てお客に貰つた金でけふは笑つてぬしを呼
何かするかと寝たふりすれば舌を出したり笑たり」（七十六頁）
夏は痩せると想ふていれど話しや涙の種となる
長き赤縄（ゑにし）と想ふているに切れて本意なき凧のいと
何が何でも何とかすれば何が何かになるであろ
鈍（なまく）ら鋼のわしや三目ぎりきばかりもんでもあきはせぬ
なにやわからぬ夫婦の喧嘩何やわからぬなかなをり
何で世界の宝であらふ好な男を嫌ふ貨幣（かね）
何の因果で妾しや此様に浮気なおまへを好たやら
何を何して何して何と何で固めた内証ふみ」（七十七頁）
泣てはがした化粧をなをし花にでるのも主しのため
靡く心の柳を捨て、水にうつりし月のかげ
何をくよ〳〵川ばた柳水の流を見てくらす

らノ部

楽は苦の種あぶらはなたね主の浮気はしやくの種
ラムネ飲んでもつかへは癒へぬ何が何でも顔見ねば
楽で気楽で気楽で楽で喜楽安楽つらくない」（七十八頁）
埒もあかない返事の便り床に寝て待つ夜の長さ
蘭や万年青は上品なれど金になろとはおもとらん
楽をするのは苦労が資本（もとで）今の苦労は後の楽
羅生門より三十日の鬼が憎くや金札とりにくる
羅針盤さへ偏差で乱（くる）ひ自差で或時や又乱ふ

むノ部

無理な願ひもおまへに添ふて夫婦なかよく、らしたさ」（七十九頁）
胸の蒸気のつい燃（もへ）過ていつも航海する苦労
無理を聞のは苦に成ねどもそのやさしさが憎らしい
胸も波うつ嬉しさかくしかほへたもとの屏風岩
梅にや鶯竹にはすゞめわたしやあなたの首尾を松

向ふ見（みず）でも主より外に余所を見眼は無わいな
梅に鶯やなぎに蹴まり猫となまずは離れない
無理止さる、も覚が有う皆なふじつなめしのばち
無情悟つた経読みとりもいろ香に迷ふてうめになく」（八十頁）
梅や桜の派手をば真似ずじみでいろづく柳ごし
無理が叶ふた恋路と思や恨もひけ目で云ひ兼る
胸に手をあて思案をすればあだな人ほど実がない
無理を言ふたが妾しが無理か無理を言わる、主が無理
無理な縁をば結んで今はほんに妾も苦の世界
昔は眉毛を造つた鍋炭（すみ）が今も手筋に染む世帯
胸に焚火で涙を洗じ癪に呑まして居るつらさ
虫が好いたかおまへのうそを実にしてまで嬉しとは」（八十一頁）
無闇矢鱈に調子に乗せりや調子はづして大浮れ

うノ部

浮気に跳（は）ね出し硯の海へ身をば投げたる粋（すい）な蚤
嘘じゃ〳〵と云ふ其嘘の嘘の中にもある誠
放心（うか）と大事の話は出来ぬ細ひ針にも耳が有
海路（うみぢ）陸路（おかぢ）は開けたけれど恋路になぜない伝信機
嬉しなみだにおしろい剥（おち）て素顔見らる、恥かしさ」（八十二頁）
嬉し涙でおしろい解しぬしを待つ夜のうす化粧
団扇づかいもお客によりて煽ぎ出すのと招くのと
虚誕（うそ）ぢやおかんせ其手はくわぬ騙し文句にや懲りたもの
植た花より物いふ花を手折にで、来る浮れ客
嬉しヱレキにツイ蒸気して何と言葉も電信機
内の小指と妾（わし）やいわたが切つた小指もはれにたつ
うれしゆ遇夜に留めたいものは時計と烏とぬしの袖
嬉し今宵は鶯宿梅か闇夜にあやしく香る梅」（八十三頁）
浮気でさんすと知りつ、惚れて今更不実を怨む気に
歌ふて悲しいお客をかへし泣て嬉しい主を待つ
疑ふ心はみじんもないがどうも実と想はれぬ
浮気するのが男の性か昔しにかわらぬ二心
内の兄さん痟癪（かんそ）と疝癪（ひぜん）母と妹はこせ疝癪
己惚（うぬぼれ）お客に貰ふた猪口を色は思案の外へさす
馬の足する俳優（やくしや）に惚れて何日（いつ）も貧々せめられる」（八十四頁）

のノ部

のぼる便りの電信柱にくや地震がゆり倒す
望みある故へ便りはせねど何の忘れふ片時も
野辺の千草をかり寐の床と露のなさけにや宿る月
飲ぬさけから顔赤らめて一寸阿方（あなた）と想ひざし
野辺の若菜に戯むる蝶を見ては勤めの身をかこつ
蚤で寝られぬなど云ひ寄るは思ふ所をか、せたさ」（八十五頁）
昇り詰たる恋故へ私しや降（くだ）らぬ事まで苦労する
蚤にや攻められ彼奴（きやつ）には振られ覚めて仕舞ふた恋と酒
野辺の千草と仮寐の床の恋ひの情けに迷ふ蝶
残り肴をひきずり込んで猫や狐のあばれ喰ひ
登りつめたる惚気（のろけ）の文はいつも下らぬ事ばかり

くノ部

口先ばかりで腹へは入らぬ主のうは気はまき烟草」（八十六頁）
曇がちなるおまへの胸も晴れて嬉しの森の月
狂ふ磁石とうはきな主はどこが北やら南やら
口ぜつの泡雪いつしか解けて庭ににつこり梅の花
来るも玉突（たまさか）邪見なお前なんで無法に八ツ当り
くもるこ、ろもいつしか晴天（はれて）まねく柳の月のかげ
雲にかけはし霞に千鳥およばぬ恋路で苦ろうする
苦労するのもかくごの前サ意気な男を持からは
来ると詞の主しや尻からげ惚れた足もと知りながら」（八十七頁）
釘のきかぬも尤も至極さきは豆腐屋のむすこどの
乱（くる）ふ時計を直しに遣ればむこの老爺（おやぢ）はチンをとる
靴の音すりや主かと思ひ袖ない人かて気にか、る
久留米飛白に久留米の羽織白いへこ帯しめて来る
化学試験で分析しても別り兼るはぬしの胸
曇る思ひが胸一ぱいになつて堪へぬ夕しぐれ
口に水仙椿を入れて笑顔して見る床の梅」（八十八頁）

やノ部

やけて燃たつわたしの胸はぬしのポンプでつい湿る
約束の時計なれども音さへせぬは主の心が狂ひしか
約束かためし今度の休暇臨時御用が気にかゝる
やがて落葉のもみぢと知りて色に迷ひの風が吹く
野暮な妾（わたし）かちやら〳〵いふていらぬ浮名の気の毒さ
野暮な手段と野暮なは承知野暮な私にや是非がない」（八十九頁）
山家育ちの身を恥らいて口にや夫れともいはつゝじ
やがてあゝして斯（かふ）してあゝと心積りも水の泡
やつと首尾して来た其甲斐もなさけ知らずの空寝入
野暮なお客に限つてあるは金と悋気と床急ぎ
山で切る木は沢山あれど思ひ切る木は更にない
闇も月夜も厭はず通ひ思ひはらした猫の恋
野暮がやつぱり妾にや薬粋な主ゆへ身を責める」（九十頁）

まノ部

松と云ふ字は好る、筈よ公と木との差向ひ
儘になるなら博覧会へお前の手管が並べたい
ま、になるなら虎烈剌を病んで悪いお前にうつしたい
儘よ〳〵で線香たてりや家のくらしがたてかねる
招く柳の姿にまよひ笑ひそめたる梅の花
巻て結んだ捕縛の紐が切れて割腹する財布」（九十一頁）
枕屏風を人目の小楯ぬしの夜討をまつてゐる
招きや魂さへ帰て来るをなぜに返さぬ貸しこがね
迷（まよふ）烏羽玉恋路の闇を照すランプはなぜできぬ
儘になるならつい此儘で旭さす迄寐て見たい
間夫の手紙の書損なひをきやくへ其儘間にあはせ
待てど来ぬ夜のうらみの数と数へ競る明のかね
儘に成ない浮世と云へど否やな奴ほどかねがある
枕より外しらないものとおもへば出て居る新聞紙」（九十二頁）
誠一ツの二人が中も痴話の手管にやうそも云ふ
儘に成らぬが浮世のならひ飯（まゝ）に成のは米ばかり
ま、にならぬが浮世のならひ辛抱する木に花がさく
まねくおばなをすげなく見すてどこへきをせく秋の月
前で結んだまち高袴なかを隔てるものがある
誠尽くすも手管の一つ切れちやならない金の蔓
待てば甘露の日和といへど主しが来ぬ故へ雨が降る
待ど来ぬ夜はかたぶく月にかこち顔なる我がなみだ」（九十三頁）
またの逢ふ瀬と契りて返しあとで指おる其長さ
松と云ふ字を分析すれば公と木とのさし向ひ
俎（まないた）の上にのせられ切らりよとま、よびくともせぬのが鯉の意地

けノ部

今日か明日かと待つたる花も咲けば苦になる雨と風
今日も今日とて噂さをしたよなど、手管の口車
けふは他人でない身となつて嬉し真実聞始じめ」（九十四頁）
今日は来る日と西又東北かしらんと又南
けふは泣くにも癪おこすにもよひの意気張りとけぬまは
権利思想の蕾が割れりや政治思想の花が咲く
顕微鏡でも見へない物は明日の相場と主のむね
けさもけさ迚小袖の皺をのばす火斗（ひのし）の当こすり
芸妓娼妓と画工（ゑかき）の皿は人の知らない色がある

ふノ部

文を引きさき丸めて嚙で恨みも奥歯の内で云ふ
二人並んで写した写真切ても未練で捨られぬ
舟と棹とを持ないならば浮た世界は渡れまい
深い思ひを硯の海の浪に兎の毛の走り書
降ばふれかし一度は降て跡は涼しき夏のあめ
深ひ思ひに浅瀬が有りて主の心の見ゆる底
不破に知れてせき来る涙胸の板屋を漏る雨
冬の支度か何れの山も木々は錦の織くらべ」（九十六頁）
二人手をとり人目をしのび荻の声にも気をくばり
不意に変た俄の風に切れてくやしいたこの糸
二人裸で手をさし込んでグツトだき付花ずもう
二人しのぶを空ふく風で雲にかくれる粋なつき
夫婦喧嘩と三日月さんはいつの間にやら円くなる
文明開化とひらけてみても恋の闇路は矢張闇夜（やみ）

深き実意を人目に隠くし恋の秘密かきよくがない
不実する気は少しもないが何をいふにも親が、り」（九十七頁）
二つ星さへ年には一度妾（わし）の逢へぬもむりはない
ふられながらも未（まだ）気が付かず懲りず出て来る野暮な客
物理学をば極めた上で花街（さと）の習慣気孔性
ふつと思ひし思ひが増して思ひきられぬ物思ひ

こノ部

恋の議院を出雲へ立て色の会議がしてほしい
恋の闇路にさ迷ふ私し晴て逢とはこちの無理」（九十八頁）
濃も薄もみなその客の実とふじつに染るいろ
こぼれ松葉をあれ見やしやんせかれて落ても夫婦づれ
是が嘘なら嘘にもさんせ神の無世じや有まいし
恋にこがれるあの梅が枝に色よい初音を聞せたい
こがれて居るのにアラマアにくい余所へそれたか夏の雨
恋の暗（やみ）から袖引留めて是れは真平人ちがひ
声をき、つけ出れや郭公アレといふ間も泣わかれ
恋の関守通ふは幾夜いつか首尾して淡路島」（九十九頁）
恋の闇路に月日を送りいまは晴れての夫婦なり
恋の路しば踏わけ見れば義理と情の蔦かづら
恋のころものほころび口を母の異見の仕つけばり
心有やこそこづゑの花も散てながる、隅田のみづ
胡蝶と狂た菜種の果もしめてあぶらをしぼられる
声も聞きたし姿も見たし、のぶ格子のうちとそと
子まで有中ひきわけられて疲（やつ）れ果たよほしづいき
恋の初瀬のつぼみの桜いつか夜露にほころびる」（百頁）
濃いと薄いは手管の筆で自由自在にかきわける
是さ能（よい）から涙をふきな人に見られちや間が悪い
焦（こがれ）た男に途中で出合をつに見て見ぬふりをする
心ある目で眺める時は同じ月にも色が増す
更て帰るは夜露が毒と留めるお世辞が真の毒
焦れて待つ身にハイ郵便とだされて嬉しい胸さわぎ
是は妾しの替紋なぞと虚誕を指環のかげのろけ
こわした島田の嬉しい首尾を書きあげられたる新聞紙」（百一頁）
焦れ暮すを御ぞんじなふて物をも言はずすまぬ顔
恋に乱した島田の髷を解ひて浮名を洗ひ髪
こちのしうとめさんに着せたひ着物盲小紋に聾縞
恋と云ふ字を分析すれば糸し糸しと言ふ心
心に嬉しい首尾したとても笑顔で帰せる朝はない
恋の小田巻情けの糸目義理にひかれてうごく凧
焦れ〳〵て燃へたつ胸にや主しに逢のが消火水
斯（こふ）すりや斯して斯なる事と知りつ、斯して斯ふなつた」（百二頁）
転んで苦労は覚悟の前サつまづく石さへ縁のはし

ゑノ部

酔へば浮かれて外八文字色香で迷はすおいらん酒
ゑりに顔いれ何にも言わず泣て男の胸にくぎ
縁のこよりを出雲の棚で若しや鼠が引たのか
泳気鐘でも検査は出来ぬ浅いか深いか恋の淵
縁は奇なものあじなもの独活がさしみの妻となる」（百三頁）
笑顔で逢ひし嬉しい首尾も朝は別る、忍び泣き
笑顔で勤める二人のお客何方（どちら）へ落つるか此眉毛
縁を切れなぞは昔しの事よ今更きられる義理はない
笑顔見せたる花さへ今朝は露を含んでしめり顔
縁を結ぶも切るのも筆の心一つの命毛で

てノ部

手枕さしかへ顔見あはせてあとは行司のなゐ角力」（百四頁）
銚子片手にこぼれる愛もこぼさぬおしやくの注ぎ上手
手紙見た迚顔見なければ夢で見た方がまだましか
照らす心で居るのが憎い硝子障子の窓の月
手管とさとつちや先づ夫れまでよ知らずに通つた内が花
手ふき紙からふともめ出して事の破れとなりし文
手鍋提げても添はねばならぬ言ふた言葉は違やせん
出きた昔を考へ見れば否（い）やに成られた義理はない
出きた様だと心で察し尻へ手を遣る燗徳利」（百五頁）
手鍋さげても地獄の釜も主と添ふなら何のその

天気予報の測候所も晴れて添ふ日はわかるまい

あノ部

秋が来たとて立波風にあらい仕打のやぶれ蓮
朝夕苦労の其甲斐見えて笑顔吹出すわた畑
逢た夜は転る地球を暫くとめて積るはなしがして見たい
秋とおもへぬ夜の短かさよ日の出ぬ世界が有ばよい」（百六頁）
雨が取もつ相合傘に柄漏りの雫でぬるゝ恋
逢て心ろを妾や古傘に骨も見へすく恋病ひ
逢へば斯まで嬉しい者を何の異見が耳に入
アレサお待よ往（ゆか）れちや困る留て置たい雲の足
秋の長夜も口説と千話で夢もむすばず明の鐘
明石かねては音になく千鳥とくも逢ねば須磨の浦
逢てはなせばくろうの種よ逢なきや焦（こがれ）て猶くろう
あきが来たのでわしや捨扇風のたよりも更にない」（百七頁）
あいと返辞をする緋鹿子のえりへ摺込むあかい顔
あへば互にたゞぼうぜんとはなし残してあとくやみ
あやめを菖蒲と言たが無理か場合で亭主を兄と呼
朝の帰にむきみで呑めばばかゞ一人と茶屋でいふ
逢ぬ其日は留守する気でも矢張未練でおもひだす
あんな男に惚ると云は我身で我身が分りやせぬ
秋の扇とすて、はあれど恋の要はゆるみやせん
逢いたい見たいの苦労が止めば世帯始めの此苦労」（百八頁）
雨にしつぽり色気を見せて花も紐もとくしたご、ろ
あきらめましたよどうあきらめたあきらめられぬとあきらめた
雨が取りもつ相乗車母衣をおろして袖と袖
あんまりつれない気強い別れ世間の義理さへすてた身に
逢わぬ夜毎に枕の塵が積る口説の山となる
愛想づかしで帰した跡で又の逢ふ夜をまつ辛らさ
あれさお起よ其手は古ひ烟管の雁首ものを言ふ
あだにさいたるあの朝顔も末はくろうの種となる」（百九頁）
あれさおよしよ好ないお客するにも大抵ほどがある
あんじも明日から薄らぐやうに思ふ今宵の話しから
あきもあかれもせぬ中なれど人の口ゆへ遠ざかる
愛敬ものよと言われて見てもすねて見たいはぬしのそば
あくまで伸して延びたる果ては鼻毛の筆やをするつもり
逢ふて話せば皆実らしく思案して見りや嘘らしい
逢ぬ其夜は月夜も闇夜逢へば闇でも気がはれる」（百十頁）

さノ部

先が切れたか心の箒はけぬ此身の塵のかず
財布の底まではたいたあげくおと、ひ来とは情無
酒の上迚余りの無理をジット見詰めて目になみだ
三年卒業してからぬしと晴て添寝を駿河冨士
さけと煙草といつしか飲めば思ひ出したり忘れたり
酒は狂水少しく飲めば直に銚子が乱（くる）いだす」（百十一頁）
さきからも円く出るのに何私しぢやとて角に出やせん窓の月
盛り待たずに蕾の梅にとまる小鳥も香に迷ひ
三味線（しやみ）を引手で肌着を縫ふて着せる世帯はいつであろ
さほどおまへに実あるならば愛想づかしも程がある
三味に木魚は芸奴（げいこ）とお寺線香たてれば金に成る
酒と女は敵と知つて居ても亦喰ふ欺し討ち
躁（さは）ぐ座敷と静かな座敷簾掛けたりはづしたり」（百十二頁）

きノ部

来たときの報（しらせ）に飛立思ひかくせど笑顔が承知せぬ
義理と云ふ字は恋路の妨（じやま）と無理を云のもお前故
金の時計が見当（めあて）ぢやものを襟に附のは知た事
君のゑくぼについはまり込僕の内輪はあなだらけ
君は非の字でまだしもよいが僕は世間へ面かぶり
聞ぬ振して振して聴て聴て聞ぬも気が知ぬ」（百十三頁）
客と間夫とを秤にもつて実と手管を掛分る
義理も情も甘もすいも知つて浮気は廓（さと）のくせ
聞た異見も尻から抜て屁とも思はぬ惚た同士
義理が無なら今此夜中主をどうして帰さりやう
客と寐る夜も冗（むだ）には成ぬ間夫と苦ぜつの種作（つくる）
気障のさかづき取手がはづれこぼれ幸いむねの中（うち）

義理やゐけんで断念（あきらめ）らりよか命とかいな入黒子（ぼくろ）
きまりが悪いの恥かしなど、みゑを為（する）中（うち）や人も花」（百十四頁）
きみは吉野の千本ざくら色香はよけれどきが多い
気障の額に止つた皺蚊わざと大きくはりたほす
気を引お汝（まへ）の其手は古いいつそ斯蛇（かうじや）と云しやんせ
義理と世間ト人目がなけりや放してたゞ置人蛇無（じやない）
客から金取又間夫へやる銀行事務だとおもやよい
きつ度ダマスと羽織をきせりや胸に承知ト結ぶ紐
聞ばいつでもかはりは無（なき）が噂きく度気がもめる
聞はいやだよ磐梯山と親の意見とあけのかね」（百十五頁）
切（きれ）てしまへと未練が残り根をにつながる三の糸
聞けば聞くほど涙の種よ亦も聞かすかいやがらし
気障な人だと口には言へどあいと返事も○（まる）しだい
義理や世間と云ふ様じやあさい深くなるほど無分別
義理をわけてのしんみの意見添ふにそはれぬふがいなさ
気強ふ言ふたりすげなくいふも後ちに逢をとの口説種
きれりや他人と鳴海の千鳥遠く離れて鳴ている
君にや粟津のつれない恋路妾（わた）しや堅田のかたおもひ」（百十六頁）
義理も糸瓜も犢鼻褌さへも主故へ今ではない私たし
君に恋てふ主権があれば行政司法はしよがない
気障なお客と井に涌く水は金気なくなりや茶にせらる
京も田舎も支那西洋も弱身のあるのは惚た方

ゆノ部

行先いわずに出せとの羽織明る簞笥の重いこと
ゆうて見やうかゆはずにおこか娘思案の束髪（たばねがみ）」（百十七頁）
指を切るのは昔の洒落よ今ぢや指輪の比翼紋
行つ戻つもどりつゆきつ何を思案のあのとんぼ
ゆるくなつたる指環を見ても痩せたおまへの所為じやぞへ
雪にしらけし虚言（うそ）をば聞いて居たはうらみの積もるはし
夢でも可（よい）から持たいものは金のなる木と能（い）女房
雪のけはいをした梅よりも実は素顔が頼もしい
有形資本は失ふ迚も無形資本は離りやせん
夢の惚気（のろけ）を旦那に聞かれうつ、半分に聞く小言」（百十八頁）
夢になりとも眉毛をおとしぬしと相乗りして見たい
夢か現つか現つか夢かうつら〳〵と夢現つ、
雪に埋まぬ操の梅は解けて花咲く春を待つ

めノ部

目にはなみだをためながら愛想づかしは時の義理
滅法惚れたにや違ひはないが主しと違ふて主しの金
目顔で思ひを見せたいけれどきまりわるいがさきにたつ」（百十九頁）
目にはちら〳〵まぼろし現（うつ）つ忘れられぬが主のこと
目もとにさした嬉しき虹は疑ふ心晴れてから

みノ部

短夜を恨む私が心もしらず憎や宵から大鼾
道の時雨はなみだで来たが笑顔嬉しい初紅葉
味噌漉の底に溜し妾（わたし）が思漉に越れぬ此人目
見ずに逢ずに知ずにいたらこんな苦労は有まゐに」（百二十頁）
点す燈火を袂でかこひこちへ〳〵も口のうち
水にさくとていつかは実をもむすぶ事ある蓮の花
未練らしいと一つの枕投てグウ〳〵おほだぬき
満ればかげると悟つて見れば明けの烏もにくゝない
見猿言は猿聞か猿さるが見たり聞いたり饒舌つたり
見つきばかりのよひ玉虫は真実ないてはくりやせまい
見れば見る程思ひがつのり見ねば見ぬので恋病
民権論者の涙の露で頓て自由の花が咲く」（百二十一頁）
見限る心はさら〳〵ないが実は眼病で内住居
店にや親指奥には小指外にや人指しゆびが居る
水掛論でもしなけりや胸で燃ゆる思ひを消しにくい
容姿（みめ）も飾らず見上ぐる計り見る目まばゆき容姿形状（みめかたち）

しノ部

忍ぶ合図とひろふた石を吠る狗めに投つける
深の夜中に抜刀隊が切てはひこむ騒しさ」（百二十二頁）
私学校徒じやわしやないけれどまくら並べて寐るかくご
神経病ぢやと笑はゞ笑へゆめや恍（うつゝ）に主の顔

自主と自由の身をもつからにや人のちからは火輪船
忍び逢夜は私や思ひ鳥鳴子の音にさへ胸騒ぎ
白と黒とはわたしの胸に置てお前にゆづる勝
実正明白為換起請可為反古古無筈
（じつしようめいはくかはせきしやうほぐとなるべきはづはない）
実か不実か能く嚙分なちやら云おまへの其口で
写真で取のはそりや顔容（かほかたち）成ば心がうつしたい」（百二十三頁）
しぶい意見に天窓を柿の甘（うま）い口から詫ことば
初会からして帯まで解せ本におまへは罪な人
思案為換へて堅木に成れどまたも燃付やけぼくひ
じれて数へた月日もいまは短く、らすよあら世帯
実らしいと思ふたふみも酔て書れちや気に掛る
忍び足して閨の戸開りやいつか先手が攻て居る
実に困るよ天狗の面ニヤおかめの面でも来ば能（よい）
暫し別れと見送る主の後ろ立きる朝のきり」（百二十四頁）
忍ぶ妻戸をはづしてそつとたて、置たや人のくち
忍び逢ふ夜は雲間にいつた月も結ぶの神ご、ろ
自主や自由を唱ふる僕を束縛するのは恋ばかり
死んで侭なる御釈迦の身なら死んでつらあてしてみたい
渋ひ濃茶のふたりがなかも水をさ、れて薄くなる
茂げる木の葉に風さへなくば何も気を揉む事はない
実なやうでもおまへの浮気惚れた当座のひとさかり
初手は笑顔で中頃アレサ末は雲雨でだんまりば」（百二十五頁）
白い黒いの議論にり黄み赤い顔して青いいき
しのぶ恋路は髷紐かけて結ふにいわれぬけし坊主
じつと目もとに露をばふくみ蔭でしほる、朝桜
写真見るのは苦労の種よとは言へこれが捨てらりよか
しつぽりと濡れてほころぶ里の花雨がとりもつ縁かいな
四角な理屈を豈に用ゐんや円い世界に住むものを
妾（しよう）と云ふ字を分析すれば兎角浪風立女
消費するのを囂（やかま）しいふな消費や生産の目的じや」（百二十六頁）

ひノ部

一筋なはではいかない奴が三筋の糸には〆られる
人の恋路を笑ふた罰で今は我身が笑はる、
ひとりで思ふて手前で腹を立た机の破れ文
人を浮かした廓の花もいまじや堅木で実をむすぶ
一二三四（ひいふうみいよ）の手が遂はづれ転げ初めの手まりうた
人目あざむき切れたと見せてもとは切れないあをい草」（百二十七頁）
人にや七癖わたしの癖は来るといぬのがいやになる
左りつま取り履いたる下駄はころぶ〳〵と音がする
人に意見もしかねぬ主が人に云われて此しまつ
引けよ引け〳〵廻わせよ廻わせ税のいらない口車
人目忍んで恋路の関をこへてとふげの又苦労
人に気兼もお前のおかげあけ暮れ悔しい事ばかり
人が兎や角ふいふだち故へに曇りがちなる吾がこ、ろ
膝でつかれた背骨が胸へ廻り〳〵て癪の種」（百二十八頁）
人の意見も火水の責も思ひ断（き）られぬ恋の意地
百日紅ほどじらして置いてそして私をさるすべり
一夜首尾すりや十夜（とよ）さの苦労それに人目にやしげく見へ
広い御国をどの県までに蔓をははせる薩摩芋
独りの女を主しや極めかねていくたり女を捨てさんす
ひたと寄そひ抜身を握り殺してお呉れと鼻で息

もノ部

物に明るいひとほど兎角恋路の闇にはまよい込む
もてた貴殿に僥倖ながら僕は愍然床のばん
元結のきれてしまへば根も葉もないが聞けば聞く程はらが立つ
若しや主かと表を見れば憎や忍びの巡査さん
最早時間（じこく）と心で泣て無理に帰へすも主のため
元は野にさくす、きも今は世帯にくすぶる炭俵
若しや夫かと門の戸明けて見れば逃出す探訪者
持て見たいよ二人で世帯九尺二間の裏屋でも」（百三十頁）
文字は読めねど憚りながら客の鼻毛は能くよめる

せノ部

世間の手前で切るも然り而うして又出会茶屋

是非に今宵はある染川と待にまたる、色くらべ
西洋ブックと堅気の娘ゆだんして見りやほころびる
世間の女にお汝（まへ）の不実広告（しらせ）て浮気の錠おろす
せゝる火さへも蛍となりて逢わぬ夜毎に焦がす胸」（百三十一頁）
世辞で丸めてちやら〳〵云ふて口の車で送り出せ
世帯のつらさは露いとはねどせめてやさしい言葉など
せかずにお待ちよ時節がくれば咲かせて見せます床の梅
関は越したよ人目の関をあとは互の胸次第
世間はれては言わないけれど頓て女房と胸算用
西洋造りはをや馬鹿らしい数ぞへる天井の板がない

すノ部」（百三十二頁）

吸付烟草につゐ騙されておのが世帯を烟にする
好なお前についさしすぎておつとこぼせし米の水
進む開化にあかるい御代をくらうするのもお前ゆゑ
粋と不粋を烏も見分け可愛あほうと鳴き分ける
すゑが何時（どう）かと苦労になるは主のうは気と諸式高
酸も甘いもよくしるひとは浮世の辛みも嘗てゐる
墨とすゞりは仲よいけれど水をさゝれりや薄くなる
すねて返して〆切る障子みれんのすき間が二三寸」（百三十三頁）
好たお方に盃さゝれ酔はぬうちからあかくなる
末の寄る辺も定めぬ水に浮気心な月のかげ
末は添ふ身と気ばかり弓の月日たつのは矢のごとし
好かぬ男の親切よりは好いた男の無理がよい
粋な梅が香あだめく桜おくれて風情な藤の花
すねた此身がきゑたくなるよ他人のうわさを実にして
好男（すき）のいぬ座は三味線までが調子はづれて逢ひにくい
好きと嫌ひが一度に来れば箒たてたり倒したり」（百三十四頁）
好いた手前と義理ある女房心二つに身は一つ
好きと嫌ひの差別はないよ私しの赤縄（ゑにし）は紙幣（ペラ）まかせ
吸付烟草は手管のてづま嘘と実を吹わける
炭と炭とに相撲をとらせ主の土俵入り待つ火鉢」（百三十五頁）
明治廿六年七月廿日印刷

明治廿六年七月廿七日発行
版権所有
編輯兼発行者
大阪市南区鰻谷西之町二百三十七番屋敷
斎藤万治良
印刷者
大阪市西区靱下通一丁目四十八番屋敷
瀬戸清次郎
発売書肆
大阪市東区備後町四丁目
吉岡平助
神戸市元町通五丁目
吉岡支店」（奥付）

※ここに翻刻した資料は、全て菊池真一所蔵本である。

Dodoitsu（Japanese Limericks）

KIKUCHI Shinichi

Abstract : This is a presentation of *dodoitsu*（Japanese limericks）. *Dodoitsu* is a song sung to the accompaniment of a *shamisen*（*samisen*）. It was popular in the Edo, Meiji, Taisho and Showa periods.